

---

# あなたは私の世界      （利知未シリーズ番外 5 ）

茅野 遼

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

あなたは私の世界

(利知未シリーズ番外5)

### 【Nコード】

N2727E

### 【作者名】

茅野 遼

### 【あらすじ】

長い長い、結婚までの物語、完結編です。『素敵な勘違い』の、続きとなります。結婚の時期を決めた利知未と倉真は、倉真の実家・館川家の強力な(?)バックアップの中、式までの忙しい時期を過ごしていた。そして、漸く二人は……。

## 〈そして、結婚へ〉

### 1 〈研修医・二年 十一月〉（前書き）

時代背景は、2000年ごろです。本文中、実在の地名も出て参りますが、フィクションです。

利知未と倉真の物語、完結編を、ごゆっくりお楽しみ下さい。

## 《そして、結婚へ》

1 《研修医・二年 十一月》

《そして、結婚へ》

1 研修医・二年 十一月

—

十一月を迎え直ぐの土曜休みに、倉真の母親から連絡が来た。利知未と倉真の式場探しは、早速、座礁してしまったと言う。

五月の休日で大安と重なる日は、殆どの式場で既に埋まっているらしいと言っていた。

「六月の末なら、空いている所があるのだけれど……」

倉真の母親が残念そうな声で、そう報告してくれた。

「そうですか。……私は、それでも構いませんが。倉真さんと、もう一度、話をして見ます」

「それで決まったら、また連絡を頂戴ね」

そう言われて、利知未は返事をして受話器を置いた。

倉真は今日も、バイク整備に精を出していた。最近の休日は出掛ける用事が無い限り、将棋のテキストを開いているか、愛車を弄っているのだ。

偶には遊びに行けば良いのにと、思わない事も無い。

利知未も、休みの度に連絡を寄越す倉真の母親が気に掛かって、折角の休日に出掛けるのも、考えてしまいがちだ。

そろそろ、ストレス解消が必要かも知れない。

昼食を済ませに上がって来た倉真へ、早速、母親から連絡があった事を伝えた。

「また、電話が掛かって来たのか？」

倉真は、流石に少しウンザリして来た。

「自分達で、もう少し積極的に行動するべきかもね」

「お袋が乗り気過ぎて、口出し出来ねーよ」

「…それも、解る」

二人で、小さく溜息をついてしまった。

「けど、そこまで色々して下さること自体は、有り難い事だから…」

…」

「お前は、俺以上に口出し出来ないんだろ」

「解ってるなら、もう少し考えようよ？」

利知末にもストレスが溜まり始めているのは、見ていて気付いた。

「もうチヨイ、本性を出して見るか？」

「どう言う意味？」

首を傾げた利知末に、倉真がニヤリと笑みを見せる。

「考え無し同士で、突っ走って見るとか」

これまでの自分達の事を指して、倉真が言った。軽くふざけた口

調に、利知末が少々、剥れてしまった。

「他人事、過ぎ」

「頭使うのは、苦手なんだよ」

そう言って、倉真は話を変えてしまった。

「チヨイ、ストレス解消が必要そうだな。明日、走りに行くか？」

「お母さんから、また連絡が来るかも知れないでしょ？」

「俺の携帯番号、教えて置きゃイイだろ。出たくない時は出なきゃ良い」

「あたしの番号は、余り人には教えられないからな」

「イザと言う時の連絡用だろ？ 当たり前だよ。長話していて、患者の急変に間に合わない様じゃ意味が無いんだろ」

倉真も頭が悪い訳では無いらしいと、改めて利知末は感じてしまった。

「どうして、お父さんに将棋、勝てないんだろっね？」

「何で、そう言う言葉が返って来るんだ？」

倉真は利知未の呟きを聞いて、変な顔をしていた。

翌日、出先から倉真が携帯電話を使って、実家へ連絡を入れた。

自宅に居ない時はこちらへ連絡を入れる様に言って、自分の電話番号を母親へ伝えた。それで、利知未は少しだけ気が楽になった。館川一家は好きだと思うが、やはり自分の立場的には、緊張してしまう。

電話を終えた倉真に、利知未が聞いた。

「お母さん、何だって？」

「判ったと言っていたけどな。お前も携帯電話なんか持つ様になったの？ って、驚かれた」

「そっか。…じゃ、今日はのんびり花見でも、堪能して行こうか？」

「おお」

駐車場から、園内へ向かって歩き出した。

二人は昨夜の晩酌時間に、今日の行き先を思い付いた。十一月の初旬は、秋桜の時期だ。思い出して、久し振りに城峰公園まで行って見ようと言う話になった。今日も利知未手製の、弁当持参だ。

「もつと近ければ、秋の花見酒にもなるんだけどな」

「そうだな。仕方ないだろ、ここまでは結構、長距離だ」

「軽く飲んで、酔い冷まし何かしてたら、帰るのが夜中になっちゃうもんね」

仲良く手を繋いで、話しながら歩いて行く。弁当が入ったザック

は、倉真が肩に掛けて持ってくれていた。

「けど、ここへ来たら、何時かボートに乗った公園にも行きたくなっちゃったな」

「次のツーリングは、そっち行くか？」

「そうだね。けど、冬は止めようね？」

「また、風邪を引いちまいそうだな」

「ボート乗って、池に落ちちゃう？」

あの時の事を思い出して、二人は笑った。

「あそこへ行ったら、また蕎麦掻きでも食いてーな」

「十割の蕎麦粉があれば、家でも作れるよ？ 簡単だから」

「あの公園で食うのに、意味があるんだよ」

「そう？」

「ああ」

頷いた倉真を見て、利知未も少し考えて、頷いた。

「そうだね」

あの場所で、倉真の事を、それまで以上に意識し始めた。

倉真はあの時、初めて食べた蕎麦掻きの素朴な味に、改めて利知未の素の部分、垣間見た気がした。

「あたし達には、二人の思い出の場所が、一杯あるな」

利知未が、そう呟いた。 倉真も利知未の言葉に、頷いてくれた。

「始めは、FOXだったね」

「あの、ライブハウスだったな」

「それから、倉真が宏治と仲良くなって、あの街へ、良く遊びに来始めた」

「FOXのセガワには、すっかり騙されちゃったぜ」

「…一年くらい？ 正体がバレるまで」

「俺は、五月の復活ライブから、お前を見付けたんだ。 一年と三ヶ月位の間、騙され続けたよ」

「そっか。 だから、かな？」

「何が？」

「倉真が一番、あたしの事を受け入れてくれるまで、時間が掛かつ

てた」

「憧れ方が、ジュンや和尚と違い過ぎたんだよ」

「そんなに、憧れてくれていたの？」

「おお。男として、人生の師匠に出会った位は、思ってたぜ？」

倉真は、にやりと笑ってやった。

「今は、あの頃のお前を思い出すが、難しくなったよ」

落ち着いた表情に戻って、そう言い足した。少し表情が曇ってしまっていた利知未は、その言葉で笑顔になった。

「あたし達には、大事な仲間も沢山いるね」

「幸せな事だと、思うぜ？」

「うん。…だから、考えたんだけど」

「何を？」

「披露宴に、皆に来て貰うのは不可能でしょう？ 二次会で、出来る限りの友達を呼び集めたいなって」

「随分、人数が多くなりそうだな」

「場所も、難しくなっちゃうんだけど。五月に、松尾さんと皐月の結婚式二次会で懐かしい人達に会えて、凄く嬉しかったんだ。

だから昔から仲良くしてくれた仲間達も、久しぶりに会ったら嬉しいのかな？ と、思ってた」

利知未の意見を聞いて、倉真は少し考えてから、言ってくれた。

「会場、探し始めるか？」

「うん。結婚式と披露宴については、兎に角、慎重しく済ませて貰う話で、お母さん達の意向は、なるべく聞いて上げててもいいかな？ って」

「お袋が益々、調子に乗っちゃまいそうだな」

「それも、良いんじゃない？」

ニコリとして、利知未が言った。繋いでいた手を離して、倉真は利知未の肩を抱き寄せた。

「マジ、イイ嫁なんだよ、お前は」

「その呼ばれ方は、まだ少し、早い気もするけど……」



利知未は少し、照れてしまった。

それから展望台のベンチで、二度目に来た時と同じ様に弁当を広げた。高台から見える景色は、相変わらず綺麗だった。

「次来る時は、あのダムまで行つて見るか？」

「ダムの見学つて、小学校の社会科見学以来だな。させて、くれるのかな？」

「問い合わせて見りゃ、解んだろ？」

「じゃ、次の機会にでも問い合わせて見ようか」

「この年になつてから行くのも、何だな……。先の約束にしないか？」

「先の約束つて？」

首を傾げた利知未に、倉真が照れ臭そうに答えてくれた。

「何時か、ガキが出来てから。……家族旅行でつてのは、どうだ？」

倉真の言葉に、利知未は嬉しそうに微笑んだ。

「良い、約束だね。……じゃ、後十年後くらいかな」

「出来れば、十年は待ちたくないけどな」

「……そんなに早く、子供が欲しい？」

「ガキは嫌いじゃないぜ？」

「激甘なお父さんに、成っちゃいそうだな」

「その分、お前が教育ママになつてくれ。俺はガキに嫌われない、イイ親父を目指すから」

「それ、ズルくない？」

「そーか？」

利知未に突っ込まれてしまったけれど、倉真は、すっとぼけて置いた。

帰宅して、倉真が自宅から実家へ、連絡をしてくれた。

昼間、公園で話していた事を、利知末の事を考え、気を使いながら報告してくれた。

「じゃ、結婚式と披露宴は、私と一美が、主導権を貰ってしまつて、構わないのね？」

「おお。その代わり二次会は、こつちで全部、手配する」

「そう。それなら、もう少し良く話し合いたいわねえ。次は何時なら、来られそうなの？ あんたは居なくても、利知末さんだけでも構わないけど」

「何だよ、それは」

「結婚式は花嫁が主役なのだから、新郎は引き立て役に徹してくれて構わないと言う事よ」

「…ま、それも一理ある」

「一理じゃなくて、それが全てなのよ」

母親は嬉しそうだ。十歳どころか、二十歳は若返ってしまった。

「利知末に言つとくよ」

「宜しくね」

そして母親から何時も通りの言葉を貰つて、電話は終わった。

近くで聞き耳を立てていた利知末が、相変わらずの親子の会話に、声を殺して笑っていた。

電話を終え、肩の力が少しだけ抜けてくれた。

「けど、本当に任せ切りにしちゃって、良いのかな？」

何時も通りの姿勢で晩酌をしながら、利知末が呟いた。

「精々、我が儘、言つてやってくれ。その方が、お袋も張り合いが出る」

「良いの？ あたしの好みだけ押し通しちゃって」

「元々、結婚式と披露宴には、あんまり拘って居なかつたんじゃないか？」

「そうだけど。でも、それなりには考えていたんだよ」

「そうなのか？」

「だって、お母さん達だけに迷惑掛ける訳には、行かないでしょ？」  
「迷惑どころが、大喜びだぜ」

我が母親ながら、その点には辟易していた倉真だった。

利知未がソファから立ち上がり、付箋が着いた結婚情報誌を持って来た。

「付箋だらけだな」

倉真はその雑誌を一目見て、目を丸くしていた。

「料理、会場、ドレス、企画、金額、引き出物、って、考える事は一杯有るんだよね。あたしも、雑誌見てみるまでは余り知らなかったけど」

「成る程」

「招待客のリスト、席順、祝辞の以来、司会者の選択。招待状の配布時期、式場への連絡と、支払い時期。その他、色々。…だから昨日、言っていたでしょ？ もう少し積極的に行動するべきだって」

「お前、何時の間にそんなにチェックしてたんだ？」

「夜勤の仮眠時間も、使ったよ。あと、倉真がお風呂入ってる時とか、一人の休日とか。料理やドレスは、お母さんに相談しながらで良いと思うけど。招待客のリストは、自分達の仕事。倉真の親戚関係はお母さんに聞くしかないけど、職場の仲間は何処まで呼ぶのか？ とか、祝辞は何方に頼むのか？ とかは、自分達しか解らないでしょうが」

全く考えていなかった倉真の様子を見て、利知未は呆れ半分、膨れてしまった。倉真は利知未の進言に、ただ、ただ、辟易してしまっていた。

「解った。これからは、もう少し考える。膨れるな」

「ホントに？ 倉真、協力してくれる気は、ある？」

「…ま、おいおい、少しずつ、な？」

「全くもう。…こう言う事には、頼りがいが無いな。男は」

「仕方ないだろ。興味も殆どねーからな」

「興味とか、そう言う問題じゃ無いでしょ？ 他人の結婚式じゃ無いんだから。あたしだって、興味は殆ど無かったんだよ？」

「悪かった。マジ、これから考える」

この件に関しての言い訳は、逆効果だと悟った。倉真は戦術を変える事にした。兎に角、謝っておくしかない。

態度を変えた倉真を、利知未はジトリと睨んでやった。

「本当に、反省してくれてる？」

「反省してます。さて、誰、呼ぶかな？」

話を合わせてみる事にした。

倉真の態度は白々しい。その態度を見て、利知未はまた、プツと頬を膨らませた。

その夜、利知未の膨れっ面は中々、元に戻ってはいくれなかった。

## 二

翌週の平日休みに、利知未は倉真の実家まで一人で行った。やはり一人での訪問は、まだ少し緊張してしまう。

それでも、式・披露宴の相談をする為には、仕方が無いと思う。日曜日の倉真の様子を見る限り、一緒に行っても、余り役には立たなくてくれそうも無いとも、悟ったからだ。

倉真の母親は、一人で尋ねて来た利知未を喜んで迎えてくれた。

父親は店に出ている。検査の結果を聞いてから、酒の量も食事量も気を付ける様になり、最近では、背中での痛みを訴える事もなくな

って来たと言う。

今の館川家、関心事項は、『長男の結婚式』のみだ。母親は、手薬煉引いて待っていた。

早速、居間へ通され、一美が購入して来た結婚情報誌と、母親があちこちから集めて来た幾つもの式場のパンフレットを、目の前に並べられた。

「お金は、私達も出来る限りの協力をしますから。余り派手にしない分、お料理や引き出物は、ちよつと張り込んでも構わないわね？ 衣装も、実際に行つて見てみないと解らないけれど。それは、倉真にも行つて貰わないとならないから、今日は他の事を相談しましょう？ 利知未さん、考えていることや、悩んでいる事はない？」  
喜々として一気にそこまで言つて、利知未に問い掛けた。

「何から何まで、有り難うございます。私が考えて来たのは、どの辺りまでご招待すれば良いのか？ と言う事です。なるべく内輪の方達だけで、質素にして頂ければと思つているのですが」

「こちらの親戚については、倉真とも話をしなければならぬわね。利知未さんは、どの辺りの方達までの検討をつけているの？」

「私は、親戚も少ないので。これまでにお世話になった、ご家族が居ります。そのご家族と、後は、下宿時代の大家さんご夫婦でしょうが」

マスター夫妻は是非、呼びたい処だ。里沙と、朝美も数に入る。

「お仕事の関係と、お友達は？」

「研修のお世話をしてきている方と、薬局に親しい友人が居ります。後は、高校時代の友人と、中学時代の友人を一人ずつ」

「それだけで、本当に良いの？」

「はい。後の友人は、二次会にと考えておりますので」

「そう。それなら倉真の方も、それ位かしら？」

「倉真さんは、会社の社長さんご夫婦と、友人夫婦を考えて居るようです」

それは、この数日間で無理矢理、倉真に捻り出させた招待客だ。

友人夫婦は勿論、克己だ。中学、高校時代の友人は、利知未と同じく二次会メンバーにする事になっている。

「そう。それなら、後はこちらの親戚関係で良いのかしら？」

母親は、頬に手を当てて考えている。

「次回は、倉真さんも一緒に」

「そうね。後は、何か考えている事は？」

「基本的には、お母様のご意向に出来る限り従わせて戴きたいと思っています」

そこで、母親主導での相談が始まった。

その日、夕食まで誘われたが、倉真の夕飯準備をすると断って帰宅した。

アパートへ到着したのは、七時過ぎだった。後三十分もすれば倉真が帰宅する時間だ。簡単に出来る丼物で、済ませてしまった。

夕食時間に、今日の話をした。

「今度、行く時は、倉真も一緒に行って」

「俺は要らないんじゃないか？」

「招待客の中から、何方に祝辞を頼むの？ 席順は？ 衣装を探しに行く時は、二人で一緒じゃないとバランスが取れないでしょ？」

引き出物や料理については、お母さんが候補を幾つも持つてるから、決定は揃ってないと」

「…面倒、」

「何？」

面倒臭い、等と言ったら、また利知未に叱られてしまう。倉真は慌てて口を噤んだ。

「何でもねー。今日の親子丼は、何時も以上に美味しいな」

「ありがと」

倉真の言いかけた言葉に、突っ込むのは止めにしてやった。

母親の意向の一つに、引き出物の中に夫の和菓子の折を入れたいと言つ意見があつた。それに合う様に、玉露も小振りな茶筒で一缶。

玉露はかなり高くつく筈だ。その分の金額は協力すると言つていた。お客様に供する時に仕えそうな、感じの良い湯のみや絞り置き、その辺りを器の引き出物に考えていた。

後は一美の意見も入れ、カタログの引き出物も一つの候補だ。会場候補は十力所以上も考えてあつた。これから何日か掛けて、一つ一つの会場を下見をして決めたいと言っている。その時にはどうしても、倉真にも立ち会つて貰わなければならない。

利知未は突っ込むのを止めにしてやった代わりに、話を進めてしまふ。

「会場が決まってしまうえば、貸衣装の目処も着くから。予算はどれくらいが良いのか、とか。改めて考えておいてと、倉真にも伝言」

「予算、ね……。普通はどん位、掛かる物なんだ？」

「大体、百万から二百万？」

「貯金は？」

「二人の貯金なら、来年の五月には百八万は貯まる予定。プラスで、個人的に貯めて来た分から三十万位までは、出せない事は無いけど」

「それなら、俺から二十五万出す。それ位が、こつちは限界だな」

「約、百六十万か。二次会の費用もあるから、出来れば百三十万以内で収めたいな。二次会に三十万以上は、使つてしょ？」

「会場によるな。内容にも」

「それ、考えないとな。今日は、そつちを進める？」

「まだ先の事過ぎる感じがして、ピンとは来ないけどな」

「半年何て、あつと言う間だよ。それに兎に角、予算が決まらないと何も進まないし」

「……そりゃ、そーだな」

つくづく、ウンザリして来てしまった。

倉真の気持ちは、その表情で、利知末にはすっかりお見通しだ。

「自分達の結婚式って意識、ちゃんと持ってる？」

「後は、祝儀に掛けるか？」

利知末に鋭く突っ込まれて、倉真は誤魔化した。

「それしか、無いかな？」

「おお。……お代わり、あるか？」

「そう来ると思った。二人前、余分に用意してあるよ。待って」

自分の箸を置き、五分ほどで倉真のお代わりを用意して、出してやった。

食事を終え入浴まで済ませて、のんびりと晩酌をしながら、テーブルの上には電卓とメモが置かれている。

「二次会って、何人くらい来て貰いたいの？」

「…何時ものメンバーと、職場は保坂さんや、田淵も呼んでやるか。後は高校ン時の悪ダチが、4人居るな」

「あたしは、……多過ぎて、考えられないかも」

そして、今まで親交があつた友人達を思い出した。

一番古い所で、中学時代の団部メンバーからだ。

「貴子は披露宴にも来て貰いたいけど。アダムのもメンバーも居るな。都合が合えば、樹絵は呼びたいでしょ」

「それ言ったら、下宿メンバーで冴吏ちゃんだったか？ 呼びたくないか？」

「そうだね、冴吏には例の件で世話になったし」



世話になったと同時に、恨みも少々、あつたりする。

「透子も、披露宴から出て貰いたいから。後は、出来るなら、F OXの当時のメンバーも来てくれたら嬉しいんだけど……」

「何人、浮かんた？」

「ざつと見積もっても、二十人以上……？」

「それで済むのか？」

「……うーん、済まないかも知れない……」

「克己達は、二次会まで出て欲しい所だが」

「<sup>まなぶ</sup>学も、五歳か六歳でしょ？ 遅くまでは無理じゃない？」

「俺の方は、十人程度で収まると思うぞ？」

「最低、三十五人は居るね。…それ位なら、会場も見付かるか」

「それで、収まりやな」

「でも、披露宴みたいのに、雞壇に座っている見たいなのは嫌だな」

「確かに、どうせならワイワイ騒ぎたいよな」

其々の友人達を思い出して、その思いに至った。

「やりたい事は、あるんだけど。……お金、掛かつちゃうしな」

「何をやりたいんだ？」

「……お寿司の、出張カウンター」

「それは、この前の、アイツの事を言っているのか？」

「倉真は、嫌……？ でも、先輩の出現で、倉真から結婚式を早めたいって、言い出したでしょ？ ……特上のランク付け、してくれ

た訳だし。……最後まで見届けて貰いたいのは、あたしの我が儘かな？」

小さく首を傾げて、利知未が聞いた。

「……そりゃ、解らなくは無いとは思うがな」

「凄く、お世話になった人だから。本当なら、披露宴でやって貰いたい位だけど……。それは、お母さんにも悪いし」

成るべくなら、自分の母親の意向に従おうと言ってくれた利知未には、やはり感謝もしている。それ位の我が儘なら、聞いてやっても良いのかも知れないと、倉真は思った。

「……仕方ないな。会費、高くするか？」

「それも、本当はアンマリやりたく無いんだけど……。本番の式と披露宴を、どれくらい安く済ませられるかにも寄るよね」

「場所は、どうしたいんだ？」

「居酒屋って訳には行かないし、どっかの公民館みたいな所を貸して貰うのも、一つの手だけど」

「俺は、一つ意見があるんだけどな？」

「何？」

「お前を始めて見つけた、あの場所で」

「……ライブハウス？」

「やっぱ、無理か？」

「……貸し切りは、出来る筈だけど。そしたら、ライブでもやりたくなっちゃうよ？」

後の言葉は勿論、冗談だ。けれど、一つのアイデアが浮かんで来た。

「いつその事、現在のFOXのミニライブでも、やってもらっちゃったりして……？」

「二次会に、ロックのライブか？」

「今は、何やってるんだろう？」

「メタルや、ヘビィメタルだったりしてな」

「それは、流石にキツイな」

「聞いてみりゃ良いじゃねーか？」

「真面目に言ってる？」

「それも面白そうだ。三十分位やって貰って、後はお前のバースデー・ライブやった時みたいに、パーティーに早代わり……。ってのも、良いんじゃないか？」

「……面白そう、ね。……確かに、一番あたし達らしい、お披露目になるかも知れないけど」

「で、パーティー時間に出張寿司カウンターも、良いんじゃないか？ アソコなら、会場費はそんなに掛からないだろ？」

「当時の音楽ライブで、七、八万って言ってたから」

「今なら差し詰め、十万くらいか？」

「そんな物なのかな？」

「出張カウンターで、二十万位だろ。三十万。後は、FOXへの謝礼が、やっぱ十万くらいか？ 予定の三十万じゃ、出来そうにないな」

「会費制にすれば、一人三千円でも十万は入るから」

電卓を叩く。取り敢えず、三十五人計算だ。

「四十万位か？ 後、何人増えるかは解らないけどな」

「式と披露宴、どうにか百三十万以内で、組み立てて貰おう」

「FOXのリーダーとは、連絡が取れるのか？」

「自宅の番号、分かってるし。もし家を出ていても、実家で聞けば分かるかな？ まだ、あそこのライブハウスでやってるのかな？」

「？」

「それ以前に、FOX自体、まだあるのか？」

「…兎に角、聞いてみよう」

「目処、着いたな」

「上手く行けばね」

「んじゃ、今夜はもう寝ないか？」

「そうしようか」

テーブルを片付けて、寝室へと引っ込んだ。

三日後の日曜日、昼間の内にFOXのリーダー・久元へ連絡を入れてみた。リーダーは自宅に居た。

「セガワか？ 随分、久し振りだな！」

電話の向こうで、懐かしい声が呼び掛けてくれた。少し声は変わった感じがする。FOXロック期の解散当時で、二十二歳だ。

現在は、三十二歳になっている計算だ。まだバンド活動自体を

やっているかどうか、怪しい所だ。

「久しぶり。長い間、ご無沙汰でした」

利知末も、あの頃よりも女性らしくなっている。久元は利知末の声を聞いて、こう言った。

「口調が、優しくなった感じだな。今、…二十六か。いい女に、なれたか？」

「それは、自分では解らないけど。元気にしてましたか？」

「おお。数年前に、チョイ身体を壊したんだけどな。今は復活したよ」

「そうだったの？じゃ、今はもう、バンドなんかやってないか」  
それなら、二次会の司会でも頼めないかと、瞬間的に考えた。

「と、思うだろ？……駄目だな、ライブハウスが忘れられなくて」  
「じゃ、やってるの?!」

びつくりだ。詳しく話を聞いてみた。

「身体壊した所で一端、止めたんだ。三年前の夏頃か。一年経って身体が復活したら、居てもたっても居られなくなった。で、拓に声掛けて新しいメンバー見つけて、今はロックやってるよ」

「ロック?!」

「あの頃が一番、FOXの良い時期だったからな。体力的にも年齢的にも、止める前までやってたメタルは、キツイ物があるだろ？」

「身体は、大丈夫なの？」

「やってないと、返って調子が狂うよ。セガワが残した曲も、偶にやってるよ。……セガワは、オレ達に沢山の曲と思い出を残してくれた」

感謝しているよ、と、言ってくれた。

「そう言われると、何か、照れ臭いな」

「シャイな所は、変わらないか？で、どうしたんだ？またバンドでもやりたくなったとか？」

問われて、来年の結婚の報告をした。

「そうか！おめでとう！相手は？」

「リーダーも、絶対覚えてる。初対面から、あの場所で騒ぎを起こしてくれた、ヤンチャ者だから」

「初対面から？」

「その数カ月後、トンでもない大喧嘩を、ライブ中に起こした少年」

「……坊主頭と、モヒカンが居たな。脱色したのも」

やはり記憶の中には、あの頭が残っている。

顔も覚えているかも知れない。真面目そうなのが、剃髪。釣

り目がモヒカン。タレ目が脱色。

「当時モヒカンだった、トンでもない悪ガキ」

あの頃の倉真を思い出して、利知未も小さく笑ってしまった。

「アイツが、結婚相手?!」

「そうです。……今は、真面目になってるよ?」

「また、何と言うか……。トンでもない縁だったな」

「だね」

そして、二次会の相談を始めた。

「リーダーには、司会も頼めないかと思ったんだけど」

「正式に、依頼をしてくれているのか？」

「はい。お礼も勿論、用意します。会場費は、こちらで持ちま

す。その他の費用も。お引き受け下さいますか？」

「当たり前。礼なんか無くても構わない位だよ」

「有り難う、リーダー」

利知未は、心から嬉しいと思った。

「改めて一度、お会いしたい所だけど。まだ、あの場所でライブ

やってますか？」

「やってるよ、半年前から復活したんだよ。毎週金曜日から、土

曜日になったけどな。メンバーの仕事の都合で」

「平均、何歳？」

「メンバーの平均年齢か? 29・5歳。あの頃のFOXと、約

十歳違うな」

「年、取ったね」

「お互い様だよ。あの、セガワが…、いや、利知未が結婚する年だ」

「……うん、そうだね」

「今日も、午後から練習だよ。連絡と依頼、有り難う」

「こちらこそ、即決してくれて、どうも有り難う！」

「最高のライブを、約束するよ」

「うん、期待してるよ。リーダー！」

そうして、電話を切った。

倉真は今日もバイクを弄っている。まだ昼前だった。リーダーには、一通りの家事を終え、仮眠を取り始める前に連絡をしていた。

利知未はアパート外の駐輪場へ、嬉しい知らせを伝える為、急いで部屋を出て行った。

利知未からの報告を聞いて、倉真も驚いていた。

「あの人のバイタリティーには、感心しちゃうな」

「ね。今度、一度ライブを見に行こうよ？ 今は土曜日だって言っていたから、二人の休みが重なる日に」

「そうだな、挨拶しに行くか」

「うん。…ほっとしたら、眠くなってきた」

欠伸をする。その眠そうな顔を見て、倉真が笑顔になる。

「昼は適当にするから、のんびり眠ってろ」

「そーさせて貰うね」

その時、倉真の携帯が鳴った。

「誰？」

「…お袋だな」

ディスプレイを確認して、倉真が答えた。

「あたしに用事かな？」

「俺が聞いとく。お休み」

そう言つて、電話を受けた。

利知未はそつと足音を忍ばせて、アパートの外階段を上がつて行った。

FOXの現メンバーは、リーダー久元からの話を聞いて、喜んで引き受けた。

「セガワが結婚か……。おれ達も年を取る筈だな」

昔からのメンバー・拓は、感慨深げに、そう呟いた。

「結婚式の二次会にライブつて、面白い事を思い付く人だな。その、元・ヴォーカルのセガワつて」

現・ヴォーカルは、目を丸くして感心していた。

### 三

月末の土曜日に、二人は、現在のFOXのライブを見に行った。

当時と違って、一晚の出演4バンド中、三番目に始まった。時間も二十一時過ぎからだ。

チケットはこの二週間の内に、もう一度、利知未から連絡を入れて取り置きにして貰った。

二人は、約十年振りにライブハウスへ足を踏み入れた。利知未は大学受験の前に、一度だけ来た事があった。それでも、八年振りだ。

この時間になると、当時のFOXを見に来てくれていたファン達位の年齢の客も、少なくなり始めていた。現在のFOXファンは、社会人も多かった。

久し振りのライブハウスで、当時の事を思い出し、利知未はモスコミニールを手に取った。それを見て、倉真が言った。

「お前、昔からそれだったな」

「うん。倉真は、あの頃からビール？」

「酒の種類も、アンマ解らねーガキだったからな」

カウンターの隅に腰掛けて、ステージ上のバンドがFOXに切り替わる迄の時間を、のんびりと待った。

FOXのステージが始まると、リーダーはステージ上から、利知未たちの姿を探した。

カウンターに腰掛けている、様子の良い男女の二人連れを見つけた。客席は暗くて、顔は良く解らない。

今日、利知未が来る事は解っている。始めの曲は、懐かしいセガワ初ステージの、あの曲を演奏してくれた。

現ヴォーカルの声に合わせて、音は低めにアレンジをしてあるが、偶にこの場所で、この曲を演奏すると、数人残っている昔からのファンが、盛り上げてくれる。そこから新しいファン達にも、浸透していった。

中学時代の利知未のピュアな感性は、今、演奏してみても新しかった。

「……懐かしいな」

「この曲は、初めて俺がセガワを見つけた時にも、やっていたな」  
「うん、演奏したよ。……長い時間、見つめてくれてたんだ。」

「……ありがと」

ニコリと、利知未が微笑んだ。

その顔は、始めてこの場所で見たとセガワとは全く違う雰囲気なの、



女性らしい綺麗な笑顔だ。

「…今じゃ、信じられねーな。あのセガワが、この利知未だとは」

「そう？ 内面は、全く変わってないつもりだけど」

「随分、変わったよ」

曲が終わり、リーダーのMCが始まった。

今日、ここで。

リーダーは、あの頃の事を、昔からのファンと利知未本人に、謝りたいと思っていた。

相変わらず、リーダーのMCは楽しかった。会場から笑い声が響く。その内に、真面目な顔になったリーダーが、言い出した。

「おれ達の事を、昔から知ってくれているファンの皆には、是非とも謝らなければならぬ事があつたんだ」

会場が少しざわめいた。

「もう、十年以上も前になる。あの頃のFOXは、今と同じロック期だった。FOX史上、一番、盛り上がっていた時期だよ。

覚えてくれている人、挙手！」

会場から、ぱらぱらと手が上がる。俺も、私も、と言う声も、漏れてくる。

「サンキュ。はい、手、下ろして！……あの頃、FOXと一緒に盛り上げてくれていた、美少年ヴォーカル、セガワ。覚えてる？」

肯定の返事が、客席から上がった。

「最高に、良いヴォーカルだったよ！」

女性の声が、そう言った。

利知未は、ドキドキし始めた。

「……リーダー、何を言うつもりなんだろう？」

呟いて、不安そうな顔をする。その利知未の肩を、倉真がそっ

と引き寄せてくれた。

「心配すんな。何があっても、俺が守る」

そう、囁いてくれた。

利知未は小さく頷いて、ステージ上のリーダーに注目し直した。

「彼。イヤ、彼女が。今、この会場に来てくれている」

客席がざわめく。

え？ ミスターレディ？ などと言う、頓珍漢な声が上がっていた。それに小さく笑みを返して、リーダーが続ける。

「ミスターレディじゃなくて、正しくミス、だったんだ。彼女、

セガワは、おれ達の勝手な都合で作り上げられた、虚偽の美少年。

本当は、初ステージ当時、まだ十四歳の女子中学生だった……！」  
嘘だ、と言う声が上がった。

利知未はビクリして、身を竦めた。

「けど彼女が、セガワとしてこのステージに立ってくれていた二年ハケ月は、おれ達FOXも成長出来た。そして、素晴らしいライブの思い出を数多く、残してくれた。おれは、言葉には表せないほどの、感謝をしている」

ざわめきながら、セガワの姿を探す客の様子が、一番後ろのカウンター席に座っていた利知未と倉真の目にも、良く解った。

「だから、謝らなければならないのは、彼女の性別と年齢を偽らせた事に対して。それを信じ続けてくれた、ファンの皆に対して。……本当に、済まない事をした」

ギターを下ろして、リーダーは最敬礼で頭を下げた。

「ただ、ライブは、夢のような空間だ。現実に疲れた時、悩んでしまった時、あるいは、ただ騒ぎたい時。単純にオレ達の音を、楽しみたいと感じてくれた時。この空気の中で、音の中で、気持ちをリフレッシュさせて、あるいは歌詞に元気を貰って、また、明日からの現実に向かう気力になる。その意味で、あの夢のような

数年間を大事な思い出として、大切に心に刻み付けてくれているのなら……。言えた事じゃないが、……許して欲しい」

顔を上げて、そう言っ、会場全体とカウンター席に視線を戻す。「彼女はFOXを止めた後、ライブ界から足を洗っていた。ついこの前、久し振りに連絡をくれた時、新しい出発への喜ばしい報告を受けた」

ニコリと微笑んで、恐らく、あの二人だと辺りをつけて、リーダーが言う。

「セガワ、それと、そのフィアンの二人！……何時までも、幸せに。今日ここで、偽りのセガワは居なくなる。これから先の二人は正真正銘、男と女として、出来ればファンの皆の祝福も受けて貰えたら、嬉しいと思う。……罪は、おれにあるのだから」

暫らく、会場全体が静かになった。利知未は動けなかった。

倉真の手に、力が籠もる。

ぱらぱらと、拍手が聞こえ始める。

「あの頃のFOXは最高だった。あの思い出をくれたセガワにも、幸せになって貰わないと罰が当るよ」

「私達も来年、結婚式だから！」

カップルの声が上がった。会場全体から、おめでとつうの音が響いた。

「ここで、あの頃のFOXを見て、同じファン同士で付き合いが始まったから。始めは友達だったけど。……だから、私達からも祝福を！」

そんな言葉が、投げられた。

「もう時効だ、時効！」

別のファンの声上がり、肯定の拍手と、声が。会場に響く。

利知未の目から、涙が零れた。

「……イイ、人達だな」

「……うん」

倉真の手が、軽く利知未の肩を、ポンポンと叩いていた。

「有り難う！ 話が、長くなり過ぎた！ 次の曲、聞いてくれ！」  
リーダーが声を上げる。今のFOXの音が、会場全体へ広がっていった。

ライブ終盤になり、利知未は倉真と共に、ステージに上げられてしまった。

ファン達から祝福の聲が上がり、久し振りに一曲、聞かせて欲しいとリクエストを受けてしまった。

「セガワ、凄く綺麗ね……！」

ファンの一人から、そんな声が漏れた。

利知未は用意のコード譜を見て、懐かしい曲から一曲だけ、今の声で、会場のファン達に感謝の思いを込めて、その歌声を披露したのだった。

## 2 研修医・二年 十二月

—

瞬く間に、一年は過ぎてしまった。

FOXのライブを見に行った十一月の下旬を過ぎ、二次会の予定が決まり始めた事を受け、結婚式の予算の目処も、漸く着いた。

二人は月の中旬の土曜日、倉真の実家を訪ねた。

実家へ着くと母親が早速、本日の予定を二人に伝えた。

「今日は二、三の式場を見に行きたいと、思っているのよ」

電話でも言われていた。倉真は、足に準一の車を借りて来ていた。

「運転は俺がする」

倉真が言つて、三人で車へ乗り込んだ。

「お父さんのお昼は、一美に頼んであるし。もしも今日、見てくる会場の中に気に入った所があったら、お昼を食べてみて、お料理の味も確かめて来ますから」

「気に入らなかつたら、どうするんだ？」

「そうね。どこかで、お蕎麦でも食べて来ましょう？」

「了解」

答えて、車を出発させる。助手席に利知未が乗り、地図を片手にナビを引き受けた。

「一月中には、式場を決めてしまわないと。予約が間に合わなくなってしまうから」

母親は大乗り気だ。その勢いに、二人は相変わらず押されてしまふ。

倉真は、これも親孝行だと割り切る事にした。

午前中にチェックした会場は、特に気に入る所も見付からなかった。昼食に入った蕎麦屋で、倉真の電話から、もう一箇所の候補へ連絡を入れた。

「確認項目は式場の雰囲気と、係員の態度。会場の設備と交通の便……。どれも、今一つだったわねえ」

「あと、駐車場もチェック項目に入れてくれ」

「車で来られそうな方、居たかしら……？」

倉真の母は、館川家の親戚筋と、夫の仕事関係の人物を考えて呟く。

「克己の所は多分、車だろ」

「里沙の所も、そうかも」

「手塚さんも、もしかして車で来るのかしら？」

「多分、宏治が送ってくる事になりそうだよな？」

「そうだね。　けど、お母様のリストに、手塚さんの名前を見た時には驚きました」

「二人のリストにも載っていたから、私もビックリしましたよ。」

利知未さんも、良くお世話になっていたって、言っていましたね」

息子が、それ程気が利くとは思っても寄らなかった。　利知未も世話になっていたと聞いて、漸く納得したくらいだ。

「だけど、それを聞いて納得しました」

「それは、どう言う意味だよ？」

母親の言葉に、倉真は少し剥れてしまう。

それから午前中に見て来た式場の、係員の顔を思い出して呟いた。  
「にしては、人間ってのは欲の塊だよな。　利知未の仕事を聞いた時は滅茶苦茶、愛想が良かったクセに、予算を出した途端、態度が少し変わったよな。　式場、三つとも」

「あんたも、そう感じたのね。　…もう少し、鈍感かと思っていたけど」

「お袋、何でそう、俺に突っかかるんだ？」

「そんなつもりはありませんよ、ねえ、利知未さん」

母親に振られて、利知未は愛想笑いをして誤魔化した。

三つの式場の全てで、予算を聞いて係員の態度が悪くなった。それは、利知未も感じていた。　医者の子や社会的地位を考えてそれぞれ、倍以上の金額を言われる事を期待していたのが、良く解った。

「余程、同業者の結婚式と言うのは、派手だったのでしょうかね」

母親が息子につい突っかかる理由は、式場で嫌な思いをさせられ

た事の憂さ晴らしたろうと、利知未は考えた。

「あんな所で式を挙げたって、良いお式になる筈がありませんよ。

人間、仕事も大事だけど。それより、もっと大事なのは人柄と心根です。利知未さん、嫌な思いをさせて御免なさいね」

「いいえ。先の事があるので、余り予算を注ぎ込めないのは事実ですから。お母様にこそ、申し訳ございませんでした」

折角、一生懸命に考えてくれたプランが……。そう、感じる。

「まだ、二つ回るのか？」

「そうね。そうしてしまえば後、見るのは五つに減るから、早めに決められるでしょう？」

「どの道、あと、二日は拘束されるのか……」

「明日と、来月に入ってからで見終われるかしらねえ？」

蕎麦を食べ終え、蕎麦茶を啜りながら話していた。時計を見て、母親が立ち上がる。

「さ、次の式場へ周りましょう」

伝票を持ってレジへ向かう。慌てて追いかけて、利知未は自分の財布を出した。

「あら、良いのよ。ここは、私が払いますから」

「でも、それでは、」

「あなた達は、これから先にお金が掛かるのだから、遠慮している場合じゃありませんよ。大丈夫よ、倉真が高校を途中で止めてしまったお陰で、あの子の教育費は全部、貯金に回って来たのだから」また、少し突っかった。利知未は、倉真をチラリと見てしまった。

「悪かったな」

母親に向かって、倉真は一言、そうばやいた。

午後から回った始めの式場は、やはり今一つだった。予算につ

いても、係員の態度は、午前中に回った式場と大差なかった。

鷹揚な態度に変わった係員を見て、倉真の母親は腹立ちが隠せなくなってしまった。予定通りの全てをチェックする前に、こちらから断って出て来てしまった。

その時、母親が係員に言った最後の言葉は、少し凄かった。

「心から祝福してくれるつもりが無い式場など、こちらから御免被ります。あなた達のお仕事は、それで成り立っているのですか？」  
そう、キツイ調子で言っていた。倉真は、小さく拍手をしてしまった。

係員の上司が出て来て、慌てて取り繕おうとしていた。

式場を出て車に乗り込んで、倉真と利知未は笑ってしまった。

「お袋、良い事、言ってくれたな」

「ね、スッキリしました」

母親の腹立ちは中々、収まらなかった。それでも笑顔の二人に釣られて、つい笑ってしまった。

「だって、あんまりな態度だったでしょう？ さ、次の式場に期待しましょう。車、出して頂戴」

母親に笑顔が戻って、倉真はほっとして車を出した。

最後に周った式場は、係員の態度には合格点を出せた。予算を聞いても態度が変わる事もなく、最後まで懇切丁寧に、プランの相談を受けてくれた。

難点は、駐車場が少しだけ離れていた事だった。その代わり駅には近かった。一日、良くない係員に当って来てしまった三人は、いくらか気分が楽になった。一美に連絡を入れて、ここで夕食を済ませて行く旨を伝えた。

式場の中にあるグリルで、料理を待ちながら、母親に本当の笑顔



が戻った。

「これで、お料理が良ければ、候補の一つね」

「まだ、見るんだよね？」

「当然でしょう？　ここ以上の所だったら、迷わず決めますけれど」

「設備については、納得されましたか？」

「特に、大袈裟な企画を考えている訳でもないから。　会場は少々、狭かった気もするけれど、落ち着いた雰囲気、私は気に入りましたよ」

「そうですね。　それは、私も感じました」

「お袋と利知末に文句が出なけりや、俺は何も無いな」

話している内に、料理が運ばれて来た。

料理は、敏感な舌を持つ利知末としては、及第点クラスだろうと考えた。

「会場や設備の点で、新しい式場とは少し落ちる感じもあるけれど、お料理は、良かったわね」

帰りの車の中で、母親は、そう言っていた。

その夜は、館川家に泊まる事になってしまった。　明日も二、三の下見に出掛ける予定だ。　一々、戻るよりは手間が省けるだろうと言われて、断る事も出来なかった。

両親の手前、倉真と同じ部屋へ泊まる訳にも行かない。　居間に客用の布団を出して貰う事になり、パジャマは一美が貸してくれた。「ね、利知末さん。　どうせなら、あたしの部屋で寝なよ？」

一美に誘われ、恐縮する母親に笑顔で答えて、倉真に布団を二階へ運んで貰った。

夜遅くまで、一美と二人で話をしてしまったのだった。

翌日の下見は、やはり前日と同じ様な流れになってしまった。

倉真の母親は、今までの印象に比べて、かなりハッキリとした人柄であった事が、利知未にも解った。係員の態度には兎に角、厳しかった。

派手な式を考えていない分、式場の雰囲気と係員の良し悪しは重要ポイントだと、考えているらしい。

企画に自信のある式場では、係員にも変なプライドがある様に見受けられた。金額さえ張り込んでくれれば、あんな事も、こんな事も出来ると、売りはそちらに集中してしまう。

本当の意味で、祝福をしようと言う心を履き違えていると、今日も昼食中に母親が言っていた。

その意見には、利知未にも頷ける感があった。

「こんなに質が悪いとは、思いませんでした。気分が悪くなる様な事は、早くに終わらせてしまいたいです」

そう言って、その日も強行軍を敢行してしまった。

お陰で帰宅も遅くなったが、式場の下見は、この二日間で終えてしまった。

それでも、候補はもう一つだけ増えた。料理はこちらの方が良かった。係員の態度は悪くは無かったが、昨日の最後に見た所が一番、丁寧だった。

「駐車場は、少し離れてはいたけれど。駅から近いのは、有り難い事ね」

「駅前から、それ程離れていない分、会場自体は大きく取れなかったって、感じだったな」

「けど、一番、優しく丁寧に、話を聞いてくれましたね」

「あの場所で、決めてしまう？」

「式場も、披露宴会場も整ってはいたな」

「貸衣装の点数は、他よりも少なめ？」

「そうね。でも一応、もう一度見に行ってみましようか？」

「そうですね」

少し考えて、利知未は頷いた。利知未が頷けば、倉真は何も言わない。

「取り敢えず、行くなら早めの方が良いだろ。俺抜きでも、構わないよな？」

「平日に行って来いって、事？」

「決まれば、また付き合う」

倉真の仕事の関係もある。年内に、もう一度だけ見せて貰いに行く話に決まった。

正式に決まってから訪問は、来年に入ってからになるだろう。

話が決まってアパートへ帰宅したのは、十二時近かった。前日、

急遽、館川家へ泊まってしまったので、風呂場の洗濯物を慌てて取り込んだ。

一通りの片付けが済み、漸くベッドへ入れた時間は、深夜一時半を回ってしまっていた。

## 二

十九・二十日の木・金曜休みの一日を、利知未は再び、倉真の母親との式場下見に使った。

あの日に相手をしてくれた、係りの女性が迎えてくれた。

「お待ち致しておりました」

笑顔でそう言っ、今日は貸衣装を見せて貰える事になった。

「点数は、同業の式場よりも少なめでは有りますが。デザインと仕立ては、誇れる物を集めております。お嬢様はお背が高いので、お直しも必要ですね。三週間あれば、完成いたします」  
そう言つて和装、洋装を有るだけ、全て見せてくれた。カタログも、無料で貸し出して貰えた。

利知未はその中で、好きなデザインを見つける事が出来た。

もう少し突っ込んだ相談をして、相変わらず丁寧な対応を受けて、気分良く館川家へ戻る事ができた。

「歴史は、古い所なのね……。大元は、明治時代の料理屋だったみたいよ」

貰つてきたカタログを見て、ゆっくりとお茶を戴きながら、母親と話をしている。

「余り派手にしていない分、係員の方や一つ一つの質は、上等なんですね。予約も中々、多いようです」

来年、春先からの予約状況も確認して来た。

「利知未さん、生理の周期は、大丈夫？」

予定の日付を見て、母親が問い掛ける。

「はい。月末なら、大丈夫です」

「そう。じゃ、後はお仕事が忙しくない時期なら、問題は無いんだけど」

「その辺りは、大丈夫だとは思いますが……」

それでも来年度へ切り替わる前には、届け出て置かなければなら無いだろう。

式当日と、その前後五日から一週間は、見なければならぬ。

仕事を辞める予定は無いのだから、仕方ない事だ。

「それなら、後は倉真も交えて、本格的に相談をしましょう？」

「はい、伝えておきます」

「今夜、お夕飯は如何しますか？」

「済みません。倉真さんの夕食の準備も、有りますので」

そう言った利知未を見て、倉真の母親は笑顔を見せてくれた。

「本当に、ご迷惑掛けているわね。利知未さんを選んだ倉真を、見直しましたよ。……本当に、有り難う」

改めて礼を言われて、利知未は恐縮してしまった。

帰宅して、式場をあの場所に決める事を、倉真へ報告した。

「さつき、お母さんから電話が有って、二十八日に予約金を支払いに行く事になったから。その時、改めて倉真も一緒に来て貰いたいんだけど」

「予約金、いくら掛かるんだ？」

「取り敢えず、三十万。あの式場、結構、競争率が有るみたいだから。手付金みたいな物らしいけど。梅雨時期だから、何とか間に合った感じだった」

「そう言う事か。確かに、梅雨時期は避けたかったけどな」

「ジューンブライド、何て言う人達も居るけど……。それは多分、梅雨時期の利用者獲得の為に、何処かの結婚式場から流した、日本では余り意味の無い売り文句だよな」

「ま、仕方ないだろ。それでも何でも、少しでも早くに式を挙げさせたいのが、お袋の気持ちだろうからな」

倉真は余り結婚式・披露宴に関しては、乗り気でないのが本音だ。本来なら、利知未と二人で何処かの教会でも借りて、形だけの式を挙げて済ませてしまいたい位だった。

今、話が進んでいる結婚式は、親孝行の一つに他ならないと感じている。

「ま、そう言うことなら、二十八日、もう一度ジュンから車を借り

て来るとするか」

「そうしてくれる？ ジュンにも何か、お礼、考えないとね」  
車を頻繁に借りている事に関して、そう思った。

予約金は利知未から出した。元々、自分の個人的な貯金から出せる範囲が三十万だ。この分は、当日の支払いから差し引かれる計算だ。

二十八日、改めて倉真を交えて、三人で例の式場へ向かった。

プランを考えて、貸し衣装代や会場費等の見積もりを出して貰って、予定の金額を二十万は超えてしまった。

そこから相談を重ねて、もう少し値引いて貰い、それでもオーバーになる分は、母親が引き受けてくれた。

「倉真に掛かる筈だった貯金が、かなりあるのよ。心配しないで」  
帰り道に言われて、恐縮しながら、有り難く申し出を受ける事にした。

誰にも明かしていない、利知未のオペ手当で貯金は百万を超えている。内心では申し訳ないとは思っている。それでも、これから先の事を考えた時、その事は胸の内に秘めておく事にした。

取り敢えず現時点では、赤字は無しだ。当日、披露宴に出席してくれる人達からのご祝儀は、恐らく九十万にはなる予定だが、結婚式・披露宴の先にも、金の掛かる事はごまんと有る。それでも祝儀の中から、倉真の母親が引き受けてくれた分は返済する事も出来る筈だと、計算していた。

結婚式の話が進む中、利知未の仕事は、また少しずつ増えて来て

いた。

以前は月に二、三度しかなかった才ペの出頭数も、最近は倍以上になっている。その分、収入には確りと反映されるが、反面、P H Sでの連絡も数が増えて来た。

時には、他の医師が捕まらなくて、利知未へ連絡が回って来る。実際に行かなければならない事もある。電話だけで終わる用事は、有り難いくらいだった。

自宅が病院から近い分、救急関係では頻繁に連絡が入る。帰宅途中、駅を抜けた途端に電話が鳴って、病院へ逆戻りなどと言う事も増えて来た。

そんな時は、歩きながら倉真へ連絡をして、夕飯の惣菜を頼む事もある。その分、休日には今まで以上に料理を頑張る。

利知未一人で館川家へ訪問すると、夕飯を誘われる事も多かったが、呼ばれてくる事は中々、し難かった。

今年の年末年始は、三十一日から六日間の休日となった。来年も倉真の実家と優家には、年始の挨拶と、墓参りの用事が入っている。

思い立って今回は、里沙の所、下宿、マスター夫妻の自宅、手塚家にも顔を出しに行こうかと、話をした。

「来年、結婚式に来て貰いたい訳だし、一応、挨拶には行っておきたいなって、思ったんだけど」

「急に年始に回ったりしたら、驚かれるんじゃないか？」

「だから、遊びに行く、くらいのつもりで」

二十九日の夜、利知未から提案されて、倉真は面倒臭いながらも、付き合ってやる事にした。

大晦日には、去年は作れなかったからと言い、利知未が正月用の煮しめを作ってくれた。これは初めて食べた時から、倉真の好物になっている。

倉真が始めて利知未の煮しめを食べたのは、二人が今の関係になる前の、正月の事だ。

あの時、まだ下宿に居た利知未は、初日の出を拝みに行つて来てから、下宿まで送ってくれた倉真をリビングへ上げて、雑煮と煮しめを出してくれた。

朝美と倉真が始めて会ったのも、あの正月の事だった。

式場も決まり、漸く少しだけ気分が落ち着いていた。

利知未がキッチンへ立つ姿を見て、倉真はあの時の初日の出を、その朝日に祈った事を、改めて思い出してしまった。



### 3 研修医・二年二月～二月

#### 3 研修医・二年 一月

—

大晦日の夜、倉真が言い出した。

「実家へ行くのは、三日だろ？ 明日は呑気に出来る事だし、久しぶりに初日の出でも、拝みに行かないか？」

利知未は、目を丸くしてしまった。

「どうしたの？ 行き成り」

「前、行った時の事を思い出したんだよ。あの時、祈った事が叶ったからな。新しい願掛けでもしたいと思ったんだよ」

言われて、利知未も思い出した。

「そう言えば、何を祈ってたの？」

「叶ったら教えるって、言ってたな。お前は、叶ったのかよ？」

倉真に聞かれて、少し考えて利知未は頷いた。

「叶ったと、思うけど。…報告、し合う？」

「明日、新しい願掛けしたら、お互いにバラすか？」

「面白そうだな。うん、良いよ。じゃ、今夜は早めに寝ないとね」

時計を見る。まだ九時を回った頃だ。

「これから仮眠取って、二年参りしてから、そのままチヨイ足を伸ばすのも良さそうだな」

「何処まで行く気？」

「何処まで行けるかな。一時には出発すんだろ？ 日の出まで六時間」

「それは、ちょっとキツイな。一端、帰って、もう少し仮眠を取ってから、あの時と同じ場所を目指せば良いんじゃない？」

利知末に言われて、その意見に従う事にした。

「んじゃ、チヨイ早いが、これから二時間も軽く寝るとするか」

「そうする？　じゃ、片付けてくるよ」

そう言つて、利知末は晩酌をしていたグラスと摘みの載っていた皿を下げて、リビングからキッチンへ出て行つた。

目覚まし時計を十一時に合わせて、取り敢えず仮眠を取つた。

時間で目を覚まして、年越し蕎麦を作つた。食べ終わり、四十分頃には近所の神社を目指して、アパートを出る。

除夜の鐘が響き始める前には、二年参りの列に並んだ。

「ちよつと、遅くなつちやつたな」

「この神社は、二度目だな」

「そうだね、二年振りだ」

「去年は大晦日まで、お前が仕事だったからな」

「で、元日から、倉真の実家へ挨拶に行つてしまつたから」

「どの街にも、住処の近くには神社つてのが、在るもんなんだな」

「ここは偶々、近かつただけじゃないかな。下宿から一番、近い

所は、歩いたら三十分近く掛かつたし」

「そうだったな。あの神社が、お前と初めて二年参りした神社だった」

もう、四年も前の話だ。その更に前、宏治に付き合つて一度だけ訪れた事があつたのを、倉真は思い出した。

「高校受験の年、宏治に付き合つて初詣に行つた事があつた」

「あの街の神社？」

「ああ。……いつか整備工場を開くなら、あの街が良いな」

呟いた声を聞いて、利知末も笑顔で頷いてくれた。

「あたしも、あの街は好きだよ。マスターに出会ったのも、宏治に出会ったのも、中学時代の思い出も、全部。あの街での、出来事だったから」

「今年の願掛けは、その辺りにするか」

「その前に、倉真の資格と技術習得、資金の準備。それから、結婚も控えてるんだけど？ 気が早過ぎると思うよ、その願掛けは」  
「そりゃ、そうだ」

利知未に突っ込まれて、倉真は少し情けない顔になってしまった。

「あ、年が明けたよ。…明けまして、おめでとう」  
「おめでとう。今年も、世話になる」

除夜の鐘が、響き始めていた。

お参りを済ませて、今年もお屠蘇を振る舞いに戴き、おみくじも引いてみる事にした。

「珍しい！ 二人揃って大吉だ」

「結婚を控えている年に、凶が出なくて助かったな」

「新年のおみくじには、凶の数が少なくなってるって話、知ってる？」  
「？」

「大吉が多くなってるのか？」

「そうみたいだけど。…裕兄が亡くなった年、裕兄にだけ凶が出ちゃったんだよね。凄く不安になったのを、覚えているよ」

あの時の事を思い出して、少しだけ表情が曇ってしまった。

「んじゃ、今年の大吉は、裕一さんの念力でも働いたんじゃないか？」  
「？」

「そうなのかな……？」

「利知未の尻に轢かれる未来を、少しでも希望の有る様に見せてくれ様とした、兄貴心で」

ニヤリと倉真が笑う。利知未が、ぷつと膨れてしまった。

「まだ、餅焼くには早過ぎる時間だな」

「ちよつと、倉真？ どういう意味だよ?!」

剥れて元気な様子に戻った利知未を見て、倉真は言った。

「悲しい顔されるより、剥れられた方が、まだマシだ。新年早々、暗くなるのは縁起が悪いだろ。……裕一さんも、利知未には元気で居て貰いたいと思うぜ?」

「……それは、そうだね。ごめん。じゃ、早く帰って、仮眠取り直して、元気に初日の出、拝みに行こう?」

倉真のお陰で、利知未は笑顔に戻る事が出来た。

アパートへ戻ったのは、一時頃だった。目覚まし時計を四時半にセットし直して、再び仮眠を取った。

時間で、利知未は起きる事が出来た。倉真は、まだ夢の中だ。

「倉真。初日の出、拝みに行くんだよね? 起きて!」

利知未に起こされて、漸く薄く目を開く。

「……もう、んな時間か?」

「四時半。早く起きて顔洗って! ここから二時間近く掛かるでしょ? 五時前には出ないと、間に合わなくなっちゃうよ」

「そーだな、余裕見て、そんなもんか」

大欠伸をしながら、漸く倉真も体を起こした。

「……寒」

布団から体が出ると、冷え切った空気に、一気に目が覚める。

「暖かくしといたら起きれなくなると思って、暖房、切っておいたからね」

一足先にベッドから抜け出して、利知未も一震えしてしまう。

「早く、服着替えよう。その前に少しだけ、部屋暖める?」

「いや、イイ。んな事したら、また眠くなっちゃう」

起き出して、漸く外出準備に取り掛かった。

準備を終え、アパートを出る時、倉真が言った。

「面倒だ。タンデムで行くか」

「どっちのバイク、使う？」

「こここの所、お前のバイク走らせてないな。お前ので、イイか？」  
「いいよ。キー、下駄箱の上の、引き出しに入ってる」

利知未に言われて、スペアキーを取り出した。

ハンドルは倉真が握り、利知未は久し振りに、タンデムシートへ跨った。

「一昨年の春に行った時は、倉真のバイクだったね」  
「そうだったな。行くぞ」

エンジンを掛け、バイクをスタートさせた。

利知未は倉真の背中に、確りと腕を巻きつけた。風は倉真の体が、殆ど全て引き受けてくれた。

『……暖かいな』

倉真は運転も丁寧だ。安心して身を委ねながら、利知未は思う。  
『これから、一生、この背中を見ながら、生きて行くんだ……』

その感慨は、くすぐったい感じがする。腕に少しだけ、力を込めた。

六時半過ぎには、目的地へ到着した。今年も、自治体が振舞うトン汁で体を温める。焚き火の近くへ寄って、寄り添って火に当たっていた。

「倉真、運転、寒かったでしょ？ 風邪、引かないでね」

利知未に言われて、その体を引き寄せた。

「こうしていれば、直ぐに温まるだろ？」

肩に置かれた倉真の手の甲は、すっかり冷えている。掌はトン汁を持っていたお陰で、少しは温まっていた。利知未は倉真の手へ自分の手を重ねて、一生懸命、擦ってやった。息を吹きかけながら擦り合わせていると、自分の掌も温まる。

「いいよ、疲れるだろ？」

「この方が、あたしも暖かいよ？」

仲良くそうして、朝日を待った。

水平線の擦れ擦れまで、雲が垂れ込めている朝だった。水平線からの初日にはお目に掛かれなかったが、雲の上へと上って来た初日に、手を合わせた。

『倉真と、何時までも仲良く暮らせますように。結婚後も、子供が出来てからも、ずっと家族仲良く、生きて行けますように……』

『利知未の夢と、自分の目標が、一日も早く叶えられるように』

今年の願いは、二人で少しだけ違っている。けれど、目指している夢は同じだ。いつか初日に願った祈りは、今、成就しようとしていた。

祈りを終えて、顔を上げる。

二人で目を合わせて、お互いに少し照れ臭そうな笑みを交わす。

「今年は、何をお願いしたの？」

「それは、叶うまで秘密だな」

「じゃ、あたしも、叶うまで秘密」

二人で手を繋いで、駐車場へと向かう。バイクへ到着する頃、倉真が問い掛けた。

「お前の、あんな時の願いは何だったんだ？」

「倉真は？」

「……ジャンケン、するか？」

「どっちが先に告白するか？」

「おお」

ジャンケンで、順番を決めた。

「あたしの勝ち！ 倉真の叶った願掛けは、何だったの？」

「シャーねー。……チョイ、耳貸せよ？」

利知未は素直に、耳を澄ませてやった。

「……やっぱ、恥かしくて言えネー」

そつばを向いてしまう。

「ずるいな。それ言ったら、あたしだって恥かしくて言えないよ」

利知未が剥れる。その顔を横目で見て、倉真がぼそりと呟いた。

「……今の状況を、願ったんだよ」

「今の状況？」

「こうやって、利知未とまた、初日の出を拝みに来れます様になってな」

「……じゃ、あたしも一緒だ」

「ホントかよ？ 適当に、誤魔化してないだろうな？」

「誤魔化しては、居ないけど。……後は、」

「後は？」

「……倉真の夢を、一緒に見ていられますようにって」

「俺の夢？」

「目標かな？ 倉真の将来の目標を、一緒に追い掛けられる所に、自分が居られますようにって」

その言葉には、びっくりだ。

あの時の二人は、まだ恋人同士とは呼べない関係だった。

……

けれど、倉真も同じ事を祈っていた。

「……なんだ、結局、同じ事を祈ってたんだな」

小さく呟いて、倉真はヘルメットを被ってしまった。

「倉真も同じ事を、祈ってくれていたの？」

利知未の質問には無言のまま答えずに、ヘルメットを渡した。

「早く帰って、雑煮と煮しめ、食わせてくれ」

「…ま、いいけど」

倉真の照れ臭そうな態度を見て、利知未は小さく肩を竦めた。受け取ったヘルメットを被り、タンDEMシートへ跨った。

倉真は帰りも、安全運転だった。帰宅した時間は九時を過ぎていた。部屋へ入るなり暖房をつけて、雑煮と煮しめを用意した。新年のお屠蘇代わりに日本酒も用意して、のんびりと朝食を取った。

食事を終え片付け終わり、年賀葉書を眺めながら、もう暫らく日本酒を飲んでいた。十一時近くなって、倉真が欠伸をして呟いた。「腹が膨れて酒が入ったら、眠くなって来たな」

「運転、お疲れ様。あたしも少し、眠くなって来ちゃったな」

「寝正月、決め込むか？」

「それも、呑気でいいね」

こんな時間に昼寝を始めれば、起きるのは夕方になってしまいそうだ。朝食も遅かった事だ。昼食も抜きで眠り続けてしまうだろう。それでも、二人共どうやら、眠気には勝てそうもない。

リビングをざっと片付けて、寝室へ引っ込んでしまった。

夕方になり、漸く起き出した。今年は、年始周りの品物も準備していた。

明日、優の所へ持って行く前に、先ずは手塚家へ周って行こうと考えていた。改めて熨斗紙と記名をチェックして、準備をして置く事にした。

倉真が起きてから、煮しめの残りとインスタントの味噌汁で、簡単に夕食を済ませた。明日は、九時過ぎにはアパートを出ようと



相談して、風呂を準備し、のんびりと湯船に使って、晩酌時間を取った。

晩酌中に、利知未が言い出した。

「あたしも、仕事が忙しくなってきた事に託けて、倉真のお母さんには甘えてばかりだったな。何か、お礼しないと」

「結婚準備の事か？　ありや、お袋の生き甲斐になつてゐるみたいだな。お前がアンマリ氣にする必要は、無いんじゃないか？」

「そう言う訳には、行かないよ。……近い未来の、お姑さんなんだし」

「嫁姑戦争つてのは、お前とお袋を見る限りじゃ、無縁だと思うぞ？　返つて息子の俺の立場の方が、危うい感じだ」

「それは、倉真が積極的に結婚式の事とか、考えてくれないからだと思っけど？　取り敢えず、今月はそれ程、式場絡みの用事も無いとは思っけど」

「……こう言う形の式になるとは、考えても居なかったんだけどな」少々、疲れた顔をして、倉真がぼやいた。

「どう言っのを、考えていたの？」

「適当に、何処かの教会でも借りて、二人で形だけの式が出来れば良いと思つていた」

「……それなら、始めからそう言つてくれれば良かったのに」

利知未は、今更だと思つてしまふ。軽く剥れ顔になる。

「お前は、どういふつもりで居たんだ？」

倉真に何気なく問われて、答えを考えてしまった。

正直な意見では、倉真と同じ事を考えていた。けれど。

「……あたしは、出来る限りは倉真のご家族の意見に、従いたいと思つていたから」

本音を隠して、そう答えた。

二人で同じ事を言い出せば、倉真の性格を考えた時、これまでの

準備を全て投げ出してしまい兼ねない。

それは、お母さんに申し訳ないと、利知未は思う。

「ま、今更ガタガタ言っても、始まりやしネー事だ」

「解ってるなら、ばやかないで、もう少し協力してよね？」

「悪かったよ」

利知未に叱られて、倉真は取り敢えず、謝っておいた。

## 二

二日の朝。九時過ぎにはアパートを出た。先ず始めに、予定通り手塚家へ訪問した。美由紀は二人の訪れを驚きながらも、喜んで迎えてくれた。

勧められて、つい上がりこんでしまった。

手塚家へ邪魔をした時、宏治も宏一も、呑気に寝正月を決め込んでいた。利知未達の訪れを伝えられ、漸く目を覚まして来た。

久し振りに手塚一家と親しく話をして、その内ツーリングへでも行こうと言う話になった。結婚は何時になるのかと問われて、六月二十九日の日曜日が予定だと答えた。

「美由紀さんは、披露宴に出席して貰いたいから、招待状を送ります」

利知未の言葉に続けて、倉真が言った。

「宏治と宏一さんは、二次会に出席してくれよな。披露宴、派手にやりたくないから、人数、調整してんだ」

倉真は余り、嬉しそうな顔はしていなかった。利知未にテーブルの下で、こっそりと太股を抓られてしまった。

「やっと結婚だったのに、何、しけた顔してんだよ？」

宏一に突っ込まれて、利知未に睨まれた。

「つつーか、式も披露宴も俺達じゃなくて、俺のお袋が主導権、握ってるンすよ」

「お前、始めから披露宴なんて、やる気なかったんだろ？」

十年來の親友・宏治には、すっかり見透かされている。

「解るか？」

こつそりと、倉真が宏治に苦笑いを見せる。

宏治も宏一も、つい小さく吹き出してしまった。

「結婚式は花嫁の物なんだから、男は大人しく従って居ればいいのよ」

息子三人は、母親・美由紀から、突っ込まれてしまった。

「倉真のお母さんも、そう言っていたな」

「この前、連絡を貰ったって言うていたでしょう？ 物凄く嬉しそうな声だったわよ。 あんた達もさっさとお嫁さん見つけて来て、私に楽をさせてくれない？ 宏一は、今年で三十三にもなるんだから。 本当なら、孫の一人や二人居たって可笑しく無いわよねえ？」

利知未」

美由紀に振られて、利知未も頷いてやった。

「それは確かに。 けど、美由紀さん、孫が出来たら何て呼ばせるの？」

「ママと呼ばせようかしら？」

「そりゃ、オコガマシイって言うもんだろ？」

「煩いわね。 そう言う事は、ちゃんとお嫁さん連れて来てから言うって頂戴」

宏一は自分の失言で、墓穴を掘ってしまった。

話は、取り止めが無かったが、この後、優宅へ周らなければならぬ。 三十分ほど呑気に話をして、十時過ぎには手塚家を後にした。

優の家に着いたのは、十一時を回る頃だ。　昼食を早めに済ませ  
てから、墓参りへ出掛ける事にした。

真澄は現在、小学三年生だ。　去年よりも、また更にオマセにな  
っていた。

「真澄に、ボーイフレンドが出来たみたいなのよね。　年賀葉書が、  
相手の男の子から届いていたのよ。　それがねえ、」

昼食を取りながら、明日香が、その年賀葉書の内容を笑いながら  
話し始めた。

優は面白くないらしい。　剥れっ面で茶を啜る。

「何が書いてあったの？」

利知末の質問には、真澄がさらりと答えてくれた。

「将来の約束」

真澄は伊達巻を口へ運んで、ニコニコしている。

今年、保育園の年長組になる裕一は、慣れない箸で煮豆と格闘中  
だ。

「将来の？　結婚しようとか、そう言う事？」

「大人になつたらマイホームパパになると約束するよ、みたいな書  
かれ方だっただけけど、それを見てから、優のご機嫌が斜めなのよ  
ね」

「いい約束じゃない」

「真澄が、私のパパは優しくて大好きだって、言っていたらしいの  
よね。　それを聞いて、その男の子はそう決心したんだって」

「優兄、剥れる事ないんじゃない？　娘に好きだって言って貰ってる  
んなら」

「ソレとコレとは話が別だ。　真澄は、まだ小学三年生なんだぞ？」

「どうせ将来は誰かの物になっちゃうんだから。　予行練習が出来  
てラッキーだと思っておけば？」

利知末に言われて、優はまた剥れてしまった。

倉真は何も口出しが出来ない。知らない振りをして、茶を啜っていた。

裕一の、慣れない箸から逃れた煮豆が、真澄の所へ飛んで行く。

「裕ちゃん！ お洋服、汚れちゃうでしょ？！ スプーン使いな！」  
真澄に怒られて、裕一は上目使いで首を竦めた。

子供達の様子を眺めて、優が仏頂面のまま、話を変えて突っ込んだ。

「そんな先の事より、お前らはどうなってるんだ？」

不機嫌の矛先が、利知未達へ向いてしまった。

「そう言えば、お袋が主導のままで、まだ優さんに報告してなかったよな？」

倉真が、自分達の話に移った事を受けて、会話へ加わった。

「そうだった。ごめん。優兄、日曜は休みだよな？」

「日曜祝日は、カレンダー通りだ」

「えっと、倉真のお母さんが、物凄く良く協力してくれていまして、結婚式、六月二十九日の日曜日に決まりました」

「決まったあ？ 何時の間に決めたんだ？」

「十二月の、二十日過ぎです」

「馬鹿野郎！ 何でそう言う大事な事を、もっと早くに教えないんだ？！」

利知未は新年早々、兄貴に怒られてしまった。

父親の行き成りの怒声に、喧嘩が始まり掛けていた子供達も、ビツクリして首を竦める。

「優！ 子供達がビツクリするでしょ？ 急に怒鳴ったりしたら明日香が優を嗜める。倉真も慌てて、頭を下げた。」

「済みません。俺のお袋が大乗り気で、ガンガン話が進んじまってる」

子供達は、倉真と利知未に注目してしまった。喧嘩は始まらずに

済んだ。

「お前よりも、利知未だ。 実の兄貴に相談も無しで、そう言う話をトントン進めるな」

優が、思い切り不機嫌な口調で言った。 利知未は、素直に頭を下げる事にした。 明日香が取り成してくれて、騒ぎは取り敢えず収まって行った。

これまでの話を聞き終え、少し落ち着いてから、優が言い出した。「そこまで世話になってるんじゃ、俺も挨拶に行かないとならないだろ」

「はい。 その通りです」

利知未は、大人しく頷いた。

「明日、行くのか？」

「その予定です」

倉真が、利知未と一緒に申し訳無さそうな顔をしている。

「行き成り行くのも、失礼だな。 ……年始の挨拶として行けば、平気か？」

明日香の意見を、優が仰いだ。

「それなら、それで準備しますけど。 利知未さんから一言、断りの電話だけ入れて貰った方が、良いんじゃない？ 家の電話、使って良いから」

明日香に促されて、利知未は素直に、倉真の実家へ連絡を入れた。

話が纏まってから、優、利知未、倉真の三人は墓参りへ出掛けた。

明日香達は、今年も夕食時間、須藤家へ呼ばれていた。 三人が

墓参りへ出掛けている内に、明日香が近所のコンビニへ出掛けて、

明日、優が館川家へ持参するお年賀を準備した。

墓参りだけ済ませて、利知未と倉真は再びバイクへ跨り、帰宅した。

自分達の住处へ到着してから、溜息をついてしまった。

「そりゃ、そーだよ。今、あたしの家族は、身近には優兄しか居ないんだから」

帰宅するなり、ダイニングチェアへ腰を下ろしてしまう。

「拙かったな、俺も全く気が回らなかったぜ」

「倉真が気にする必要は無いでしょ？ あたしから優兄へ連絡入れるのが、当然だったし」

「お前、最近、忙しかったからな」

手を洗って、倉真もダイニングチェアへ腰掛けてタバコを取り出す。

「取り敢えず、珈琲でも飲んで落ち着こうか？」

「おお」

利知未が立ち上がり、手を洗って薬缶を火に掛ける。豆とカップを準備して、湯が沸くまでの時間、再び腰を下ろした。

珈琲を淹れてから、改めて落ち着いた。

「明日、九時半までには迎えに来るって、言ってたな」

「そうだな」

「優兄の車で行くんだし、マトモな格好して行った方が、イイか」

「何時も通りで、構わないんじゃないのか？」

「ソレにしたって、ある意味、親代わりの優兄と一緒にんだから。」

「ラフ過ぎる格好して行くのも、問題でしょ？ パンツスーツ位は着てこうかな……」

館川家には、ジーパンでも何度かお邪魔している。初めて行った時程に服装を拘り過ぎるのも、返って違うだろうとは思う。

「俺は、ジーパンしかないぞ？」

「倉真は実家へ戻るだけ何だから、平気でしょ？ 優兄は、それなりの格好して行くんだろうから、二人の中間位に揃えるか、優兄に

合わせるべきか……？ 悩みどころだな」

「優さんに近い方が、釣り合いが取れるんじゃないか？」

「そう言えば、ワンピースタイプにジャケットの付いたスーツがー着、あったかも。それなら、平気かな？」

クローゼットは寝室へ置いてある。 飲み掛けの珈琲を置いて、

利知未は寝室へ引っ込んでしまった。

倉真は、利知未の後姿を見送って、呑気に新しいタバコへ手を伸ばした。

翌朝の九時半前には、優がアパートへ到着した。

利知未が思っていた通り、ダーク系のスーツ姿だ。 仕事で接待の時に着用する一張羅だと、言っていた。 利知未は兄の服装を見てから、着替えを始めた。

待たせている間、倉真がリビングで優の相手をしていた。 利知未の準備が整ってから、優の車で移動した。

優が年賀を持参するのだから、利知未達が用意した分は邪魔になっってしまう。 その分は、挨拶の予定が無かった透子の家を急遽、数に入れ直して、そちらへ回す事にした。

道案内を兼ねて、ハンドルは倉真が握った。 倉真の運転する車に初めて乗った優は、その性格の割りに安全運転な事を知って、感心していた。

「仕事柄、客の車、運転する事もあるんで」 そう注釈を入れた倉真の言葉に、納得した。

館川家では、態々、利知未の実兄が挨拶に見えると聞いて、今朝



から仕事を始めている父親が、菓子折りを別に用意して待っていた。「お母様が離れている分、お兄さんが確りしているのね」母親は、そんな事を呟いていた。

同時に、流石に出過ぎた真似をしていたかも知れないと、少々、反省もした。

利知未達が到着した。　優は玄関先で深々と頭を下げ、年賀を渡した。

「行き成りご挨拶に伺いまして、申し訳ありません」キツチリと最敬礼をする。

優を始めて見た倉真の母親は、その体の大きさに、少しビックリしていた。

「とんでもございません。私共こそ、色々とお過ぎた真似を致しました」

優から年賀を手渡され、倉真の母親も正座をして、深々と頭を下げた。

顔を上げた母親に促されて、優も少しだけお邪魔をする事になった。

居間でお茶をご馳走になり、お年賀のお返しにと、菓子折りを戴いてしまった。　優は恐縮してしまう。　父親も仕事の合間を見て、顔を出した。

我が家へ嫁に来てくれる、お嬢さんの実兄だ。　事実上の顔合わせとなってしまう。

一美も呼ばれて、立川一家と挨拶を交わした。利知未は肅々と、成り行きを見守っていた。　それ以外、どうし様子無い。

「私共の家庭の事情は少々、特別な物で」

優は何から話していいやら判別が付かなくて、そんな言葉から始めた。

「ご家庭の事は伺っております。その点は十分、承知致しておりますので、お兄様もご安心下さい」

母親は改めてそう返した。優は恐縮したまま、続ける。

「有り難うございます。妹も、幼い頃から実の母親からの躰も無く、至らない所も多いと思いますが……。どうぞ、宜しくお願い致します」

「とんでもない！ 私どもの息子には勿体無いほどの、素晴らしいお嬢さんで……。家族一同、感謝致しております」

頭を下げた優に対して、母親は更に頭を下げた。

「結婚式の事や、その他にも、大層お世話になってしていると妹から聞きました。本当にご挨拶が遅れてしまい、申し訳ありません。

自分も若い内に家庭を持つてしまいましたので、気が周らない事が多く、どう、お礼とお詫びを申し上げれば良いのか……」

優は兎に角、平身低頭だ。費用の事なども世話になる事になっていると言う。頭を下げながら、妹に対しての腹立ちと、館川家に対する感謝で、頭を上げる暇も無い。

利知未は、何も口出しする事は出来なかった。内心では、兄の真面目さ、誠実さを改めて知ったと感じている。

裕一生前中の兄弟喧嘩も、思い出してしまった。

長兄に比べて頼りない印象の強かった次兄が、何時の間にやら、こんなに確りした大人の男になってしまっていた。

『コレからは優兄の事、あんまり馬鹿にしちゃいけないな』 今更、そんな反省の念が浮かび上がって来たのだった。

その後、挨拶を終えた優と共に、今日は利知未と倉真も暇した。

三人が帰ってから、館川一家が揃って茶を飲みながら、話が始まる。

「利知未さんの、お兄さん。　優さんって、利知未さんに似てたね」

「私は、背が大きいので、少しビツクリしてしまっただわ。　倉真よりも、また上背があっただわね」

「……親が無くて、子は育つ」

父親は一言、そう呟いた。　母親が目を丸くして、夫の言葉に少し笑ってしまった。

『……この人の言葉で、そんな台詞が聞けるとは』　と、思ってしまった。

「本当に、利知未さんもだけれど、優さんも確りした良い方でしたね」

「お兄ちゃん、優さんに弟子入りさせて貰ったら、もう少し確り者になってくれたりして？」

「そうかも知れないわね」

一美の言葉に、また笑ってしまった。

そして、ふと真面目な顔になって呟いた。

「若い内から、色々と苦勞をされて来たんでしょう。　倉真は、甘

やかし過ぎてしまったかも知れないわね」

呟きながら、心の中では別の事を考える。

『これからは、余り私ばかり出しゃばり過ぎないように、優さんの所とも良く相談をしないと、失礼になってしまっただわ』　少々、甘く見ていた部分は確かにあった。

ご両親が近くに居ないのなら、利知未さんのご両親の分まで、自分が色々として上げなければ可哀想だと、考えていた。

けれど、あんなに確りしたお兄さんが身近に居る。

これからは両家で良く話し合って、先の予定を決めて行くべきだろう。

「……仕事に戻るか」

一段落して、父親はそう呟いて、居間を出て行ったのだった。

その日の優一家では、館川氏の和菓子に、子供と妻の話題と人気  
が、奪われてしまった。

### 三

優と別れ、夕方から、利知未は服を着替えてマスター一家の自宅  
へ向かった。アダムの仕事始めは、毎年四日だ。今日中に周ら  
なければ、意味が無いだろう。

里沙の所や下宿については、年賀と言う形を取らなくても、松の  
内に顔を見せる事が出来れば、それで良い事だ。返って遊びに來  
た感覚になって、堅苦しい感じがなくて済みそうだとも思う。

透子の所など、早くに行っても留守の筈だ。年賀葉書には、年  
末から四日の土曜日まで、今年も海外旅行へ行っていると書いてあ  
った。

それなので、始めは数に入れないで置いたくらいだ。

仕事始めの前日、のんびりと過ごしていた久世家では、二人の訪  
れを家族が揃って、笑顔で迎えてくれた。

佳奈美は、利知未との初対面時、中学一年生だった。現在、大  
学三年生だ。利知未が家庭教師をする事が出来なくなってからも、  
勉強は頑張っていた。それなりの大学へ通っている。すっかり、

大人っぽくなっていた。

渉は、姪っ子・真澄の一つ上だ。現在は小学校四年生。活発な少年に育っていた。勉強も、佳奈美が良く面倒を見てくれる。出来も中々、良いらしい。小学校では、クラス女子の人気者だ。

「利知未さん！ 久し振り！！」

佳奈美の呼びかけに、目を丸くする。佳奈美も大学三年になって、目上の人間を呼び捨てにする事はなくなっていた。

「佳奈美！ 随分、大人っぽくなったね」

「今年、二十二歳だよ。利知未さんと最後に会ったの、高校生の時だよ」

「もう、そんなになるのか。アダムにも中々、行けなくなっちゃったからね。佳奈美と会う機会なんか、無かったよね」

玄関先で、話が始まってしまった。

「忙しい時間に、済みません」

奥から出て来た智子へ、利知未が頭を下げる。

「何言ってるの、何時でも遊びに来てくれて構わないわよ。明けましておめでとう。兎に角、上がって」

智子に促され、挨拶を返して上がり込んでしまう。

倉真は、流石に少し遠慮気味だ。

「利知未さんの婚約者ね。館川さん、でしたね。貴方もどうぞ」  
智子に促されて、邪魔しますと声を掛けて、利知未の後へ従った。

リビングでは寛いだ様子のマスターが、呑気にテレビを眺めていた。利知未の姿と、その後に続いた倉真の姿を見て、嬉しそうな笑顔を見せる。

「おお、去年は態々、北海道から蟹を送って貰って、悪かったな」  
「無沙汰してます」

倉真が、軽く頭を下げる。

「二人揃って来てくれたんだな。ま、座れ。バイクか？」

「そりゃ、ここに来るなら、バイクが早いからね」

利知末が答えて、マスターがキッチンへ声を掛ける。

「茶で良いか？ どうせ新年に来るなら、バイクじゃなくて電車を  
使え」

新年早々、違反をさせる訳にはいかないだろうと、マスターはぼや  
いていた。

茶を戴き、年始の挨拶をして雑談をしていると、外で遊んでいた  
渉が泥だらけで帰宅した。

「あれ？ 利知末だ！ 一緒に居るの、誰だ？」

少年・渉は、倉真にも遠慮ない視線を向ける。

「利知末の、将来の旦那だ」

「げ！ 利知末、結婚すんの？！」

久し振りだろうが何だろうが、子供には関係ないらしい。 渉は、

ズケズケとリビングへ入って来ながら、目を丸くしていた。

「結婚するんだよ。 渉も、お父さん達と披露宴、来て貰うからな  
？」

男の子相手だと、利知末もどうやら昔の口調が戻るらしい。 利知  
末の様子を見て、倉真が小さく笑っていた。

倉真は、やはり子供にはモテる。 直ぐに渉も慣れてくれた。  
彼の、自慢のコレクションを見せてやると言われて、渉に連れられ  
て子供部屋へと移動した。

子供部屋で、倉真は渉のコレクションを見て感心していた。  
「プラモデル、好きなのか？」

「うん。 このシリーズのロボットが好きなんだ」

そう言いながら、最近のアニメで子供に人気のロボットシリーズ作品を、説明付きで見せてくれた。

「手先が器用なんだな」

綺麗な繋ぎ目を見て、目を丸くする。

「仕上げて紙やすり使って、色も塗るんだ。父さんが休みの時は、

一緒にやってるよ？ おれの方が上手いけど」

自信満々な笑みを見せている。

「運動は好きか？」

「得意だよ。 さっきも、サッカーやって来た。 学校のクラブもサッカー部」

「勉強は好きか？」

「好きじゃないけど、姉ちゃんが煩いから、一応、頑張ってる」  
正直な言葉に、小さく笑ってしまった。

「文武両道って、ヤツか」

「ぶんぶりようどう？」

「勉強も運動も両方、頑張ってるヤツの事、言うんだよ」

「ふーん。 ぶんぶりようどう、か。 じゃ、ソレ目指す」

「偉いな」

倉真は大きな手で、渉の頭をかいぐってやった。

「倉真、これ、上げるよ」

渉は倉真の事を気に入った。

自分の作品の中で出来の良いプラモデルを一つ選んで、倉真にプレゼントした。

「くれんのか？ サンキュ」

倉真は渉の気持ちを汲んで、素直に礼を言って受け取った。

「友情の徴しるし！」

渉はそう言って、嬉しそうな笑顔を見せてくれた。

倉真がリビングを出てから、利知未が呟いた。

「倉真、子供には人気が有るみたいなんだよね。　どう言う理屈なんだろ？　顔は怖いくらいだし、背だつてあんなに大きくて、威圧感ありそうなのに」

「子供と精神年齢が近い人は、仲良くなるのが早いつて俗説だよ」  
佳奈美は、児童心理学を専攻しているらしい。

「じゃ、倉真が子供っぽいってコトか。　…納得」

「男は女に比べて、精神年齢が低いもんだ」

「そう言うけどね。　それは、言い訳にも聞こえるよね？」  
娘に突っ込まれてしまった。

情けない顔になるマスターを見て、利知未はくすりと笑ってしまふ。

『佳奈美が愛娘なのは、相変わらずか』　そう感じて、少しだけホツとしてしまった。

「佳奈美は将来、何を考えているの？」

「カウンセラー」

「カウンセラー？」

「臨床心理士つて言つた方が、お医者さんの利知未さんには解るのか」

「あたしの通つてた大学でも、講座はあつたな」

「医大じゃなくても、専門の学校はあるよ」

「同業者になるのか」

「仲間の内、になるのかな？」

「出来の良い娘だね」

利知未に振られて、マスターが答える。

「出来の良い教え子だつただろう？」

嬉しそうに笑っていた。

キッチンから声が掛かり、利知未と倉真も夕食を呼ばれる事になつてしまった。



四日に下宿・五日に透子の家にも顔を出した。四日からは、里沙も下宿へ通い始めている。利知未達の久し振りの訪れを喜んでくれた。

店子の数は、三人ほど増えていた。美加も、既に実家へ戻ってしまったている。下宿の住人は大家代理の朝美を抜かして、すっかり様変わりをしていた。

リビングへ通されて、里沙が紅茶を出してくれた。

「利知未達のおめでたい話ついでに、私からも、おめでたいお話があるわよ」

そう言つて、里沙が微笑んだ。

「もしかして、子供?!」

「ええ、漸く。今年の九月が予定だけど」

「下宿はどうするんすか?」

倉真に聞かれて、里沙が答える。

「冴吏が今月から、引っ越して来てくれるのよ。冴吏、今は作家活動中心で在宅だから。今、下宿の今後を話し合っている所」

「大家を譲るの?」

「本格的に手伝って貰う形かしら? 朝美も、まだまだ現役だから」  
「料理は、冴吏の方が上手かった気がするな」

「朝美も最近は、すっかり慣れたわよ。お陰で、何時でも嫁に行けそうだ、何て笑っているわ」

「朝美には、そう言う予定は無いの?」

「どうかしらね? 今の所は、聞いては居ないけれど」  
話は止まらない。倉真は大人しく、聞きに回っていた。

この日も夕食は、お呼ばれしてしまった。久し振りに里沙の料理を食べて、懐かしい気持ちになる。

「あたしにとつての、お袋の味って、ばあちゃんの味の次は、里沙の味かも知れない……」

食事中に呟いた利知末の言葉を聞いて、里沙は優しく微笑んでいた。里沙の分と朝美分の年賀を渡してから、帰宅した。

五日、初めて透子と大河原教授の住む家へ、利知末達は出掛けた。透子さんの所は、お前が一人で行く方が良いんじゃないか？」倉真はそう言っていたが、結婚の挨拶代わりなのだし、倉真も透子とは顔見知りだ。利知末に無理矢理、同行させられてしまった。

バイクを使つて出掛けた。大河原宅は、利知末の母校の近くに在った。

「住所だと、この辺りだよ」

街角にバイクを止め、大学時代の同窓会名簿から書き写して来たメモを、地図と照らし合わせてみた。

「そこじゃネーか？」

直ぐ先の家を指して、倉真が言う。バイクを一端降りて、近くまで歩いて行つて表札の住所を確認して来た。

「そうみたい」

答えて、利知末がバイクへ戻った。

改めて家の前までバイクを押して行つた。スタンドを掛けてインターフォンの呼び出しボタンを押した。

「はい、何方様でしょうか？」

大河原教授の声が、インターフォンから聞こえる。

「瀬川です。西横浜医科大学、卒業生の」

大河原は少し考えた。それから思い付いて言った。

「透子の友達の、外科講座に居た瀬川さんか？」

「そうです。昨夜、ご連絡をさせて戴きましたが」

「ああ、これか」

「どうやら、何かメモを見つけたらしい。」

「今、開けますよ」

穏やかな、と言うより、呑気な喋りは、大学でも有名だった。

大河原教授の講義は、その穏やかな喋りから、学生達の睡魔を呼び覚ますと、もっぱらの噂だった。

倉真はイメージ外の様子で、目を丸くしていた。

「今のが、教授か？」

「そうだよ」

「何か、大学教授って言うのは、もっとハッキリとした喋りをするイメージが、あったんだけどな」

「教授も色々だからね。透子とは、お似合いだと思っよ」

いつかの後姿を思い出して、小さく笑ってしまう。

披露宴の時の、明るく呑気そうな、年齢の割りにシャイで無邪気な雰囲気は、意外と言葉のキツイ透子とはいいいバランスだと思っていた。

直ぐに鍵が開いて、教授自ら出迎えてくれた。

「済まないね、透子は、まだ眠っているんだ」

頭を掻き掻き、二人をリビングへと案内して行く。

「まだ、寝てるのか」

利知未は目を丸くして、つい呟いてしまう。十時半になる所だ。

教授は少し情けないような、柔らかな笑みを見せる。

「昨夜は、遅くまで起きていたようだったからね」

ソファへ二人を案内してから、教授がインスタント珈琲を入れて出してくれた。

「君は、学生では無かったね？」

「はい、済みません。彼は、私の婚約者です。透子さんの友人でもあるので、今日は一緒に挨拶をして貰おうと思い、連れて来ました」

倉真は利知未に紹介されて、ペコリと頭を下げる。

「透子を起こしてくるから、暫らく待っていて下さい」

教授はニコリと笑みを見せ、リビングを出て行った。

十分後、寝起きの少々、寝惚けたままの様子で透子が現れた。

「おつす、利知未。明けまして、おめでと」

「随分、呑気な主婦だな」

「あはは。普段は、お手伝いさんが居るから。アタシはやる事、全く無し」

「大学の教授つて、そんな余裕があるのか……」

利知未も、つい昔の様子が戻ってしまふ。小さく呟いた。

「家の旦那は独身生活、長かったからね。結構、貯め込んでる。

アタシの仕事は家事じゃなくて、仕事のお手伝いと、夜のお供だから」

「…成る程。透子でも、結婚出来る訳だ」

「相変わらず、キツイ突込みだな。釣り目Gay！ 久し振りだな。漸く結婚して貰えるンだつて？」

「それは、どう言う言い草だ」

利知未が、膨れっ面になる。

「良く我慢したねえ！ エライ、エライ！」

透子は昔から変わらない、ヘラリとした笑い方をする。

教授が透子の分の珈琲まで入れて、持って来てくれた。

「ありがと」

「書斎に居るから。支度が出来たら、声を掛けて」

教授はそう言つて、リビングを出て行った。

「支度？ どうか行くのか？」

「アンタ達も一緒だよ。お昼くらいは奢ってくれるって、言つて

た」

「それは、申し訳ないな。 昼前には帰るつもりだったのに」

「久しぶりに親友に会いに来て、それは冷た過ぎるってモンでしょ？ 良いじゃない、元恩師に素直に甘えれば」

「恩師って言ったって、教授の講義、二年の時に受けた切りだよ」

「それでも、元教え子。 気にしない、気にしない。 旦那、披露宴の時から、アンタの事を気に入ってんだから」

「披露宴？」

「利知未にギター持たせて、歌わせたの。 感動してたよ、あの人」

「そう言や、そんな事、話してた事あったか？」

倉真は首を捻って、三年近く前の事を思い出して見た。

「釣り目Gayが、恐縮するか？」

「どうでも良いけど、その呼び方、そろそろ止めるよな」

利知未に突っ込まれて、透子が言い直した。

「んじゃ、利知未の旦那、は、長いな」

「素直に名前で、呼んでくれれば良いと思う」

「ソーちゃん、良い？」

「ソーちゃん、って……。 透子さんには適わなーよ、好きに呼んでくれ」

倉真は、少し情けない表情になってしまった。

教授の姿が無ければ、倉真もすっかり透子とは打ち解けてしまう。 気楽に、利知未と透子の漫才を笑いながら聞いていた。

「司会、やってやろうか？」

話の途中で、行き成り透子が言い出した。

「司会？ 何の」

「披露宴の。 どうせ、金掛けたくないんでしょ？ タダで引き受けてやるぞ？」

「遠慮しとく。 透子の司会じゃ、何喋られるか……。 安心出来

ない」

「当然。裏話盛り沢山の、アタシのオンステージに早変わり」  
ヘラリとして言い放つ。 倉真も冷や汗だ。

「司会は別の人、頼みます」

「ソーちゃんまで、連れない事、言ってくれるじゃない。二人の事を良く知っている人間がやる司会が、一番、良い思い出になるぞ？」

「二度と思い出したくない様な、トンでもない思い出になりそうだ」

「記憶に残る良い式でしたって、言って貰える事、請け合い」

「誰が言うんだ？」

「招待客、全員から」

「有り得ねー」

「猫被りチャンピオンの、利知未の化けの皮を剥がす素晴らしい企画」

自分の家族の前に居る時の利知未を思い出して、倉真は不覚にも吹き出してしまった。

「やっぱ、ソーちゃんのご家族は騙され続けている訳だ」

「騙され続けてるって、どう言う言い草だよ」

剥れる利知未を、倉真が宥めた。

「笑いながらフォローされても、説得力0!」

利知未は益々、剥れてしまった。

その後、本当に教授から昼食を奢って貰ってしまった。 目出度い祝い膳だ。 寿司屋へ連れて行ってくれた。

利知未はチラリと、櫛田の事を思い出してしまった。

帰宅して、年末年始休暇の最後の夜を、のんびりと二人で過ごした。

「お年賀の出費分、あっちこっちでご飯をご馳走になったお陰で、

すっかりプラマイ0になったよ」

晩酌をしながら、利知未が言っていた。

「透子さんの所は、夫婦で呼んだ方が良くないか？」

「そうだな。あたしも、二人の披露宴に呼ばれたんだし」

「何ッーか…、良いバランスの二人だったな」

今日の大河原夫妻を思い出して、倉真が呟いていた。

「あたし達も、バランスは良い方だと思うけど？」

「…そーだな」

倉真は頷いて、利知未の肩へ手を回す。利知未は素直に、身を委ねた。

「しかし、披露宴の司会はマジ、本気かと思って冷や冷やしたぜ」

「透子にやって貰ったら、本気でどんな披露宴になるのか……。考えるだけでも恐ろしいよ」

けれど、その言葉自体は嬉しかった。

二人でチラリと視線を合わせて、小さく吹き出してしまった。

「自分の事じゃなけりゃ、見てみたい気もするけどな」

「確かに。ジユンと樹絵が、もしも結婚したら、透子にやらせてしまおう」

「ンな事、勝手に決められねーだろ」

「冗談」

それから、また笑い声が上がる。

「マジ、司会者も決め始めないとな」

漸く倉真の口から、結婚式の事についての積極的な意見が出てくれたのだった。

透子の、お陰かも知れないと、利知未は思った。

仕事が始まれば、一ヶ月はあつと言う間だ。直ぐに二月がやって来た。

今月二十四日の、兄・裕一の十三回忌は目前に迫っている。こへ来て改めて、重大な事を思い出した。

「倉真、礼服、持っていないよね？」

月頭の休日、夕食時間に利知未が言い出した。

「礼服？ ああ、裕一さんの十三回忌か」

「ネクタイも、した事なかったでしょ？」

「縁が無かったからな」

「準備しないと。明日の日曜日、紳士服を見に行こうか？」

そんな話をしている時、電話が鳴った。利知未は食事を中断して、受話器を上げる。

電話の相手は明日香だった。

「利知未さん？ あれから、式の話は進んだの？」

「まだ、進んではないけど。どうして？」

「優が、また話を勝手に進めているかも知れないから、念の為に連絡を試みるって。今月、お兄さんの法事があるでしょう？ 利知未の結婚の話は自分も解っていないと、親戚の方から何か聞かれた時に困るからって」

言われて納得した。そろそろ、親戚への葉書連絡も必要な時期だ。

「この前の話からは、止まってるよ」

「そう、それなら構わないだろうけど。結婚式の招待客リストも見せて貰いたいって。明日、来られる？」

「明日か」

呟いた利知未に、明日香が問いかける。



「何か用事があるの？」

「用事があるって事では無いけど。法事に、倉真も来て貰おうと思っていたから」

「そうね、顔合わせする機会、中々無いものね。丁度良かったじゃない」

「そうなんだけど。倉真の礼服を見に行こうかって、話していたんだ」

「礼服？ それなら、優のお古を直して使ったらどうかしら？ サイズは平気そうだし。優も、昔より少し恰幅が良くなって来ちゃったから。新しい服、用意しないとならないって、考えていたのよ」

「その手があったか。優兄、太ったの？」

「大学時代に比べれば、流石に少しね。もう、今年で三十一歳だから。体格も変わって行く年齢よ」

「そつか。じゃ、明日、倉真も一緒に連れて行くよ。招待客のリスト以外で、何か持って行くものはある？」

「今あるだけの資料を、ついでに持って来て。明日は、お昼もお夕飯もこつちで準備するから。ゆっくり話をしましょう？」

言われて素直に頷いて、電話を切った。

食事を再開して、今の話を倉真に伝えた。明日、昼前には優宅へ到着するように、出掛ける事になった。

翌日二月二日・日曜日に、節分の豆を手土産にして、優の家を訪れた。

真澄と裕一は、利知未たちの手土産に早速、はしゃいだ声を上げていた。鬼の面付だ。明日は節分だと、学校でも保育園でも教えてくれている。

「あした、これ、お父ちゃんが、かぶるの？」

裕一は、ワクワクと楽しそうな顔をして、すっかり慣れてしまった

倉真に纏わり着いていた。

「被ってくれるんじゃないか？ 家は、利知末の方が似合いそうだけれどな」

ぼそりと呟いた言葉を、利知末は聞き逃さない。

「倉真？」

ジトリと睨まれて、首を竦める。 裕一はその様子を見て、けらけらと笑う。

「利知末、鬼の角、持ってるの？」

真澄まで面白そうな顔をしていた。

「偶にな、頭に何かが、顔を出すぜ？」

倉真は子供達に、いらない事を言っ、益々、利知末に睨まれてしまった。

子供達は、大喜びをしていた。

「二人とも。 利知末たちは、今日は大事な話があつて来てくれたんだから。 向こうで遊んでらっしゃい。 真澄は宿題、終わってるの？」

明日香に言われて、居間から出て行つた。

「てっちゃんち、いくの、お昼ごはん、たべてからだから」

裕一はそう言っ、真澄の後を付いて行く。

「お姉ちゃんは、お勉強するんだから。 大人しく、絵本でも読んでてよ？」

真澄に渋い顔をされてしまった。

子供達が大人しく退散してから、明日香が言い出した。

「優のお古、出して置いたから。 後で倉真君、一度、着て見てね？」

「すんません」

「先に、合わせちまえよ？ その方が、のんびり話が出る」

優に言われて、明日香が用意の礼服を、奥から持つて来てくれた。

「ネクタイは、流石に新しいのを買った方が良いでしょう？ シャ

ツは、首回りが大丈夫なら一枚、持つて行く？」

「いや、イイツ。ソレくらいなら、新しく買っちゃまうから」  
言いながら、倉真は礼服に袖を通してみた。

「優さん、見かけよりもガツチリしてたんだな。俺の方が、肉が付いてると思ってた」

サイズはぴったりだった。上着の袖もパンツの丈も、優よりも身長が二、三センチ低い割には、長さも丁度だ。

「そう言う格好すると、年齢が判るな」

「いかにも借り物って、感じっすね。肩凝りそうだ」

手を顎に置いて首を曲げている。やや情けない様な表情になってしまい、優に笑われてしまった。

「ネクタイは、結べる？」

「あたしが結べるから、平気」

「お前が、出来るのか？」

優が、目を丸くしていた。

「高校から大学までやってたバイトの制服が、ネクタイだったから」  
アダムでの制服が男物だった事は、内緒にしておいた。

「サイズの直しも必要無さそうだし、ありがたく貰って行くよ。  
それより、話を始めないと、でしょ？」

深く突っ込まれる前に、話を変えた。

まずは、招待客のリストと、法事の覚え書きとを見比べてみた。

「この、高野さんは入れるべき？」

利知未が指を指したのは、一時、兄妹三人が世話になった事のある、父親側の親戚筋だった。

「ここは、お袋が離婚してるんだから、結婚式には呼ばなくても構わないかとも、思うけどな。大叔母さんの家へ世話になる前に、4年近く引き取って貰った家だし……。兄貴の生前も良く知ってるから、法事にはどうしても外せないだろう」

「けど、そう言う事情なら、リストに入れるべきな気もするわね」

明日香は、第三者の目で、的確な意見を述べてくれる。

「後は、ばあちゃんのお嬢さん夫婦。ここは、入れなきゃだね」  
「そうだな。あの家に世話になっていた頃には、もう嫁いでしまっていたが……。一番、世話になったお嬢さんの、実のお嬢さん達だ」

お嬢さんには、二人のお嬢さんがいた。二人とも丁度良い年齢の頃、嫁いでいた。妹の方も嫁いで行って、部屋が余り、お嬢さん夫婦が寂しい感じ始めた頃に、利知未達が世話になり始めたのだった。そう言う事情もあって、お嬢さん夫婦は兄妹を心から愛してくれていた。

偶に姉妹が実家へ遊びに来た時や、年始の挨拶の時など、二人のお嬢さんは兄妹に、お嬢さん、良くしてくれた。

「私達の分まで、お父さん、お母さんに、思い切り甘えてあげて」  
会う度に、そう、言ってくれていた。

亡き夫妻の変わりには是非とも、喜ばしい席には同席して欲しい親戚だ。

「ばあちゃんちへ行くまでは、正直、余り良い思い出が無いんだよね……」

覚え書きを手に取り、利知未は頬杖をついて、呟いた。

「それは、解らない事もないが……」

優とて、思いは同じだ。

「それなら、お祝いの品だけ届けて良しにする手も、あるけれど。会場が余り大きくないので、ご招待客を調節させて頂いておりますって事で」

心から喜んでくれそうも無い親戚は、呼ばないに限ると言う意見もある。

既に、母親とは離婚している父親の兄弟筋の親戚なのだから、調節の節目にあつても可笑しくは無い。

「あの人の、お兄さんの家にも、半年はお世話になったけど……。あそこは、あの人と家族の縁、切ったも同然の家庭だったんだよね」

「利知未。あの人と云う言い方を、そろそろ改めろ」  
優から、静かに窘められてしまった。

「……そうだね、気を付ける」

利知未は少し考えて、そう答えた。

「連絡は、するべき家だろう」

半年でも、世話にはなったのだ。

それ以来の親交は、裕一の法事以外では持った事も無かった。実父には、結婚報告の葉書だけ送るつもりだった。

招待客のリストの相談を終え、式の内容へ移行した。

「式は、神前なのか？」

「俺の家が、商売屋なんで。仏前よりは、その方が良いらしいです」

倉真も、漸く話しに参加し始めた。

「ウェディングドレスは、着ないの？」

「披露宴で、お色直しを一回だけする事になっていて。倉真の妹の一美さんの要望で、その時に」

「そうすると、披露宴は色内掛けと、ウェディングドレスなんだ」

「そうなります」

「楽しみね。写真は白無垢、内掛けも取るんでしょう？」

「その予定です」

「倉真君は、和装？ 洋装？」

「……考えてなかったっス」

情けない顔になってしまった。

「お前の洋装は、一度見たからな。」

和装で最後まで居たらどうだ

？」

優が軽く、冗談めいた口調になった。

「洋装以上に、肩凝りそうだ」

冷や汗を流し兼ねない倉真の表情に、利知未も明日香も笑ってしまった。

次は、式次第の話になった。倉真母との相談の内容は、一冊のノートへ纏めて来ていた。媒酌人は、館川氏の仕事関係者夫妻で勤めてくれる話になっていた。倉真も子供の頃は、会っている筈だと言った。

「仲人は、立てないんすけど」

「今、そう言うのが多いのよね。良いんじゃない？ 倉真君の両親が、それで構わないのなら」

「式場、料理、引き出物は、館川さんが相談に乗ってくれているのか……。お前は、本当に幸せ者だな」

「あたしも、そう思う」

利知未は素直に、頷いていた。

「お前達の見解は、どうなっているんだ？」

「あたしは、倉真のお母さんの意向に従おうと、思ってるから」

「利知未は俺達より、お前のお袋さんの方が良いらしいな」

優に振られて、倉真は恐縮してしまった。

「それ位で丁度良いのよ。嫁いで行くのは、利知未さん何だから」

笑顔で明日香が、そう言った。同時に思った。

『利知未さんは、賢いお嫁さんになれそうだわ』 姑と上手くやるコツを、どの辺りで学習して来たのだろうか？ などと、余計な事を考えてしまった。

ここまでで昼食を挟んで、残りは食後に話し合う事になった。

昼食を取り、真澄と裕一は其々、友達の家へと遊びに行ってしまった。

った。子供達の耳が完全に無くなってから、更に突っ込んだ話し合いが始まった。

費用の面から話が始まった。これまでの経緯を話して、利知未が言う。

「お母様が出してくれると仰ってる分は、当日のご祝儀から返せると思うんだけど」

「お袋は、受け取らないと思うけどな」

「それなら、その半分を家で払うか……」

優は手を拱いて、少々考える。

「そうね、そこまでお世話に成りっ放しなもの、気が引けるでしょう?」

明日香は今の蓄えを、頭の中で計算している。

『裕一は、来年学校だけど。お受験する訳じゃないし』

節約をして、もう少し溜め込んだ方が良いかも知れない。

「それならそれで、勿論こっちにも返すよ」

「向こうの親御さんが受け取らない物を、俺達が受け取れないだろう」

「お袋には、俺から渡すよ。昔の、バイクの借金返済とでも理由つけて」

倉真が、思い付いて言う。

あの時、一人暮らしを始めた自分に、返し終わっていたバイクの借金と、更に二万を上乗せして、母親は美由紀に託して渡してくれた。

漸く、キッチリと返す事が出来る。その分は当然、倉真の貯金から出す。

「費用は、なるべく安く上げるつもりで、見積もりを出して貰っているから……。お母様が引き受けてくれた分も、二十万は無い位

「だけど」

「半額として、夫婦で結婚式へ出席したら当然の出費分だな」

「そう言う事に、なるかしら？」

それならそれで、腹も括れる。

「結納は無しで、本当に良いのか？」

「その辺りは、話し合い済みです」

「そうか」

正直、助かると思う。

優は大黒柱として、一人で一家四人の生活費を稼いで来ているのだ。余裕はそうそう、ある物ではない。

明日香は、遣り繰り上手な奥さんだ。お陰様で微々たる物でも、幾らかは蓄えてくれているのも解っている。

優も利知末も、大学を出てからは確りと自分の足で生活を支えている。ニユーヨークの母親は、いったい現在、いくら位溜め込んでいるのやら？　とも、考えてしまった。

思いがソコへ至って、優は大事な事を聞き漏らしていた事に気付く。

「お袋には、連絡してあるのか？」

「……まだです」

「お前は、……どうせ法事の連絡をするから、俺から言って置く」  
呆れた優が、渋い顔をしながら引き受けてくれた。

「……お願いします」

利知末は素直に、お願いしてしまった。

「利知末は、それで良いのか？」

倉真に突っ込まれてしまう。

「イイト、思う、けど？」

利知末と倉真の短い会話に、優は思わず、笑顔になる。

「お前には、丁度良い男だな」

笑顔の優から、そう言われてしまい、二人は少々、照れ臭くなった。



明日香も、笑顔で二人を見つめていた。

子供達が帰って来るまでに、話し合いは粗方、片付いた。夕食を優一家と共に取ってから、利知未と倉真は帰宅した。

「改めて、お袋も連れて、館川さんへ挨拶に伺わないとな」 夕食時間、優はそう呟いていた。

## 二

倉真のシャツとネクタイは、間の休日を使って、利知未が用意した。靴は、一昨年の冴吏が絡んだ騒動で、一足、用意されている靴下も同じだ。

ネクタイの結び方は、利知未が倉真に伝授してやった。

今年の命日は月曜になってしまう。法事は一日早めて、日曜日に行う事となっていた。前日から、利知未は慶弔休暇を二日取った。

去年の正月は、利知未が緊張していた。今回は倉真の番だ。

少しは緊張をしているのかと思っただ、前日まで倉真は、全く代わり映えがしなかった。

「顔合わせより、服装が面倒臭いな」

法事前日の夕飯も、何時もと変わらず三杯飯を腹へ収めながら、そんな事をばやいていた。利知未は呆れてしまう。

「倉真、案外と図太かったんだね」

「何がだ？」

「今日も三杯飯。　：　あたしが、去年のお正月には前日から、殆どご飯も喉を通らなかったのは、覚えてる？」

「ああ、覚えてるぞ。　嫁に行く側と、貰う側の差ってヤツじゃないのか？」

呑気に、そんな答えを返してくれた。

「普段、付き合いのある優さんの所は、すっかり馴染んじまったし」「そりゃ、そーだけど。　何か、口惜しいな」

利知未は箸を止めて、頬を膨らませてしまった。

「良い顔だな。　結婚式も、その顔で写真撮るか？」

倉真からニヤリと、楽しそうに笑われてしまった。

「それで良いんだ？　将来、子供達に、お前のお母さんは、こんな顔して大事な記念写真を撮るようなヤツなんだぞって、教えるつもり？」

利知未は益々、剥れてしまった。

翌日も倉真の呑気な様子に、利知未の方がハラハラと緊張してしまつ。　倉真は出掛けまで、呑気にテレビを眺めて、タバコを吸っていた。

「倉真、ハンカチ持った？　お財布は？　靴下、裏返しに履いてないよね？　ネクタイはちゃんと結べたの？」

自分の支度を終えて、まるで母親のように倉真へ問い掛ける。

「ああ？　持つてるぞ。　ネクタイは、こんなもんだろ？」

「緩んでる。　ちょっと、こっち向いて」

利知未は倉真のネクタイを解いて、確りと結び直してしまった。

「う、苦しい…」

「これで普通なの。　第一ボタンが見える様な、緩い結び方したりして。　見つとも無いでしょ？　全く」

少し、キツめに結んでやった。　倉真は、漸く呑気な顔から表情を変える。　真面目な表情ではなく、ネクタイのキツさへの、しかめ

っ面だった。

本音では緊張していた。だが、その姿を曝け出すのは嫌な感じがする。それは、妙なプライドなのかも知れないと、倉真は自己分析を試みた。

優達一家は現在、借家ではあるが立派な一戸建てに住んでいる。法事は、その仏間で行われた。法要後は、近所に在る小さな料理屋へと移動する。そこで宴席を設けて簡単な酒肴となり、その後、引き出物を配って解散となる。

幼い頃からの兄妹を知っている親戚達は、始め、利知末の変わり様を見てビックリしていた。

「もう、落ち着いても当たり前の年だな」  
昔、世話になっていた親戚からは、そんな言葉が漏れていた。

利知末たち兄妹は、約十年振りに母親と顔を合わる事となった。場所を移動してから、倉真は改めて、利知末の母親と親戚一同へ紹介された。

久し振りに会った母親は、代わり映えないと利知末は感じた。以前よりもまた少し、近寄り難い雰囲気になっていたかもしれない。

母親は、今年で五十九歳になる。仕事は既に実務的な部分を後身へ任せ、自分は重職へ就いている。

いい加減、日本へ戻ってくれば良いと、優はここ数年、思い続けた。母が現役を退いた頃、優から進言して見た事もあった。その時も。

「私には、日本の水は合わないようだから」

そう言って、死ぬまで戻る気は無いと、ハッキリと言い渡されていた。

「子供も独立して、生活しているのだから。もう母親は、必要無いでしょう」　とも言われた。

考え方が少々、ドライ過ぎる嫌いのある人だった。

その言葉は、長い間、放っておいた子供達に対する、彼女なりの詫びの気持ちからの言葉だったのではないかと、最近、優は思い始めた。

『今更、母親面して、老後の面倒を俺達に見て貰いたいとは、言えないのだろう。俺達の養育費は、彼女が一人、仕事を頑張り続けたお陰で、滞る事もなかった。その点での苦労や肩身の狭い思いは、せずに済んで来たのは確かだ』

優は、今回の法事の件で母親と話をして見て、そんな思いに至った。

利知未は、どうしても実の母親とは、打ち解けられない。

『倉真のお母さんの方が、余程、本当のお母さんのよう……』  
十年振りに顔を合わせた母親と、短い会話を交わし、改めてそう感じてしまった。

利知未は実の母親に対しても、礼儀正しく、まるで他人の母親に對するように接していた。

倉真が利知未を呼んで、短い時間、宴席を中座した。廊下へ出て、声を潜めて会話した。

「取り敢えず、紹介は終わりだよな？」

「そう。結婚後も、付き合いは余り無い人達だろうけど」

「ま、家庭の事情は、様々だからな。……それより」

倉真は、心配そうな顔付きになる。

「お前、お袋さんと、あんな感じの儘で良いのか？」

利知未は俯いてしまった。 考えながら、ポツリと言った。

「……あたしは、やっぱり、あの人を母親だ何て思えない」

「それでも、実のお袋さんだろう？」

「そうだけど……。 何か、倉真のお母さんの方が、よっぽど、自分のお母さんみたいな感じがするよ？」

言葉の最後に微笑を見せて、利知未は言った。

「家のお袋は、嬉しいがるんだろうけどな」

「叱られちゃうかな？ ……叱られて見たいような気も、するけど」

「……気の毒がると思うぜ」

「……そっか。 やっぱり、そうなっちゃうのかな」

小さな溜息が、出て来てしまった。

「うん。 もう少し、頑張ってみる」

軽く頷いて、利知未は倉真に約束をした。

「ああ。 俺が、お前の気持ちは支えてやる」

ハッキリと言い切って、倉真は優しい笑顔を見せてくれた。

宴席へ戻って、優の接待を手伝い気を紛らせた。 滞りなく予定が消化され、親族一同が解散して行った。

利知未達親子と倉真は、一端、優の家へと帰宅した。

優の家で、明日香が全員に茶を出してくれた。 取り敢えず、居間で一息ついた。 改めて倉真は、利知未の母親に挨拶をした。

「俺の家族は皆、彼女に感謝をしています。 家族揃って、彼女の事を大切に行きます」

そう言った倉真を見て、母親は一応、微笑を見せてくれた。

「私は、居ないと思って下さって結構です。 娘を宜しく願います」

そう返事をして、疲れたので少し休ませて貰いますと言置き、さつさと奥の部屋へ引っ込んでしまった。

母親が居間を出てから、優が倉真に対して申し訳ない顔になる。

「済まない。驚かせたんじゃ無いか？」

「……まあ、返って気楽っすよ？」

「娘の婚約者に対して、自分は居ないと思ってくれて構わないとはな……。正直、俺も少し驚いちまった」

我が母親ながら、呆れてしまう言い様だ。

「……あの人らしい言い様では、あったね」

利知未は、やはり母とは呼べないと思う。親戚の前では一応、母さんと呼び掛けては見たが、呼び掛ける度に虚しい気分になってしまった。

「取り敢えず、今夜はここへ泊まって貰うからな。お前は、明日また仕事なのか？」

「夜勤でね」

「そうか、仕方ないな」

利知未の結婚式の事を、母親に詳しく伝える必要がある。今は現役を退いている身だ。休みは、取れない筈は無いだろう。式と披露宴への出席を承知させる為に、今夜は少々、話し合わなければならぬだろうと優は考えていた。

「家族の顔合わせは、式の後になっちまいそうだな」

挨拶に連れて行かなければならないとは思っているが、明日には戻ると言う母親を、館川家へ連れて行くのは不可能だろう。

「それで構わないっすよ？ 優さんが正月に来てくれたんだし」

「嫁ぎ先への訪問なんだし、繰り返し返さない方が良いのかも知れないわね」

「そう言う言い訳は、通用する物か？」

明日香の意見を聞いて、優はやや顔を顰めてしまった。

「ご挨拶出来ない、お断りの理由よ。言い訳とは違うと思うけど」

？」

少々、無理矢理な意見かもしれないが、そう言う事にしてしまった。

利知未と倉真が帰宅してから、夕食後、優は母親と話し合った。

結婚式と披露宴は出席して貰う約束をした。

「流石に、こればかりは断れないでしょう」

母親は少し面倒臭そうに、そう言っていた。

明日香は夜、寝室で、優相手にぼやいてしまった。

「優のお母様を悪く言うべきじゃないのは、解るけど……。実の娘の結婚式だつて言うのに、楽しみだとか、そう言う感想が出て来ないって言うのは、やっぱり私には理解出来ないわ」

利知未が、可哀想だと思う。

「まあ、ああ言う人だ。昔から」

優は、何も返すべき言葉が浮かばなかった。

翌日、母親は午前中に機上の人となつてしまった。利知未の所

へは、夜勤へ出掛ける前に、優から連絡が入った。

花嫁の実母が欠席の結婚式と言うのも、締まらない物だ。取り

敢えず出席はすると言っていたと聞いて、利知未は一応、安心する事にした。

利知未達の母親はニューヨークへ戻り、直ぐに仕事場のデスクの前へ座る。

手を伸ばして、デスクの上から取り上げたのは、まだ幼い子供達

と笑顔で写っている、幸せそうな家族写真だった。

「……利知未も、結婚する年なのね」

写真の利知未は、まだ赤ん坊だ。母の腕に抱かれて、安らかな寝顔。

暫らく眺めていた。ノックの音で我に返った。

母親は、眺めていた写真縦をデスクの上へ静かに伏せて、顔を上げた。



5 研修医・二年 三月（三ヶ月前）

—

三月二日の日曜日。 利知未は倉真の実家から、遊びに来いと誘われた。

「お雛様、もう飾ってあるのよ。 一日早いけど、一緒にお祝いしましょう?」

倉真の母親から、そう連絡があった。

「去年は、ブーイングの嵐だったからな。 お袋も一美も、執念深いぜ」

月頭の土曜日、連絡があった事を伝えたと、倉真にそう、ぼやかれた。

「執念深いって、酷くない? お母さんも一美さんも、一緒にお祝いしてくれようって、気を回してくれたのに」

利知未に叱られてしまった。

自分の家族と仲良くしてくれる事は、喜ばしい事だ。 だが、先月の法事で、利知未の家族内の複雑な気持ちの流れを、改めて知ってしまった。

実の母親とも、もう少し打ち解けられれば、利知未の心も軽くなるのでは無いかと、自分の事を引き比べて見て、倉真は思う。

「ま、良いんじゃないか? 行つて来れば」

「倉真も一緒に、来てくれないの?」

「女の祭りだろうが。 俺が行つて、また嫌味を聞かされるのか?」

「お父さんの相手、して上げなよ。将棋の勉強、続けてたでしょ？」

「……そろそろ、一勝ぐらいは奪えるか？」

「さあ？ それは、やって見ないと解らないと思うけど」

「シヤー無い。親父の相手をしてやりに、行ってやるか」

倉真と父親の関係は、今の所は順調そうだ。

自分の事はさて置き、その事は、利知未にとっても喜ばしい事だと思う。

「そうしてあげて」

利知未に笑顔で言われ、明日は倉真も一緒に、実家へ出掛ける事になった。

翌日。母親と一美は、利知未の事を待ち構えていた。

「今日は、お雛祭りのついでに、後で利知未さんの肌襦袢や裾避けを見に行きましょう？ 他の物は、私ので良ければ、お貸ししますよ」

そう言いながら、利知未を雛壇が飾られた居間へと、引っ張って行った。

「ったく。俺は、おまけかよ？」

ぼやいて倉真は、父親を呼びわりながら、呑気に奥へと歩いて行った。

父親は寝室兼、夫婦の部屋で、本を片手に将棋盤へ向かっていた。

「親父、再戦、申し込むぜ？」

「少しは勉強して来たのか」

「かなりな。今日こそ一勝を奪う」

「相手をしてやる」

本を片付け、将棋盤へ敷いた布陣を崩しながら、そう答えた。

館川家の雛壇は、五段飾りの少し小振りな物だった。それでも手の込んだ、立派な造りの物だ。

「一美が生まれた頃には、店も軌道に乗り始めていたから。お父さんが奮発して、当時の我が家には、少し高価なくらいの雛飾りを買ってしまったのよ。それから後、一度、上手く行かなくなってしまった時期もあったんだけど……。その時も、この雛飾りだけは手放さなかったの」

倉真の母親は、雛壇に纏わる、当時の思い出話をしてくれた。

「倉真が小学校二、三年の頃かしら？ 小豆が不作で…、家は和菓子屋でしょう？ 原価が上がってしまって、一つ一つの値段も上げなければ追いつかない位だったのよ。ただとお父さんは、折角、着いて来てくれ始めたお客様に、そんな金額では売れないと言って元の金額を変えないで頑張ってしまったの。お陰で、家計は苦しかったわよ、あの当時は」

倉真を初めて、釣りに連れて行ったのは、その頃だと言う。

「気晴らし相手が、欲しかったんだと思うわ」

それで連れて行ったはいいけれど、倉真の性格には、余り釣りは向かなかった。父親に背負われて、爆睡中のまま帰宅して来たのだ。「それから、何度か連れて行ってみたけれど、毎回、同じ。自分の竿でも持てば、もう少し夢中になってくれるかと思って、タダでさえ少ない小遣いから遣り繰りして、一本買って上げて見たんだけど。やっぱり同じだったって。それからは、また一人で行くようになったのよ」

翌年は小豆の価格も元に戻り、他の店では前年に上げた価格のまま、商売をし続けていたが、夫は以前と変わらない金額で、仕事には手を抜かずに良くやっていた。

その事が評判となり、以前よりも大口の取引が纏まって来た。

三年もする頃には、すっかり当時の赤字も抜け出す事が出来て、店を大きくする事も出来たのだと、言っていた。

「商人ですね」

「損して得取れを、地で行った例でしょうね」

利知末の言葉に、母親は笑顔でそう答えた。

「あたしは全然、知らなかったけど。 そんな時期が、あったんだ」  
「ええ。 倉真の腕白に火が付いたのも、その頃よ」

それまでも活発で喧嘩も多かったが、まだ可愛い範囲の事だったらしい。

「自分よりも大きな子を相手に、喧嘩をし始めたのも、その頃。大抵は、倉真に懐いていた近所の子供が苛められたとか言って、仕返しに行き始めてしまったのよ。 気が付くと、この辺りのガキ大将になってしまっていたわ」

それから中学へ入り、新しい友人から教えて貰ったパンクロックや、ヘビイメタルに嵌ってしまった。 髪型をオカシな形に変えてしまい、学校からは頻繁に保護者呼び出しを受けていた。

克己との出会いは、その頃の事らしい。 翌年、ギターをお年玉で買って、練習を始めた。 中学二年に上がる頃には、この辺りで知らない者が居ない程の、喧嘩上等伝説を作り上げてしまっていた。

「兎に角、あの子には手を焼かされました。 ……それが、今じゃねえ」

奥の寝室で、あれ程、反りの合わなかった父親と、仲良く将棋盤を囲んでいる息子の顔を、思い出した。

「本当に、利知末さんには感謝しています。 有り難う」

改めて、利知末に対して頭を下げた。

利知末は、またまた恐縮してしまった。

今回も倉真は、父親に中々、勝たせて貰えなかった。

「少しは、やるようになったな」

駒を手に父親が考える時間は、多少なりとも増えている。

「マジ、今日は勝つまで帰らねーぞ？」

倉真も手応えを感じ始めて、更にムキになっている。

父親は無言で、湯飲みへ手を伸ばした。口へ運んでみて、既に飲み干していた事に気付いた。

「おい！」

声を上げて、妻を呼ぶ。居間で話しに盛り上がっていた妻は、気付く事が出来なかった。

暫らく待って、また声を上げる。三度目に名前を呼ばわり、漸く妻へと声が届いた。

「おい！ 澄江！」

奥から聞こえて来た声に、一美と利知未が気付いた。

「お母さん、お父さんが呼んでるよ？」

一美が話の途中で、母親へ教えてあげた。

「あら、そうだった？ はい、只今！」

返事をして、立ち上がろうと座卓へ手を突いた。

「お茶かしら。セツトにして、持って行ってしまっただけの方が良いかも知れないわね」

呟きながら立ち上がり、居間を出て行った。

「お父さん、将棋を始めると全く動かなくなっちゃうんだよね」

一美が呆れたように言って、呑気な様子で、甘酒と雛霰へ手を伸ばした。

母親が戻ってから、もう暫らく話をしていた。時計を見て、お昼の準備に立ち上がる。利知未が声を掛けて、今日も昼餉の準備

を手伝った。

「三人でやつちやった方が、早いよね。あたしも手伝うよ。今日も、お握りでも作る？」

「そうね。利知未さん、少し様子を見て来て貰っても、構わないかしら？」

母親に言われて、利知未は始めて、夫婦の部屋へ顔を出した。

館川家では、利知未に対して徐々に、嫁同様の扱いへと近付いて来ている。それは嬉しい事だと、利知未には感じられていた。

仲の良い家族の一員に迎えられるのなら。嫁ぐ身として、それ程、嬉しい事は無いと思えている。最近では館川家へ訪問するのも大分と気楽に成れて来ていた。

気持ちに通じる物なのだろう。倉真の家族は、何時でも利知未の事を喜んで迎え入れてくれている。

利知未が父と兄の様子を見に行っている間に、一美が言っていた。「利知未さん、別居じゃなくて同居しちゃえば良いのに」

義姉として、嫌な相手では全く無い。一緒に暮らしてくれたら、兄が家を出てから一人っ子のような生活をして来ていた一美にとって、いい姉貴分が出来て、さぞ楽しかろうと思ってしまう。

「そうね。そうしてくれたら、良いわねえ」

母親も、娘がもう一人増える感じで、賑やかで楽しいのだろうにと思っ。

「でも、新婚の内から舅・姑・小姑に囲まれるのは、やっぱり可哀想か」

一美はそう言っ、軽く肩を竦めていた。

男二人には、今回も握り飯と味噌汁の昼飯が用意された。準備を終えて、女三人は、どうせ呉服店へ行く用事が有るのだから、いっその事どこかでお昼を済ませてしまおうと、話が決まってしまう

た。

奥の二人へ声を掛けて、早速、商店街へと出掛けて行った。

「偶には遊ばせて貰わないと、気が疲れてしまうわ」

母親はそう言って、笑っていた。

倉真はこの日、漸く父親に勝利する事が出来た。

「うつしゃ！」

思わずガッツポーズをしてしまう。父親は、顔を顰めて呟いた。

「次は、本気で行くぞ」

「け、老兵は去り行くのみて言葉を、知ってるか？」

いい気になった倉真に対して、父親は容赦なく迎え撃った。

その後、本気に成った父親に、倉真はコテンパンにやられてしまった。

「お前の一勝・八敗だ」

父親は、今まで以上に不適な薄ら笑いを浮かべていた。

「くそ、もう一勝負」

「何度やっても、同じ事だ」

ぼそりと言いながら、父親は嬉しそうに、将棋の駒を並べ直した。

利知未達は、商店街の食事・甘味処で、季節の雛膳を戴いた。

「ここの抹茶セットの和菓子は、家が納品しているのよ」

母親が教えてくれた。それから、のんびりとデザートを戴いてから、予定通り呉服店へと向かった。

利知未も、和菓子の一つ位なら美味しいと感じる事も出来る。

試しに館川氏が納品していると言う和菓子を目当てに、抹茶セットを戴いてみた。

呉服店で目的の品物を購入してから、女主人が出してくれた緑茶を戴きながら、新しく仕入れたと言う、反物を何点か見せて貰った。

倉真の母親は、この店に來ると、こうして反物を吟味しながら女主人を相手にして、世間話をして行くのが習慣らしい。

ここでの時間が良い氣晴らしに成っていると、利知未達にも言っていた。

帰宅したのは四時近かった。男二人は、相変わらず将棋盤を挟んでいた。結局この日も、夕食まで呼ばれてからアパートへと戻った。

夕食には、散らし寿司と潮汁が、振舞われたのだった。

## 二

中旬になり、式場から封書が届いた。

改めて、パンフレットや、これから式までの間の相談内容などを、時期と合わせてグラフに表した書類が同封されていた。

係りの女性からの、一筆文も添えられていた。

『来月になりましたら、是非一度、顔をお見せ下さい』

そして、担当者への直通連絡先が、丁寧に書き添えられていた。

「良い式場だな。　こう言う事、して貰えるとは思わなかった」

利知未は封書を改めて、感心していた。

「普通じゃないのか？」

「解らないけど。　結婚って、殆どの人が始めての事だから、こう言うフォローがあると有り難いよね」

自分達の後で結婚を予定しているカップルに、紹介してあげても良いかも知れない。

「そうだな。　お代わりくれ」

今は、夕食中だ。　利知未は今日、午後から外来担当の日だった。倉真にお代わりを注いで渡して、食事の続きを始めた。　片手に



グラフを持って、眺めながら食べ始めた。

「グラフによると、来月中に招待状の手配と料理、飲み物の注文。引き出物の予約と貸衣装の予約、だ」

「招待状なんて、もう準備するのか？」

「発送は、再来月になるけど。文面を決めたり、リストの作成が必要。印刷をお願いする都合があるみたい」

「んな事まで、書いてあるのか？」

「文面の候補チラシも、入ってるよ？ 式場で頼んでしまった方が確かかも知れないね。こうやって、四ヶ月前にキツチリ連絡を寄越してくれるんだから、信頼は出来る所なんじゃないかな？」

利知未が話している間にも、倉真の箸は止まらない。

「商売上手だな、この式場」

「そう取る？」

「冷静な判断だよ」

倉真は二杯目も平らげて、再び上目遣いで利知未を見る。

「もう、二杯目も食べちゃったの？ 呆れる食欲だな」

利知未は手を出して、空の飯茶碗を倉真の手から受け取った。

「早飯食いは、胃に悪いよ」

三杯目を渡しながら、一応、忠告だけしてみた。

「確り噛んでるぞ？ 胃は丈夫だ」

言いながら早速、倉真は箸を動かしていた。

食事を終え一段落してから、利知未から倉真の母親へ連絡を入れた。式場からの封書の話をして、招待客リストの再チェックを、次の土日休みにしてみる事になった。招待状の文面も相談しようと思った。

電話を切って優にも連絡を入れて、同じ事を伝えた。次の休日、一日を館川家、一日を優宅へ出掛ける事になった。

翌日、利知未は病院で、結婚式の報告をチラリとしておいた。

「塚田先生には、披露宴にも出席して頂きたいのですが」

利知未から言われて、塚田医師は、喜んでと答えてくれた。

「おめでとう。休暇届は、早めに出して置いた方が良いでしょう」  
そう教えてくれた。

塚田医師に言われて、利知未は総務にも連絡をしておいた。

「慶弔休暇は、一週間取れます。四月の末には休暇届けをご提出下さい」

総務からは、そう言われて来た。やはり、おめでとうございますと、事務の女性からも言って貰った。

普段、個人的な関りの無い人達からも祝いの言葉を向けられる様になり、利知未も漸く自分が結婚する事を、実感し始めた。

昼休みは、香を誘った。改めて結婚の日時を報告して、香にも出席を依頼した。香からも嬉しい報告が聞けた。

「おめでとう。日曜なら、心配ないわね。…実はね、私も、プロポーズして貰いました」

「おめでとう！ 何時？」

「つい、この前の土曜日よ。結婚は、秋頃の予定」

「そうなんだ。今年の秋には、お目出度い事が続くな。前にお世話になっていた下宿の大家さん、九月に出産予定だって言ってたんだ」

「そうなの？ 喜ばしい事ね。秋頃って、前、利知未さんが結婚をしようと思ってるって、言っていたでしょう？ 重なったら如何しよう何て、余計な事を考えちゃったわ」

「報告が遅くなって、ごめん。じゃ、招待状は、改めて送ります」  
「手渡しても良いけど？」

「式場に、発送は任せてしまう事になると思うから」

「そう？ で、利知未さんはいつ頃、お母さんになる予定なの？」

香に聞かれて、首を竦める。

「本当は、早い方が良さんだろうけど……。 お金の貯まり具合に、寄ると思う」

「二十代の内に出産した方が良さわよ？ 私も、成るべく来年には子供も欲しいと思うけど」

「ギリギリじゃない？」

香は、利知未よりも二歳年上だ。 利知未が今年で二十七になるのだから、香は二十九歳。 来年の誕生日前には、と言う意味なのだろう。

「ハネムーンベイベーに、期待するしかないかも？」

「計算しないと？」

「ね！」

明るい冗談で、笑顔の昼食となった。

夜、思い付いて、準一と和泉にも連絡を入れた。 こちらからは、驚きの返事が返って来た。

準一は相変わらずだった。 式の日時を聞いて、師匠に連絡をしないと、と言っていた。

「式の写真、撮ってくれるって言ってくれてたよね」

「そう言うこと。 だから、二次会じゃなくて、式から顔合わせられるよ」

ソファで晩酌中の倉真に、目顔で準一との電話の成り行きを問われた。

「ジュンの師匠、結婚式の写真、撮ってくれるって言っていたでしょう？ 式場の撮影費用は、最初から入れてなかった筈だけど」

送話口を手で押さえて、利知未が答えた。

「そう言や、そうだったな」

納得して、酒を口へ運ぶ。

「倉真とも話す？」

利知未は、再び電話口の準一へ問い掛けた。

「冷やかしてやるう」

「代わるね」

倉真に受話器を渡す。 倉真はグラスを持ったまま、話を始めた。

「おお、宜しく言っておいてくれよ？」

「師匠に？ 言っとく。 後、四ヶ月か。 浮気してないの？」

「する訳、無いだろ。 そう言う暇もありゃしない」

「暇があつたら、したいとは思ってるんだ」

「バカヤロ、くだらない事、言ってるな。 利知未に睨まれてるぞ？」

「聞こえるくらい、くっ付いてんのか？」

コードレスの受話器が、ソファにいる倉真へ渡されていた。 利知未は隣に座って、酒を飲んでいる。 態と大きめな声で言っていた。

「聞こえてるんだけど？ ヘンな事、言わないでよね」

「ヤバ。 今の無し！」

準一の少し慌てた声に、倉真は軽く吹き出してしまった。

「それはそーと、それなら和尚は、行けないかも知れないよ？」

準一の言葉に、二人はチラリと目を合わせる。

「どう言う事だ？」

「和尚、今年の春から由香子ちゃんの所で、二、三年、生活してみらうて」

「そんな話しになつていたの？！」

利知未の方が、先に声が出てしまった。

「今から、連絡してみるか？」

「うん。 倉真、貸して」

受話器を受け取り、利知未が準一に言った。

「教えてくれて、ありがと。 今度、時間作るから、ご飯、食べにおいで」

「マジで？ 行く！ ンじゃ、また連絡するから。 和尚に宜しく」

「解った、じゃね」

電話を切って、直ぐに和泉へ連絡を入れ直した。

電話口と呼ばれた和泉は、落ち着いていた。

「そうですね。俺は、五月には行く予定で準備を始めています。連絡が遅くなって済みません。決まったのが今年の正月過ぎだったんで、色々と雑用が多くて」

利知未に問われて、そう答えた。

「ビックリしたよ。ジュンには何時頃、話していたの？」

「樹絵ちゃんと、先月遊びに来たんで、その時に」

「そっか」

倉真が、隣で話の成り行きを見守っていた。利知未は和泉に断つて、倉真へと受話器を渡す。

「お前も行き成りなヤツだな。もうチヨイ早くに、連絡寄越せよ？」

「お前に言われるとはな」

呟いて、小さく笑っている。

「悪かったよ。秋だったら一度、戻る事も出来たかも知れないな」

「ま、仕方ないな。久し振りに、FOXのライブを企画していたんだけどな」

「利知未さんが歌うのか？」

「いや。現在のFOXが、二次会の始めに三十分位でライブをしてくれる約束だよ。あの頃の曲も、演奏リストに入れてくれるんじゃないか？」

「それは残念だったな。ビデオにでも撮ってくれよ」

「その手があったか」

「思い付かなかったのか？」

「…全く」

「お前らしいな」

「悪かったな。……ンじゃ、その前に一度、会うか？」

「そうだな。来月の頭か、準備が終わった頃が良いけどな」

「分かった。利知末と相談しとくよ」

「おお。……幸せにな」

「まだ、早いな。けど、サンキュ」

利知末に無言で、代わるか？と問い掛けた。頷いて、受話器は再び倉真の手から、利知末の手へと渡る。

「あたしの来月のシフトが出てから、また連絡するから」

「はい。この位の時間なら居ます」

「分かった。じゃ、またね？」

「はい、また」

電話を切って、受話器を置いた。

「ね、どうせなら和尚も、ジュンと一緒にここへ来て貰おうか？」

受話器を置いた途端、思い付いた。

「それも、良いな。ジュンに迎えに行かせれば良い訳だ」

「丁度良く、樹絵でも遊びに来てくれないかな？」

「賑やかになるな」

「でしょ？ 樹絵とは、また一年以上も会ってないし」

「もう、仕事している筈だな」

「二年目に入るでしょ。今は、何処の警察署に居るんだろ？」

そんな話をしながら、晩酌を続けた。明日も仕事だ。十二時前には寝室へ引っ込んだ。

週末に館川家と優宅へ伺い、招待状の文面と、送り先の最終チェックを終わらせた。料理も引き出物も、改めて最終決定をした。貸衣装についても、利知末の衣装に合わせて、倉真の当日の衣装を決め、予約をするだけの状態に整え終ったのだった。

一

四月に入り、利知未は晴れて正勤医師となった。基本給も七万円以上、上がった。これから先、オペ手当ても今までの1・5倍は入る計算だ。

外来の担当日も変わった。火曜日と木曜日の半日、毎週の担当となった。土日の夜勤は確実に、隔週で入ってくる事になる。生活のリズムを掴むまでには、暫らく時間が掛かりそうだ。

今月のシフトが出て、始めの土日休みの一日は式場へ行く。月中の土日、準一と和泉の予定を聞いて、会う約束をした。

連絡をした時、準一が気楽に言い出した。

「どうせなら、宏治も一緒に呼んじゃえば、仲間が全員集合って事になるんじゃない？」

「そうだね。日曜なら、宏治も来られるか」

「オレ、誘つとく！」

準一との電話を終えて、倉真にも、その事を伝えた。

五日の土曜日。今回も倉真の母親と、三人で式場へ出掛けた。

料理も引き出物のプランも、基本は倉真の母親の意向通りだ。

館川家の家業柄、料理は和食で組み立てていた。招待客も、どちらかと言えば年配者の方が多い。利知未と倉真の仕事、友人関係は、こぞって二次会メンバーだ。

料理の話を終え、係りの女性が言い足した。

「当日、花嫁は、お食事をされるのが難しいと思いますので、簡単

なお食事を、お色直しの時にご用意しておきます」

それは、サービスで付けてくれると言う。お握りかサンドウィッチになると言うが、それで宜しければと促され、お願いしておいた引き出物の話しになり、持ち込み料は掛からないと聞いて、利知未は内心でほっとした。

相談と予約を終え、帰り際。ウェディングエステの割引券をプレゼントされた。式場内に施設がある場所も、下見をした中にはいくつかあった。

係員の態度が良くなかった所だったので、話の途中で倉真の母が席を立ってしまった式場だった。

「このチケットは、都内の有名なエステサロンの物なんだ」  
チケットを見て、利知未が呟いた。

「当式場の施設内には、サロンがございませんので。ご協力戴いております」

係りの女性は、そう教えてくれた。

帰り道、車の中で倉真の母親が言う。

「媒酌人をして下さるご夫婦にも、一度、挨拶へ行かなければならないわね」

「何時頃が、良いのでしょうか？」

「利知未さんのお仕事の都合を見て、良い日を探してみましょう？ 式は六月の末なのだから、五月末頃までには」

「シフトを確認してみます」

利知未の言葉に頷いて、母親が思い付いた。

「それはそうと、指輪はもう準備してあるの？」

言われて、二人は顔を見合わせる。

「そう言えば……」

「まだ、だったね？」



「サイズの直しもあるのだし。 ついでだから、周ってしまおう?」

「それだったら、店に当てがある」

「少し、遠いですけど?」

「構わないわよ、周って行ってしまうでしょう。 これから先、そうそう時間も取れないでしょうから」

母親の意見で、そのまま東京の中心地から、横浜・桜木町までの強行軍となってしまった。 時間は、まだ昼過ぎだ。 ついでに、どこかで昼食を済ませてしまおう話になった。

途中で食事を簡単に済ませて、利知未のネックレスやエンゲージリングと、利知未が大学時代に、透子の誕生日プレゼントを購入した店へ向かった。

「ここで、何か、お買い物をした事はあるの?」

店へ入る前に、母親が問い掛ける。

「何度か来てる」

倉真は短く答えた。

「結婚指輪は、一生物ですから。 信頼の置けるお店で準備するのが、一番よ。 その点は大丈夫?」

その質問には、利知未が答えた。

「大丈夫です。 良い、お店ですよ」

「利知未さんが言うのなら、大丈夫ね」

母親は、ニコリとした。 倉真が、その言葉へ軽く突っ込んだ。

「そりゃ、どー言う意味だよ?」

「宝石や装飾品は、男の目よりも女の目の方が確かだと、言う事ですよ」

入りましようか。 と言って、母親が先へ立ち、店に足を踏み込んだ。

何時も倉真の相談に乗ってくれていた店員は、まだここで働いていた。　どうやら、当時よりも肩書きが増えたらしかった。　責任者の立場に立ち、客からの真剣な買い物の相談を、引き受けている。

倉真の母親も、その店員の態度や物腰には、安心感を得る事が出来た。

何点か現物を見せて貰いながら、倉真の母親の厳しい目と意見も混ざり、少々、長い時間の相談となった。　三人が納得した商品をサイズ直しと共に注文して、代金は受け取りに来る時に支払う話で纏まった。

お直し料込みの見積もりを出して貰い、利知未が平日の休日に受け取りに来る事になった。

用事を済ませて、倉真の実家へ到着したのは、夕方近くになってしまった。

居間へ通って、利知未はバッグからシフト表を取り出して、壁に掛けてあったカレンダーと、日和を見比べた。　媒酌人への挨拶日の相談だ。

「今月は、合わないですね」

「それなら、来月の予定が出たら連絡を貰える？」

「はい。　あの、私の母は、一緒に伺えないと思うのですが……」

「そうね、優さんに、代わりに来て戴きましようか？」

「それで良いのでしょうか？」

「事情があるのだから」

息子から、利知未の母親と会った時の事をチラリと聞いていた。

「何ソーか、… 凄い人、だったぜ？」

母から聞かれた倉真は、短く、こう答えておいた。

「優さんに、完全に任せている感じだよ」

その時、倉真は電話口で肩を竦めて、そう言っていたのだった。話を聞いた倉真の母は、利知未の母親に対する接し方を、少し考えてみた。

『ただ、普段はこちらに居なくて、優さんが唯一のご家族と言うのなら』

利知未の母親の事は、良くは解らないが、基本的には優夫婦との関わりが友好的に進めば、大きな問題も出ないのでは無いかと、結論を出した。

「それならそれで、これから優さん達と相談をするようにすれば、良いのね」

あの時、電話口では息子に、そう答えておいた。

「お母様は、普段は日本にいらっしやらないのでしょうか？　これから先にも、戻られるつもりは無いのかしら？」

念の為、確認しておく必要はあるだろう。

「兄には、そう言っていたと」

「そう。それならそれで、優さんにお任せしましょう？」

「…済みません」

「あなたが謝る必要は、ありませんよ。お嫁さんに来て頂くのは、こちらなのですから。ご家庭の事情も、何も気にしなくて構いません。あなたは瀬川家から籍を抜き、倉真の家族になるのだから」

実の母親が生きて元気になっているのに、一緒に喜びを分かち合えないと言うのは、どんなに寂しい思いを抱いている事かと、利知未の事を気の毒に感じてしまう。

それでも、これほど確りとした優しいお嬢さんに成長されているのだから、これは偏に彼女自身の、資質の賜物なのだろう。

その点でも、彼女を責める気持ちには、到底なれはしないところだ。

「お袋は、息子の俺よりも利知末の方が良いらしいぜ？」

倉真がニヤリとして言った。

「そう言う言い方は、どうなの？」

利知末は、つい倉真を窘めてしまい、母親の視線を気にして俯いてしまった。

「…済みません」

「いいのよ。私が躰けられなかった分、これからも確りと叱ってあげて」

倉真の母親はそう言って、笑顔を見せてくれた。

それから、式場から送られた資料を見せて、今後の相談をした。

「披露宴の進行役を、来月には決めなければならぬわね」

「そうですね。それは、こちらで探します」

「美容師さんは式場にも居たから、それで良いのかしら？」

「特に拘ってはおりません」

「そう。指輪の準備も整ったし……、後は、招待状を発送してからの仕事になりそうね」

「ですね。写真は以前、兄夫婦の写真を撮って下さった方が、引き受けて下さいます。連絡も、こちらから」

「利知末さんと、倉真の写真を撮ってくれたのは、その方？」

去年、倉真が持って来た、結婚衣装の写真を思い出した。

「アレは、その人の弟子になってる、ダチが撮った」

「そうなの？ 利知末さんも初々しい表情で、良く写っていたけれど」

「利知末は元が良いからな。どんな奴が撮っても、良い写真になるんじゃないか？」

「母親の前で、惚気ないで頂戴」

倉真は母から、突っ込まれてしまった。

利知未は、恥かしくなつて俯いてしまった。

相談を終えた時間が、遅くなつてしまった。二人は夕食をこちらで済ませてから、帰る事になった。利知未は今日も、夕食の準備を手伝う。

料理をしている時に、母親から利知未風・酢豚の作り方を聞かれて、初めて利知未は、倉真が昔は酢豚を食べられなかった事を知った。

話をしながら、倉真から酢豚をリクエストされた時の事を、思い出した。

『倉真、苦手だったんだ……。それなのに』

利知未は倉真の優しさを感じて、また少し惚れ直してしまった。

翌日六日は、優宅へ出掛けた。昨日までの経過を報告して、今判る範囲で、優達とも今後の相談をした。

「花嫁の父親代わりは、俺がする事になるんだな」

「そうなるね。宜しく、優兄」

利知未に言われて、優も少し緊張し始めてしまった。

「式から出席するのは、倉真のご家族と優兄達と…、母さん。後は、媒酌人ご夫婦だけだから。媒酌人の方への挨拶も、優兄に行つて貰わないとなら無くなるのかな」

「本来は、両親が出掛けるモノなんだろうけどな。その辺りの事は、また日付が決まったら、連絡を寄越してくれ。日曜なら、俺は大丈夫だ」

優の言葉に解つたと頷いては見た物の、瀬川家としては少々、肩身の狭い思いをしてしまう事になるのかも知れないと、利知未は感じてしまったのだった。

二十日・日曜日に集まったメンバーの中に、思いがけず嬉しい仲間が一人、増えていた。

準一の子で、四人でやって来たメンバーは、兼ねてからの予定通り、和泉と準一、宏治。残りの一人は、樹絵だった。

「利知未！ 久しぶり！」

樹絵は、利知未に出迎えられた途端、そう言っただけ抱きついた。

「樹絵？ 随分、綺麗になったじゃない？」

髪は大学時代から変わらず、ショートだった。化粧を覚えて、身体つきも随分、女性らしく柔らかくなっている。

「利知未も！ 髪、伸ばしてるんだ？」

体を離し、改めて利知未の姿を眺めてみた。

約、一年半振りの再会だ。下宿時代、利知未と一番仲が良かったのは勿論、朝美だったが、樹絵はその次位に仲の良い店子仲間だった。

樹絵は、美加とはまた違った意味で、利知未に懐いていた。その上、下宿を出てからも警察学校の寮へ入ってから、何度か顔を合わせている。

店子仲間で、一番初めに利知未と倉真の婚約を知ったのも、樹絵だった。

「樹絵、遊びに来てたんだ？」

後ろからやって来て、二人の様子を笑顔で眺めていた仲間に、利知未が問い掛けた。準一が靴を脱ぎ、上がって行きながら答える。

「偶々、非番と当ってたから、呼んでみた」

勝手知った様子で平然と上がっていく準一を、和泉と宏治が後ろから、啞然と眺めている。

「宏治、和尚、久し振りだな。上がれよ」

倉真から声を掛けられて、二人も靴を脱いだ。

「利知未が、飯と摘み準備してるぜ？」

「久し振りだな。利知未さんの料理も」

宏治が言って、和泉も頷いている。

「俺は、花見弁当以来だな」

「バツカスでバイトしていた頃も、何度か食ってるだろ？」

倉真に言われて、あの頃も思い出す。

「その筈だな。料理と言うよりは、摘みだったけどな」

宏治が頷いて、そう言っていた。

「ジユンも偶に、お邪魔してたんだって？」

樹絵も話しに加わって、仲間の後に続いて奥へと進む。

「偶にね。車借りたり、優兄達の写真撮って貰ったり、意外と世

話になってるから。ね？」

「へへ、頼りがいのある弟分だろ？」

準一は、自慢げに笑っていた。

何はともあれ、昔からの仲間が揃って賑やかな昼食時間となった。

「克己が居れば、完璧だったか？」

「克己は、家庭持ちだからね。久し振りに会いたいとは、思うけど」

「そんな事を言ったら、花見メンバー全員、呼びたくなっちゃうよね」

樹絵も混ざって、話を始める。

「樹絵、今、何処の警察署に居ると思う？」

準一が、面白そうな顔をしている。

「どこだ？」

「お前には、馴染み深い所だと思うぞ？」

話は始めに聞いていた宏治が、意地悪そうな笑みを見せた。

「黒木刑事って、覚えてる？」

樹絵が問い掛けて、倉真は記憶を辿った。蟹の様な厳つい顔を思いつく。

「って、江戸川署の、少年課の黒木か？！」

「呼び捨てにするか？ 普通。世話になった恩人じゃ無いのか？」

和泉が呆れ顔を見せた。ここへ来る迄の車内で、少しでも話を聞いた。

「黒木刑事？」

利知未が不可解な顔をする。倉真は、あの頃の事を簡潔に話した。

「高校時代の大乱闘と、夏の族絡みの事件で世話になった人だ」

倉真の高校時代と言えば、一年も無かった。それだけで、どの頃の事は直ぐにピンと来る。

「そうなんだ」

「俺の事を、信じてくれたオッサンだよ」

「オッサンって言う呼び方って、無いんじゃないの？」

利知未に叱られてしまう。二人の様子を見て、仲間が笑う。

「黒木刑事、倉真の事は良く覚えてるって言ってたよ。今は真面目にやっているのかって、嬉しそうに言ってた」

樹絵の話を聞いて、倉真は少し照れ臭そうな顔になった。

「話す機会なんか、あるのか？」

「今、あたしは交通課に居るから。相変わらず暴走関係の若者繋がりで、ちよつとね」

これ以上詳しい事は、守秘義務だ。

「違反切符、切ってるのか？」

「そうだよ。その内、転属届けも出したいと思っているけど。もう少し上を狙える学歴になるらしいから」

「短大卒業レベルの、学歴になるらしいよ」



準一が、樹絵の話しに付け足した。

「そんな、あるのか？」

「一応ね、大学卒業レベルなら、警視總監も夢じゃないらしいけど」

「その下つて、事か？」

「色々あるから、説明はしないけど。ま、そう思っておいてよ」

「ね、樹絵。もしかして、危ない事するような配属を考えてる訳？」

利知未が心配そうな顔をした。樹絵はニコリと笑顔を見せる。

「利知未まで、両親と同じこと聞くんだな」

「そりゃ、心配でしょ。ジュンは如何、思ってるの？」

「オレは、樹絵がやりたい様にやれば良いと思うけどな。樹絵の人生なんだし」

樹絵と準一は、顔を見合わせて笑顔を交わした。

「ま、本人同士が気にならないなら、あたしが言う事でも、無いんだろうけど」

「そう言うこと。それより、お代わり欲しいんですけど？」

樹絵の食欲は、相変わらずだった。年頃の女性の平均よりは、良く食べる。

「良いよ。ご飯、一杯炊いて置いたから」

ニコリと微笑んで、利知未は樹絵の飯茶碗に、お代わりを注いであげた。

「やっぱ、利知未は和食なんだな」

お代わりを貰って、樹絵が呟く。

「洋食もやるけど。あんまりコッテリしたのは、あたしの胃が受け付けないんだよね。倉真は、物足りないのかな？」

「その分、飯を腹一杯、食ってるだろ」

俺にもお代わりをくれと言って、倉真は飯茶碗を差し出した。

「食費、大変そうだな……」

宏治が呆れた顔を見せていた。和泉は、楽しそうに笑っていた。

リビングで食事をしていた。ソファは三人掛けと、一人掛けだ。ダイニングチェアを持ち込んで、テーブルの上には大皿料理が並んでいる。

お袋の味に近いメニューかも知れない。仲間達は利知未お手製の、相変わらず美味しい惣菜を口にして嬉しそうだ。あつと言う間に無くなった。

「流石に男が4人も居ると、凄い消費量だな。から揚げ、もう少し揚げとけば良かった？」

「あたしも、食べるからね」

樹絵は満足そうに腹を擦っている。少しは大人っぽく綺麗になったとは言え、性格は相変わらぬの様子で、利知未もつい微笑んでしまう。

「樹絵達は、結婚は考えていないの？」

行き成り質問されて、樹絵と準一は顔を見合わせた。

「そんな話、した事も無かったよね？」

「そーだよな。けど、オレが今年で二十五歳で、樹絵が二十四歳か……考えて見るか？」

「お、プロポーズか？」

倉真が楽しそうに突っ込んだ。樹絵は赤くなった。

「良いんじゃないか？俺達が証人になってやるぞ」

和泉も言って、宏治もニヤニヤと頷いてやる。

「どうせ、他に丁度良い相手も、いないしな」

準一は相変わらず呑気な様子で、そんな事を言っていた。

「って、ちよつと待ってよ！これって、こう言う簡単な乗りで考え始めちゃって、良い訳？！」

樹絵は、一人で慌てていた。

昼間から、酒盛りになってしまった。樹絵は仕事柄、飲む訳にもいかない。帰りの運転を引き受けるつもりで、ソフトドリンクを貰った。

「あたしは夜に改めて飲むから、樹絵、飲んどく？」

「警官が飲酒運転する訳には、行かないよ」

「送ってあげるけど？」

「どうやって？ ジュンの車、四人乗りだし」

「そう言えば、そうなのか」

「いいよ、気にしないで。今夜はジュンの所へ泊まっちゃうし」

「そっか。大変な彼氏だな」

「それが、丁度良いんだ」

利知末の呟きに、樹絵がニコリと、幸せそうな笑顔で答えた。

酒が進んで、和泉の話しに移行して行った。

「二年間、向こうで暮らすって事か」

「二年か、三年。その中で、これから如何するのか、由香子と良く話し合ってくるつもりだよ」

樹絵の質問に、和泉が答えている。

「向こうに永住して両親を呼び寄せるか、由香子連れて日本に戻るか？ それと、それから先の仕事を如何するのか？」

「話し合う事、一杯だな」

「それも、仕方がない。もしかしたら、俺が振られる事も考えられる」

和泉が言って、小さく笑う。

「お前らも、長いよな」

宏治が改めて呟いた。 倉真が後を引き継いで言う。

「そろそろ、七年近いかな？」

「年がら年中、会っている訳じゃないからな。 偶に会っただけだから、実質的には三年、経たないんじゃないかな？」

「良く続くもんだ」

倉真は、目を丸くしていた。

「それを言ったら、お前と利知末さんの方が長いだろう？」

「付き合うようになってからは、四年くらいだよ?」

「その前が、長かったでしょう」

利知未の言葉に、和泉は微笑して返した。

「それを言ったら、十年か? 違うな、十一年くらいか」

「知り合ってからなら、それ位? つまり、このメンバーとの付き合いも、目出度く十二年目を迎えるって事だ。一巡りだな」

利知未が計算をして、呟いた。 干支十二支・一巡りだ。

「随分、長い付き合いになったな」

あの頃からの、色々な出来事が思い出された。

「けど、凄く良い仲間と知り合えた。 あたしは、嬉しいと思ってるよ?」

「利知未さんがそう言ってくれるのなら、安心だな」

和泉はそう呟き返して、続けた。

「迷惑ばかり、掛けて来ました。俺達にとっては、利知未さんが人生の恩人だと思います。……真澄が死んでからの事も、初対面の大乱闘も」

「おれも助けられた所から、知り合ったんだ」

「オレたちは?」

「大迷惑掛けた所からの、知り合いだな」

ジユンの言葉に、倉真が小さく笑って言っていた。

「FOXのリーダーに言われたよ? またトンでもない縁だったな  
って」

「確かに」

改めて倉真も、そう感じてしまった。 倉真の表情を見て、仲間達は笑った。

このメンバーが集まったので、結婚式の二次会の話しへ移行して行った。

「FOXのライブ付き二次会?!」

準一が驚いていた。宏治は少し驚きながら、納得する。

「利知未さんらしい」

「言っておくけどな、言い出しは俺だぞ？」

「お前も、利知未さんと似ている所があるよな」

中学一、二年の無邪気な利知未を知っているのは、このメンバーでは宏治だけだ。樹絵は、朝美が再入居して来てからの利知未を見て、何と無くその頃の利知未も想像できると思う。

「あたしも、休みとっておくよ。多分、平気だから」

「秋絵は、今はもう実家へ戻ってるの？」

「こっちで就職してる。一人暮らし中だから、あたしも偶に遊びに行ってるけどね」

「だったら、二人で住んじまえば良いのに」

倉真の言葉に、樹絵が答える。

「警察寮だからね、今は。秋絵とそう言う話にもなったけど。」

それなら、もう少しお金を貯めてから、広めの場所を探そうって言うってたんだ」

「秋絵は、どんな仕事なの？」

「映画サークルで色々、裏をやってたから。その流れで映画の配

給会社へ就職しちゃったよ」

「教師には、ならなかったのか？」

和泉が問い掛ける。

「元々、なるつもりは無かったみたいだよ？ 教員免許だけは、取ってあるらしいけど」

「それなら秋絵にも二次会、出て貰えそうだね？」

「早めに言っておけば、大丈夫だと思う。連絡しておくよ」

「イイよ、あたしから連絡したいから。住所と電話番号は、聞いてしまっても良いかな？」

樹絵は、その場で教えてくれた。

「結婚の準備は進んでんの？」

秋絵の連絡先と住所を伝え終わり、樹絵が聞く。

「大体、予定通りかな？ 倉真のお母さんが、凄く協力してくれているから」

「嫁姑の関係は良いんだ」

「《嫁姑VS息子》の戦いに、なっていると思うけどな」

倉真が、やや情けない顔をして呟いていた。

「後は披露宴の司会者を決めて、二次会の招待状や会場は、…平気か。リーダーが会場は押さえて置くて、言ってくれてたモンね」

ライブを見に行った時に、少しだけ話になっていた。

「もう一度、連絡は入れておかないと」

「あと、寿司屋な」

「そうだ。そろそろ、キッチンとお願いしておかないとね」

「寿司が出るのか?!」

準一が嬉しそうに言った。

「出張カウンターを、頼もうかと思ってるんだ。城西中学に、宏治が入学する前に卒業した先輩で、中卒から寿司屋の修行している人が居るから」

「それは、楽しみだな」

「勿体無かったか？ 渡米する時期を少し伸ばした方が、良かったかも知れないな」

宏治の言葉を請け、和泉も小さく笑って、そう言っていた。

その日の話で、披露宴の司会者まで決まってしまった。

準一の提案で、樹絵と秋絵が二人の親しい友人として、引き受けてくれる話になりそうだった。

二次会の受付は、宏治が手伝ってくれると言っていた。準一は、

その時の写真を引き受けてくれた。

「師匠ほどの腕は無いけど、二次会だし、イイか?!」

そう、呑気に言っていた。話がまた進められた事に、全員で乾

杯をした。

八時を回る頃。 樹絵の運転する車で、四人は帰って行った。  
和泉の見送りは、行けるメンバー全員で行く約束をした。

7      ドクター一年目・五月（一ヶ月前）

—

四月の月末に、利知未は改めて慶弔休暇を届け出た。

直ぐに五月がやって来て、シフトを確認した結果、媒酌人への挨拶は月中の日曜、友引の午後を選んで伺う事になった。 丁度良い日和が中々、見付からなかったからだ。

その日、利知未は夜勤が有り、朝、帰宅して二、三時間で仮眠を取り、午後に出掛ける話しになってしまった。 夜はまた仕事だ。

昼を避ければ良い日とは言え、かなりの強行軍になってしまいうが致し方ない。

優も勿論、同行する。 両親の変わりだ。 些か不安は残っていたが、媒酌人夫婦も利知未達の家庭の事情を聞いて、どうやら気の毒に感じてくれたらしかった。

「あの腕白が、嫁さんを貰う年になったのか……」

倉真の母から依頼を受けた時、媒酌人・梅野 長吉氏は、感慨深げにそう呟いていたと言う。

梅野氏は館川氏の仕事繋がりで、将棋の好敵手だ。

まだ倉真が幼い頃から、時々、家に来ては長々と将棋盤を囲んでいたと言う。 倉真自身は覚えが無いが、小さな頃から傷だらけだった倉真を、膝に抱いて写っている写真が残っていた。 利知未は、それを見せて貰った。

「あんたも、良く懐いていたんだけどねえ。覚えていない？ 倉真の鯉幟は、梅野さんからのお祝いだっただのよ」

館川氏が修行時代から良く知っていると云う、砂糖問屋の旦那だった。今の『和菓子・たてかわ』の、取引先でもある。当然、倉真の腕白ぶりは、昔から承知の上だった。

倉真も始めて聞いた事だが、高校時代の大事件の時も、両親を良く支えてくれていたらしい。

「お父さんが、また将棋や釣りを始められたのも、梅野さんのお陰でした」

母親は、そうも言っていた。随分、深い関わりだと思った。今回、媒酌人を頼むに辺り、真っ先に思い当たった人物だったと言う。

その話しは、月頭の祝日連休に館川宅へ伺った時に、初めて聞かせて貰った。その連休も、利知未と倉真の休日が合い、一日を館川家、一日を優宅で過ごした時だった。

結婚式本番、約二ヶ月前になり、お互いの家への訪問も数が増えて来た。招待状の発送は、月中の大安に到着するように準備が整っていると、つい前日に式場から連絡があつたばかりだ。

「披露宴の司会者も、決まったのね。どんな方？」

「私の下宿時代の、店子仲間なんですが。倉真さんの事も良く知っている双子の姉妹が、引き受けてくれました」

「ご姉妹で、やってくれるの？ それは楽しそうね」

そっくりな顔が二人並んでする司会とは、どんな物だろうか。想像して、倉真の母親は楽しそうに笑っていた。

樹絵だけならば、やや不安も残る処だが、秋絵と一緒にやってくれるのなら大丈夫だろうと、納得している。

「それなりに、楽しい披露宴にはなるだろうな」



倉真もそう言って、小さく笑っていた。

話が決まってから、双子と改めて会う約束をした。媒酌人夫婦への挨拶の翌週、日曜日に、樹絵が秋絵を連れて二人のアパートへ来る。

秋絵とも久し振りに会える事を、利知未も倉真も楽しみにしていた。

二次会の話も進め始めている。櫛田が働く寿司屋の住所と連絡先は、倉真の母親が知っていた。倉真が母親から教えて貰っていた。

FOXのリーダーへも、あれから改めて連絡をしておいた。十七日の土曜日、もう一度ライブ中に、二人でお邪魔する事になっている。チケットは、また取り置いて貰った。

翌週の日曜日、利知未・強行軍の、一日が始まった。

朝九時過ぎに帰宅した利知未は、取り敢えずシャワーを済ませて、簡単な朝食を腹へ収めてから、直ぐに寝室へ引っ込んだ。

倉真が洗濯を引き受けてくれた。朝食も倉真が準備して置いてくれていた事に、利知未は感謝した。

十時には仮眠を取り始め、十二時には起き出す。軽い化粧をして服を着替え終わった頃、優が自分の車で迎えに到着した。

一時半には倉真の両親も乗車して、五人揃って片道十分程の道程を、車で移動した。

梅野氏は何時も、自転車か徒歩で散歩がてら遊びに来ていたらしい。

二時前には梅野宅へ到着して、挨拶を済ませた。当日の話は、

また倉真の母親が代表で、日を改めて相談しますと述べて、三時前には館川家だ。

媒酌人夫婦は、倉真の両親より十歳、年上だった。

梅野氏は、ひょうたん型の輪郭と、優しそうな下がり眉毛の持ち主だった。

「偉いベツピンさんを、見つけたもんだな」

目を丸くして、倉真に言っていた。梅野夫人に窘められて、照れ臭そうな笑顔を見せた。人柄は、飾り気の無い朗らかなご夫婦だった。

「お仕事は、お医者さんですか？ 聡明な、お嬢さんなんですねぇ」夫人もそう言つて、少し驚いていた。

「確りした、お嬢さん何ですよ。私達も漸く、安心できます」

館川家では昔から懇意にしており、仲良く家族ぐるみで付き合つて来た家庭だ。梅野夫妻は既に、家を長男夫婦へと譲り渡している。立場上は隠居の身分だ。時間も自由になる人達だった。

利知未と優は少々緊張していたが、夫妻の人柄に触れて気が楽になれた。倉真は、昔の自分を知り尽くされている夫妻の前で、何時もよりは、いくらか大人しくしていた。

挨拶の後、館川家へお邪魔した。優を交えて改めて、結婚式までの準備状況を確認し合った。

「何から何まで、お世話になり放しで、ご迷惑お掛け致します」

優はそう言つて、館川夫婦へ、深々と頭を下げた。

利知未の仕事の都合で、四時過ぎには暇した。利知未と倉真を下ろしてから、優は一人、帰途へ着いた。

利知未達が帰宅したのは、六時近かった。あるもので適当に夕

食を済ませて、夜八時半。利知未は慌しく、出勤して行った。

館川家では、漸く少しだけ人心地ついた気分になっていた。

「後、本番直前までにやる事は、ご招待客の数を確認して式場へ最終的な注文をして、披露宴の打ち合わせと衣装合わせは、二人が中心になるのだから……」

利知未から、これから先の準備表のコピーを貰っていた。母親は夫の晩酌中の居間で、茶を飲みながらチェック印をつけ、確かめている。

「当日の準備は、もう少し先でも大丈夫そうね」

ほっと一息ついて、ぬるくなった茶を口へ運んだ。

「自分が結婚するような、意気込みだな」

夫は、少々呆れ顔で、そう呟いていた。

「お陰様で、二十歳は若返った気分ですよ」

妻は嬉しそうな笑顔で、そう夫へ返答した。

## 二

十七日の土曜日、利知未と倉真は再びライブハウスへ向かった。

「今日のステージの後、二次会の相談をして来ちゃうから」

「煩くないか？ あそこは」

「どうしても煩い様なら、ファミレスにでも移動するよ」

「その方が良いと思うぜ」

アパートを出る前に、そんな話をしていた。

寿司屋にも電話で連絡をした。『出張カウンター賜ります』と、以前、行った時に貼り紙がしてあったのは、利知未が覚えていた。

予算を相談して、人数によるけれど少人数なら十万以下でも請け

負うと言われた。それから上は、こちらの予算と相談の上で、決めてくれるらしい。

大よその人数を確認してから改めて連絡をしますと、お願いしておいた。

チケット制にする事で、もしかしたら予定よりも多くの人数が集まる可能性がある。今日、自分達が招待している人数と、それ以外の人数を照らし合わせて、予想を立てる話になっている。

「ライブハウス自体は、キャパ六十九ある筈なんだよね。半分は埋ると思うけど。あんまり狭い所でやるのも問題だし」

「結局、何人になりそうだったか解るか？」

「少なくとも見ても、三十人。FOXのライブ絡みで呼びたい人達を加えれば、恐らく、四十弱？」

「それ位なら、何とかなりそうだな」

「宏治が言うには、団部の後輩も何人が混ざりそうだって言うから……。倉真の事件の時、集まってくれた後輩達が居るでしょ？」

二次会と言うよりは、本当のライブになっちゃいそうだね」

「人数が会場のキャパ以下なら、問題ないんじゃないか。俺達らしくて、良いと思うぜ？」

「それも、そうかな？」

やろうとしている事は、ハチャメチャなのかも知れない。けれど、それが自分達らしいのかも知れないと、利知未自身も感じている。

「中学・高校時代に、戻ったみたいだ」

あの頃の事を、あの当時の自分自身を、改めて思い出してしまった。

「俺も、戻りそうだな」

倉真も中・高時代の友人達を前にすれば、あの頃のヤンチャがい

くらか、顔を出してしまうだろう。

話しながら歩いて、いつの間にか目的地へと到着してしまった。

FOXの演奏開始時間までには、まだ少し余裕が有った。 楽屋

へ顔を出して、ライブ後の事をチラリと相談して見た。

「ファミレスでも居酒屋でも、構わないけど？」

リーダーがそう答え、居酒屋へ移動する話になった。

今日も、FOXのライブには、それなりの人数が入っている。

この前、二人が顔を出した時、久し振りのセガワの歌声を聞いた昔からのファンが、利知未達を見つけて気軽に声を掛けてくれた。

「今日は、歌わないの？」

聞かれて、利知未は少し照れた笑顔を見せる。

「綺麗になっちゃったけど、シャイな笑顔は相変わらずだな」

ファンは、嬉しそうだった。

利知未は、今も、こうして自分の事を受け入れてくれるファンの存在を改めて知り、心から幸せだと感じられた。

ライブ終了後、あの頃と変わらず、ファンとのチケットのやり取りが始まった。 一段落して、メンバーと共に居酒屋へ移動した。話を始めて程なくして、リーダーから頼みごとをされた。

「こつちでチケット、五枚から十枚、捌いても構わないか？」

「来てくれる人が居るの？」

「昔からのファンが、是非とも一緒に祝いたいって、言ってくれてるよ？」

現ヴォーカルの宇佐美が、懐っこい笑顔で言った。

「それは、嬉しいな。 だけど、こつちも最終的に何人になるか、まだ判断し切れないんだよね」

「五枚くらいなら、平気じゃないか？」

倉真が言つて、宇佐美がもう一声上げる。

「七枚！ …無理ですか？」

利知未は少し考えて、頷いた。

「それ位なら、何とかなるかな？」

「宏治が、何人連れて来る気なんだ？」

「この前の話では、五人くらいって言っていたと思うけど」

「そうすると大体、五十人前後にはなるのか」

少し、赤字覚悟になりそうだ。利知未の頭の中で、計算機が動く。

『披露宴のご祝儀、十万くらいは、こっちに回せるかな……？』

計算が終わり、利知未が笑顔で頷いた。

「OK。だけど、出張カウンターの費用も有るから……。七人が限界で、良い？」

「サンク！ 流石、セガワだ、太っ腹だな」

リーダーが言つて、昔の事をチラリと言った。

「あの頃の少年達から、店の弁償金は徴収出来たのか？」

直ぐには、頭が働かなかった。クエスチョンマークが飛び交つてしまう。

「…って、もしかして、俺達の事を言ってるんすか？」

倉真が先に思い出した。利知未も、漸く思い出す。

「ああ！ すっかり忘れてた…！」

「思い出されちゃったな。どうする、館川君？」

拓が面白そうに笑っていた。

「…一生掛けて、返すかあ？」

倉真が言つて、利知未を見る。

「良いよ、もう。時効だから。それ以上のモノ、倉真達からは

一杯、貰つて来たし」

「何を貰ったんだ？」

リーダーの突っ込みに、利知未は笑顔で答える。

「沢山、色んな思い出や、…生涯のパートナーに、なる人」

「幸せそうで、何よりだな」

拓もリーダーも、利知未に釣られて笑顔になった。

それから当日の演奏曲の相談をして、大まかな打ち合わせを終わらせ、FOXのメンバーと別れた。本番が近付いたら、改めて細かい打ち合わせをする約束をして、二人も帰宅した。

翌日の十八日は、樹絵と秋絵がやって来た。

「利知未！ 倉真君も、久し振り！」

「一昨年の、十一月以来か」

秋絵の言葉に、倉真が答えた。

「冴吏の関係で面白い事が有ったって、あたしも聞いてた。」  
樹絵が笑顔で言って、利知未達に促されてリビングへ通った。

午前中からの訪問だ。今日も利知未は、昼食を準備して待っていた。

「まだ、お昼には早いから。紅茶の方が良いのかな？」

利知未が秋絵に問い掛ける。

秋絵は、初めて足を踏み込んだ二人の住処を、興味深そうに観察してしまった。

「珈琲でも、良いよ？ お砂糖とミルクある？」

「お客様用に、準備して有りますが？」

利知未に言われて、それなら珈琲で、と答えた。

四人で顔を合わせるのも久し振りだ。樹絵と秋絵は相変わらずそっくりで、そして賑やかだった。倉真も利知未も笑い放しになっ  
てしまった。

「二人で司会するんじゃない、漫才になりそうだな」  
倉真の言葉に、二人同時に答える。

「「TPO位は、弁えているつもりだけど？」」

「ステレオ放送だな。 台本、キチンと台詞を分けて考えて来てよ？」

息の合った二人の様子に、利知末もクスクスと笑ってしまった。

「秋絵は、」「わたしは、」

「文系出身なんだから、台本の構成は問題ないよ？」

またまた、ステレオだ。 倉真は、思わず吹き出してしまった。

「下宿時代は、何時もこうだったのか？」

笑いながら利知末に聞いた。

「初対面の時、ステレオで叫ばれたよね？ えー！？ 嘘！ お兄さんが居る？！ って」

あの頃の事も、鮮明に思い出してしまった。 まだ小学校を卒業して来たばかりだった、幼い双子と、バンドの練習に出掛ける前の男っぽい自分。

「あの時、」

またステレオになりそうで、お互いに一瞬、譲り合う。

「利知末はバンドの練習へ行く、前だったんだよね？」

一瞬、譲り合った時間も喋り始めるタイミングも内容も、全く同じだ。

利知末と倉真は、完全に吹き出して大笑いしてしまった。 大笑いされて、双子は同時にカップを持ち、同時に珈琲を口にした。ふ、と息をつくタイミングも同じだった。

当人同士も、つい、吹き出してしまった。

「別々に、住み始めたのに」

「今まで以上に話すタイミングとか、同じになっちゃったよな？」 顔を見合わせて、今度は別々に話をするように心掛けてみた。

「一応、モノラル放送も可能なんだな」

倉真は、まだ小さく笑っていた。 笑いながら、そう突っ込んでしまった。



「一応って、」

「酷いよね？」

また、譲り合いに失敗してしまった。同時に溜息をつき無言で身振り手振りで、双子は相談した。

「じゃ、わたしが主導権、握るって事で」

「それで、宜しく」

相談を終えて、役割分担を決め終わった。双子の様子を眺めて、

倉真は目を丸くしてしまった。

「喋らないで、相談も可能なのか？」

「お互いに思っている事は、」

「意外と良く解っているんだよね？」

今度は、無事に分割話法が成り立ち始めた。

「双子は、摩訶不思議なモノだったんだな」

倉真は、今度は感心してしまった。その様子を見て、利知未はつい笑えて来てしまった。双子の喋りが落ち着いて、漸く相談が始まった。

樹絵と秋絵は司会者テキストを購入して来て、有る程度の内容を話し合つて纏めて来ていた。お陰で、いくらか利知未達は気楽に相談が出来た。

「企画って、お決まりのケーキ入刀と、キャンドルサービスくらいなんだ」

「後、一度だけ、お色直しに立つけど」

「祝辞、有るよね？ 何人に頼んでいるの？」

「社長と、里沙さんか？」

「後、倉真のご両親関係と、家の親戚？ そう言えば、透子がやるって」

透子に、冷や汗だ。利知未の親戚関係は数に入れないで置きたかったのだが、館川家とのバランスを考えて、お願いする話に決まっていた。

「受付はどうするの？」

「それが問題だな。俺たちのダチ関係よりも親戚の人数の方が多いから、頼みようも無い」

「一応、朝美に聞いてみる？」

「こっちは、お袋と相談か？」

「朝美だったら、あたし達の友達関係は解るよね」

「予定に無かったが、杉村にでも頼んでみるか？」

考えて、最近のアイツが、どうなっているのか？ 改めて考えた。

中学・高校のヤンチャ仲間の中では、賢く生きていた奴の事だから、今頃マトモに生活をしているのかも知れない。

「克己さん達は？」

秋絵が、新年会メンバーを思い出してみる。

「あそこは、ガキが居るから無理だろ？」

「家族で招待してるからね」

「克己さんに頼んで、奥さんがお子さんを見てれば問題ないと思うけどな」

秋絵の意見で、取り敢えず当ってみる事にした。

「話し、逸れてないか？」

樹絵が軌道修正をする。

「そうだ。司会の相談だったね」

秋絵も言って、改めて話を始める。

余り考えていなかったのだが、双子の話から、BGMを如何するのかと言う相談も始まった。

「始めの入場は和装なんだから、それなりにしつとりした方が、良いのかな？ ご招待客も年配者が多いんでしょう？」

「それは言えるな」

「お母さんからも、了承貰うべき？」

「そこまでは、良いんじゃないか？」

「わたし達が気を使って考えれば、事後報告で構わないんじゃない

？」

「俺達の趣味じゃ、ロックやメタルになっちまう」

「そうじゃないのも聞いてたよ？ 偶には」

「お前はな。 んじゃ、利知未の好きな曲から選んだらどうだ？」

「…けど、最近は音楽聞く暇も無かったからな」

「じゃ、利知未。 CD貸してよ？ あたし達が、探して見るから」

「それで良いの？」

「仕事、利知未よりは暇だから。 良いよ？」

樹絵の提案に、秋絵がニコリと頷いてくれた。

「どうしても入れたいのが有ったら、言ってね」

言われて取り敢えず、ポップス・ニューミュージック系のCDを何枚か、ラックから取り出して渡した。

「お色直しの時は、使えたら使いたいロックが有るんだけどな」

二人には渡さずに、利知未が一枚だけ手に持っていたCDを眺めて呟いた。 そのCDを見て、倉真はピンと来た。

「それは、俺がやったCDだな」

「解る？」

「アレだろ」

「うん」

二人の世界に入ってしまった利知未と倉真を見て、双子がステレオで突っ込んだ。

「二人とも！ ここに第三者がいる事、忘れてない？！」

突っ込まれて利知未と倉真は、照れ臭そうな笑みを見せた。

一度、昼食を挟み、再び相談を始めた。 その間、態とBGMに何枚かのCDを掛け放しにしておいた。 気になる曲が聞こえて来ると、手を止めてメモを取りつつ、話を進めていった。

午後まで掛かり二時半を回った頃、話し合いそのものは目処がついた。 丁度お八つタイムだ。 利知未は双子の為に里沙直伝のフルーツタルトを、朝から準備していた。 シナモンを振りかけ、甘

さは控えめにしてある。

「何時の間に、里沙のケーキまで覚えていたの？」

「お客様が良く来るようになって来てから。平日休みに里沙にお願いして、レシピと作り方をいくつかファックスして貰っておいんだ」

倉真も知らない事だった。利知未は小さく笑って、本棚からファイルを一冊、取り出して来て見せてあげた。

「今度ジュンが来た時には、甘党のアイツの為に、何か作ってやつてもいいかと思って。樹絵も、偶には遊びに来て？ 勿論、秋絵も」

「結婚した後、新婚の熱々振りを観察しに遊びに来て見る？」

秋絵が樹絵と顔を見合わせて、楽しみな笑顔を見せた。

休憩の後、話を纏め、聞き切れなかったCDを持って、双子は帰宅した。

二人が帰った後、利知未は改めて、自分達を取り巻く仲間達の協力に対して、心から感謝をする事が出来た。

### 三

今月中に二次会の招待状と、披露宴の招待状に対する返事を纏めなければならない。新婚旅行の相談と手続きも、進め始めている。利知未が自由の聞かない分を、ここへ来て漸く倉真が引き受けてくれ始めた。

お互いの家族への連絡も、今まで以上に綿密に取り始めた。利知未は更に、忙しくなって来た仕事にも忙殺されるような勢いだ。月末になり、招待客の人数も知れた。其々、家族と相談をしな

がら、席次表を作成した。

二次会の準備も着々と進んでいる。こちらは結局、全部で五十一人の招待客と相成ってしまった。寿司の出張カウンターと別にオードブルのセットを注文する事になり、他に宅配ピザも準備する事になった。

FOXのリーダーとも、マメに連絡を取った。二次会は、始めのライブ後、引き続いて自分達が演奏できる曲なら、カラオケならぬ生演奏バックで、招待客が歌う機会も作ると言っていた。

司会は、ライブ形式で自分が責任持つて進めて行くと、請け負ってくれた。結婚披露宴の司会バイトは、相変わらずやっているリーダーだ。心配は全く無さそうだと、安心をした。

「いつその事、久元さんに披露宴の司会も頼んじまった方が、楽だったか？」

「二次会の準備が有るし、無理でしょう？ 裏も殆ど引き受けてくれるって、言ってくれていたから」

「謝礼、多めに包まないとな」

「そうだね。メンバー4人、二万ずつの他に、リーダーにはもう少し包んで渡した方が、良いかも知れない」

利知未と倉真は、そんな相談をし始めている。

「そう言えば、和尚の見送りはどうだったの？」

日曜の夕食時間中だった。利知未は今夜も仕事だ。

「新婚旅行で会つのを、楽しみにしてるって言ってたぞ」

「そっちは、どうだったの？」

その辺りは倉真の担当となっていた。これまでの間に、利知未の意見を入れながら相談をした。申し込んで来るのは、倉真の役目だ。

始めは近場の温泉宿でも良いかと、考えていた。けれど和泉の

渡米が知れてから、話を変えていた。

「費用が何とかなるんなら、是非、行つて来たら？」  
明日香も、そう言っていた。

夏のボーナスを当てにしての強行軍となつてしまった。当然、始めに出して置く分くらいは、利知未から出る。

「昨日、終わらせて来た。パスポート申請は、お前に任せる」  
平日の用事は、利知未担当だ。婚姻届も、準備しなければなら  
ない。

「役所関係は、あたしが引き受けるから良いよ。婚姻届を貰つて  
来るついでもあるし、写真撮つて書類の記入だけは、しておいてね」  
忙しい相談になつてしまった。利知未は時計を気にして、立ち  
上がる。

「ごめん、もう出ないと。後片付け、宜しくね？」

「おお、気をつけるよ」  
出掛けのキスは、相変わらずだ。挨拶をして、利知未はパタパタ  
と玄関へ向かった。

利知未はアパートを出て歩きながら、つい今、話して来た内容を  
思い返して、照れ臭い気分になつてしまった。

『婚姻届とか、新婚旅行とか……。何か、くすぐったい』  
倉真と始めて会った頃の事を、最近、良く思い出していた。

二次会をFOXに協力して貰う話になつて、あの頃の事を思い  
返す機会が増えて来ている。

『……本当に、トンでもない縁、だったな』

利知未の頬が、微かに緩む。幸せな微笑を浮かべながら、足を  
運んだ。

週中の平日休みに、利知未は役所関係の手続きを準備した。

三十一日の土曜日には席次表の最終決定を、其々の家族と確認し合った。その日の内に、式場にも出掛けた。貸衣装と、かつら合わせをして、美容師と細かい話し合いの時間を持った。

「花婿さんも、お色直しをされると言う事でよろしいですか？」  
聞かれて、倉真はやや面倒臭そうに頷いた。

倉真は始めから最後まで、洋装にしていまいたいと思っていた。  
和装よりはマシだと思う。けれど、この結婚式と披露宴は、今まで散々、迷惑と心配を掛け通して来た両親への、始めの恩返しの意味合いが強い。

式は純和風・神前式。披露宴も自分達の友人達よりも、親戚や父親の商売仲間へのお披露目に近い様相だ。素直に和装で頷いた。そらならそれで始めから最後までそれで通してしまった方が、面倒が無くて良いと思っていた所へ、一美の横槍が入り、嫁・姑・小姑連合組合から無理矢理、お色直しの通達が来てしまった。

「利知未さんが、こんなに綺麗な花嫁さんなんだから、花婿のお兄ちゃんも、やっぱり釣り合い取って欲しいよね?!」

話が決まった時、一美の言葉に母親は納得顔で頷いていた。利知未もチラリと倉真を見て、くすりと笑っていた。

準一の師匠のカメラマンにも、正式な依頼をした。

「渡辺から聞いております。スケジュールは空けてありますよ」  
電話口で彼は、そう言っていた。

写真は神前式のまま白無垢と内掛け、色内掛け姿で兩人を中心に列席者と一緒に撮る。その後、お色直しの再入場前にチラリと、洋装の二人も納めてくれると言っていた。準一の師匠は、かなり値引いたサービス価格で引き受けてくれた。

結婚式当日まで、残り一月を切ってしまった。本番までには、受付用品の準備、席札記入、メニューの作成、会場のレイアウトと時間割りを相談しなければならぬ。

それでも残りの作業を数えてみて、二人の間にも漸く気持ちの余裕が生まれ始める。帰宅して一息ついて、珈琲を淹れた。

「後、やる事も少し残ってはいるけど……。取り敢えず、一段落した感じだね」

「衣装合わせも終わったからな」

「当日はタクシーでしょ？」

「酒、飲まない筈はないだろうからな。流石に、結婚した途端に違反切符切られる訳にも、行かないだろう？」

「交通課の警官が、披露宴の司会者だしね」

樹絵の顔を思い出して、利知未は小さく笑った。

翌日の日曜日、六月一日には、秋絵が中間相談にアパートへ来る予定だ。今回、樹絵は仕事だった。利知未の仕事の関係で、その後は本番二週間前には、最終打ち合わせを終わらせる事になっていた。

「そう言えば、一週間前にはエステにも行って置いて下さいって、言われて来たんだった……」

「行く暇、有るのか？」

「二十三日の月曜が、夜勤明け休みだな。翌日は遅出だから、その日の午後か、もう少し早くて二十日の金曜休みくらいかな？ 予約出来る方で行ってくるよ。何と無く、照れ臭いけど」

「んなモン、行かなくても良さそうだけだな」

「ウェディングドレス、少し背中、開いてたから。背中、綺麗にして貰って来た方が良いでしょう。美容師さんにも言われたし」

「一皮向けて、更に美人になって来る訳だ。夜が楽しみだな」



「スケベ」

倉真のニヤケ顔に、利知未は小さく舌を出してやった。

## 8 ドクター一年目・六月〜エピソード

8 ドクター一年目・六月（四週間前）

—

翌日、一日には、約束通り秋絵との打ち合わせをした。

この間借りて行ったCDも、MDへ編集し直したものと一緒に持参して来た。式前日までの間に、双子が揃ってもう一日、会う予定だった。

「新郎新婦入場は、この曲ね？」

音楽を掛けながら大まかに順を追って、秋絵が説明して行く。

「着席する時、一礼でしょ、それで、」

簡単に経歴も説明する。出身学校と現在の仕事と、二人の趣味にも軽く触れると言う。

「バイクと音楽で良いでしょ？　さらりと流すから」

少し考えてしまうが、嘘を言っても仕方が無い。倉真の現在の仕事の話と、将来の夢について一言、入れると言う。

乾杯、媒酌人挨拶、ケーキ入刀、祝辞が入り、暫らく時間をとってから、お色直しだ。再入場の音楽は、利知未達の希望通りロックスの、あの曲だ。

「良いのかな？　本当に」

「上手い事、言って繋げてあげるよ。台本は冴吏に監修して貰ってるし」

「プロの作家だからな。上手い事、仕上げてくれてるんじゃないか？」

「そうかな。それで、祝辞の続きが入る訳だ」

「後は、キャンドルサービスと家族の挨拶、お礼の言葉。利知未

達の事だから、花嫁から母親への手紙はしないでしよう？ ベターな企画だけど」

「そうだね、上っ面だけ飾ったって、どうし様も無いから……。いらぬ事は、入れない方が良いでしょう？」

利知末の言葉を聞いて、倉真は少しだけ眉を潜めていた。

「で、新郎新婦退場で、お見送り」

「こつやつて見てみると、思っていた程の事も無さそうだな」

「挨拶は考えてね？ 本日は、若輩者の私達の為に御列席下さいまして、有り難うございますって。気持ちを新たに頑張りますって、事で」

「それも、司会者テキストに書いてあったのか？」

「これは、スピーチ・挨拶文テキスト」

「お金、掛かつちゃったね。レシートがあつたら、清算するよ？」

「わたしだつて、立派な社会人なんだから。これ位の出費は気にしないで。これから、それ以上にお金が掛かつてくるんでしよう？」

「確かに、お金は掛かるモノだけどね」

双子にも、お礼を包んで渡す事になる。

「じゃ、他には確認する事、ある？」

「今の所は、思い付かないな。十四日か十五日に、もう一度会つでしょう？ それまでに思い付いたら、連絡するよ」

「そうして」

「色々、ありがと。お昼、準備するから、のんびり待っていて」

利知末は笑顔でそう言つて、一人、キッチンへと出て行つた。

利知末がキッチンへ出てから、倉真が呟いた。

「お袋さんとの関係、何とかしてやりたいんだけどな……」

倉真の呟きに、秋絵が小さく頷いた。

「確かに、少し可哀想な感じもあるな」

結婚式と言えば、普通はもつと色々と感動や涙がありそうなものだと思う。花嫁に行く娘は、それまでの家族から籍を抜いてしまふのだ。

書類上にも社会的にも、家族とは違う扱いになると言う事だ。

「俺がどうにか出来る問題でも、無さそうなんだけどな」

倉真はそう言って、情けないような小さな笑顔を見せた。

「倉真君は、これから利知未の家族になる訳なんだから、……何て言うのか、利知未を悲しませる事は、しないで上げてね？」

「幸せにするよ。色んな人達に何回、宣言して来たか解らないけどな」

小さく肩を竦めて、倉真は優しい笑顔を浮かべた。

宣言して来た数だけ、利知未には、大切な人たちが存在している。

昼食を済ませて、今度は暫らく雑談に花が咲く。これまでの十数年間の、二人の思い出話で面白い話を聞いた。

「ボートから、落ちちゃったの？」

いつかのツーリング先での恥かしい出来事も、今では笑い話だ。

「そう。池の水、あんまり綺麗じゃ無かったんだよね？」

「だったな。アン時のＴシャツ、結構、匂ってたぜ」

「生臭いとか、そんな感じ？」

「生臭いって言うよりは、泥臭いって感じか？」

「そんな感じかもね。あたしのジャケットも結局、あの後で新しくしちゃったんだ。Ｔシャツ何かと違って、洗濯機でジャブジャブやる訳には行かないでしょ？ あの素材は」

「合皮素材だったか？」

「そう。で、本皮ジャケットに変えたんだ。時期も時期だったし」

「それからは、一昨年 of 冬まで本皮だったな。　まだ、取って置いてあるのか？」

「モノは、良いからね」

「一昨年って、その頃、買い換えたの？」

「倉真に、誕生日プレゼントで貰ったんだ」

「あの時の事は、覚えてるぞ。　里沙さんの真似した利知未に、ジャケットをねだられたんだ」

「利知未が、里沙の真似してたの？」

「だから、冴吏のパーティーの時、予行練習は済んでいたって事になる」

利知未は思い出して、少し照れ臭くなってしまった。

「誕生日プレゼントは、今まで何を貰ったの？」

秋絵は興味半分、披露宴台本のネタ探し半分だ。　どんどん突っ込んで行く。　雑談の中からいくつかエピソードを拾う方法も、司会者テキストには確りと記載されていた。

「始めは、一粒真珠のネックレスだったね」

「お前から、ライターをお返して貰ったな。　すっかり愛用品だぜ」

「そのライターが、そうなんだ。　他には？」

「あたしから倉真には、実用品が多いんだよね。　靴下とか、部屋着とか、靴とか。　毎回、安く済ませてごめんね？」

「俺の欲しい物を上げてったら、安物が高過ぎる物かの、どっちかになっちゃうからな」

「高過ぎる物って？」

秋絵に聞かれて、倉真はチラリと利知未を見る。

「寄せせとは、言わないからな？」

断ってから、答えてくれた。

「バイクが、そろそろ寿命かも知れねー。　良く整備して、誤魔化し誤魔化し走らせてる感じだよ。　……ただ、もしも今のバイクを

止めたら、次は普通車にした方がイイかと思っているんだ。　　そうすると中々、廃車にする決心がつかねー」

そう言って、小さく肩を竦めていた。

「バイクか車じゃ、確かに誕生日プレゼントレベルじゃ、ないね」  
秋絵は納得してしまった。

「利知未は、他には何を貰ったの？」

「洋服も貰ったね。　後、花束」

「花束？　倉真君が、お花屋さんで買って来たの！？」

「……他に、如何すりや良いんだよ？」

あの時の気恥ずかしさを思い出して、倉真は照れ臭くなる。

「後ね、お色直しの入場で使いたって言った曲が入った、アルバムがあったでしょ？　アレも、倉真からのプレゼントなんだ」

あの誕生日の思い出は、利知未にとっては大切な宝物だ。

「ま、良いだろ？　お互いに何を贈ったか何て言うのは、どうだつて」

照れ臭い表情のまま、倉真は話を変えてしまった。

「じゃ、最後の質問。　お互いに、どれが一番、嬉しかったの？」

「俺は、ライターだな」

「利知未は？」

「うーん……、全部！　かな？」

利知未は少しだけ考えて、飛び切りの笑顔で、そう答えてくれた。

## 二

秋絵からの中間報告を終え、次の予定は二次会の最終打ち合わせだ。

その他にも、雑多な用事は増えて行く。　そちらは倉真の母親が、良く協力してくれた。　当日、駅から式場までは徒歩五分の距離でも、タクシーを使う人も居る。　その配車も、倉真の母親が引き

受けてくれた。

新婚旅行の準備も当然、入ってくる。パスポート申請は無事に終えた。旅行先の計画も、国内旅行と違って出来る限り綿密に立てて置かないと、困るのは自分達だ。

倉真は、語学力に問題有りだった。利知未は日常会話レベルならば、何とかなる程度に使える。

城西中学へ通い始める前、約二ヶ月間、あちらで生活をしていた時、殆ど毎日、朝から晩まで勉強をさせられていたお陰だ。

旅行先を決めた頃、利知未が言っていた。

「十代の始めだったから、覚えも早かったんだと思うけど。最近  
は英会話とは、縁が無かったからな。少し、勉強し直しよう」  
「俺は、お前に任せる」

倉真はそう言つて、頭から勉強する気など無さそうだった。

最近、そんな倉真に向かつて、偶に利知未は英語で話しかけてみる。

「任せるって言つたつて、どっかではぐれたら如何する気？」

利知未から言われて、二、三言だけは無理矢理、覚えさせられた。

「案内役は、由香子と和尚が引き受けてくれるつて、言っていたけど」

「助かるよな、いいダチを持ったぜ。イザとなったら、和尚に頼る」

言い捨てて、それ以上はどうしても覚え様としてくれなかった。

式本番までの間、予定では十四日の土曜日に、昼間は館川家、夜はライブハウスへ向かう。FOXとの二次会の相談は、ライブ後が丁度良い。

そこで最終打ち合わせをして、翌日にはまた双子との約束がある。最近の利知未の休日、全て式準備に充てられている。

仕事は相変わらず忙しい。利知未もそろそろ疲れ始めて来てし

まった。

九日、月曜日。利知未は夜勤明けの休日だった。今日も一人で式場迄、出掛けていた。

明日は、また遅出だ。夕食中に、軽く溜息をついてしまった。「どうした？」

何気なく、倉真が問い掛ける。

「どうかした？」

自分が溜息をついた事さえも気付かない様子で、利知未が問い返した。

「溜息、ついてたぞ」

「そうだった？ ごめん、気付かなかった」

「最近、忙しかったからな。平気か？」

利知未の様子が気になって、倉真が珍しく箸を止める。

「大丈夫。式まで後、三週間だ。幸せな筈の花嫁が溜息ついてちゃ、いけないよな。うん、平気だよ」

軽く笑顔を作って、利知未はそう言った。

けれど、その笑顔もやや疲れ気味な笑顔だ。倉真の飯茶碗を見て、手を差し出した。

「お代わり、注ぐよ？」

「ん？ ああ、頼む」

自分の飯茶碗に一瞬、視線を落とす。最後の一口を口にほおり込んで、倉真は利知未に茶碗を渡した。

「サンキュ。…そう言えば、髪、伸びたな」

お代わりを受け取って、倉真が利知未の顔をじつと見る。

「和装だからね、伸ばして来たけど……。似合わない？」

「いいや。何ソーか、……イイと思うぞ」

少し照れた顔をして、倉真がそう言ってくれた。照れ隠しに利知未から視線を逸らして、お代わりを勢い良く掻き込み始めた。



「…ありがとう」

倉真の照れた様子に、利知未は小さく微笑んだ。

『倉真、可愛い』 改めて、そう思ってしまった。

今夜は少し、のんびりとした方が良いかも知れない。 気分を切り替えて、利知未は食事の続きを取り始めた。

その後、ゆつくりと風呂へ浸かり、うたた寝をしそうになってしまった。 入浴時間をのんびり取る時、利知未は半身欲で三十分以上は湯船の中だ。

偶には雑誌を持ち込んだりしている。 仲良く言葉を交わす若いナースから勧められて、時々、疲労回復にアロマオイルを垂らしてみたりもする。

利知未が脱衣所へ向かう時に雑誌を手を持っているのを見ると、倉真はそのつもりで呑気に晩酌を待っている。

風呂場から、オイルの良い香りが漏れて来る時は、長風呂になる合図みたいなものだった。

今日も風呂場からの匂いで、倉真は利知未の体調を知る。

『かなり、疲れが堪っていたみたいだな。 ……無理も無いか』

色々利知未に任せ放しだった事を、反省した。

反省した倉真は、利知未が風呂を上がる迄に、摘みを一皿、用意して見た。 いつか利知未が作ってくれたのを、覚えていた簡単な物だ。

風呂上り、人心地ついた利知未がリビングへ入り、目を丸くした。  
「ごめん。 摘み、足りなかった？」

「いや、そうじゃねーよ。 何と無く、だ。 ロックで、良いよね？」

酒まで倉真が準備してくれる。 利知未は何と無く倉真の気持ちを察して、頬が緩んでしまった。

「ありがとう」

お礼に頼つぺたヘキスをして、倉真からグラスを受け取った。

何時も通りの姿勢になって、何時もよりも倉真に体重を預けてしまつ。照れ臭そうな苦笑いをして、倉真が利知未の肩へ手を回した。

「乾杯」

利知未にグラスを差し出されて、グラスを打ち合わせた。一口、口をつけて、利知未は安堵の息を吐く。

「……何か、漸く落ち着いた感じだな」

利知未が呟く。倉真は改めて、ここまでの利知未の頑張りに礼を言った。

「悪いな。お前も仕事が忙しかったのに、任せっぱなしだった」

「ま、良いんじゃない？ こうやって、労ってくれたんだし。……許してあげる」

「……有り難う」

「珍しく素直だな。何か、考えてる？」

「何も考えちゃいねーよ」

「そう？」

利知未が小さく首を傾げて、軽い笑顔を見せる。肩に回されている倉真の手が、利知未の頭を優しく撫でてくれた。

「……気持ち良くて、好きだよ」

ほっとして目を閉じて、頭を倉真の肩へ凭れる。

穏やかな空気に包まれて、倉真も気持ちいが安らいだ。

「……一生、俺のモンだ」

呟いた声に、利知未は小さく頷いた。

「一生、放さないでよね？ ……倉真も、どっか行っちゃ、嫌だからね……？」

利知未の、その言葉には、色々な意味が込められている。

浮気しないだね。傍にいてね。……絶対、あたしより先に、

死なないでね。

幼い頃、母親に置いて行かれた。 大叔母夫婦は小学校の頃に亡くなった。 そして、中学の頃。

一番、信頼していた長兄・裕一が、亡くなった。

……由美も真澄も、若過ぎるまま、利知未の前から永遠に姿を消した。

哲と、あの人には……。 ……愛しい人が居たのに、浮気をさせてしまった。

優は、早くに自分の、大切な家庭を持ってしまった……。

大切な人に置いて行かれる事は、利知未にとって一番、怖い事だ。

利知未の言葉に、確りと頷いてから。

「取り戻した方が、良いモノもあるぜ？」

倉真は、ここ最近、思っていた事を利知未に伝えた。

利知未は軽く顔を上げて、倉真の顔を覗き込んだ。

「……けど、今は、いいよ」

その額にそつとキスをして、倉真はそう、優しい声で言った。

目を伏せて、利知未は思う。

倉真の言いたい事は。 恐らく。

『家族との、絆……』

自分自身の経験を通して、倉真はきっと、そう感じているのだろう。

「……倉真が居てくれれば、あたしには、それだけで良いよ……？」  
悲しげな目をして、利知未は倉真に、そう呟いた。

その夜、利知未から求めて、二人は抱き合った。

今、ここに居る、この人が。 自分にとって、これから先まで、  
ずっと、一番大切な人だ。

……その想いを、改めて知った。

身体を離して、キスを交わす。 繰り返し、その唇を求める。

「あたし、キスが大好きみたい」

自分の体を、倉真の体の上に重ねる。

唇と唇が触れる擦れ擦れの近さで、利知未がそつと囁いた。

「どうして？」

「……するのも、愛情の確認行為だけど。 ……キスの方が、気持ち  
が伝わるみたいだから」

再び、唇を重ねる。 長い間、そのまま止まってしまふ。

「その意見も、解る気もするな」

軽く離れた唇の隙間から、倉真の言葉が、漏れて聞こえる。

もう一度、長めのキスを交わして、漸く身を離れた。 倉真の腕  
に縋るようにして、ピタリと寄り添った。

倉真の、鼓動が聞こえる。 それは利知未にとって、一番安らぐ  
音だ。

ふと、利知未が呟いた。

「……これから死ぬまでの間に、倉真と何回キス出来るんだろう…  
…？」

頭の中で計算してみた。

「お早うのキス、行つてらっしゃいのキス、お休みのキス。 一日、  
三回キスしたとして、一年365日、1000回ちよつと。 ……  
十年で11000回、二十年で22000回、……六十年で、65  
000回。 ……挨拶じゃなくても、キスしたい時にはするから、  
100000回は、出来ないかな？」

利知未の計算に、倉真は少し目を丸くしていた。

「年食つても、続けるのか？」

「皺皺のおじいちゃん、おばあちゃんになつても、キスし続けるんだから。今際の際も、キスしてあげる。毎日、リップ塗っておなくちゃね。カサカサの唇でキスするのは、嫌だから」

悪戯っぽい笑みを見せて、利知未が倉真を見つめる。

「ガキの前でも、するのか？」

「するよ？」

「それは、照れ臭くないか？」

小さく、利知未が笑った。

「子供達の前でも、するの。あなた達は、お父さんとお母さんが、愛し合つて生まれて来たんだから、望まれて生まれて来た子供なのよつて、教えてあげるんだから」

そう言つて、利知未は目を伏せた。

……思い出してしまふ。

「……だから、ちゃんと、生きて行くのよつて……。伝えて、上げないと……」

裕一、由美、真澄の顔が、脳裏へ浮かんで来る。

……三人とも、若過ぎた。悲しみが、湧き上がつて来てしまつた。

利知未の目から、ポロポロと、涙が零れ出してしまふ……。

「……ごめん」

その涙を、倉真は確りと受け止めてくれた。

利知未の頭を、確りと抱き寄せて、優しく囁いてくれた。

「謝るな。……我慢、しなくて良い」

「うん。……ありがとう」

また、涙が零れ落ちる。手で拭つて、再び倉真の唇を求めた。

「これから、数え始めるか？」

軽く唇を離して、倉真が小さく微笑んだ。

「……まだ、一回」

繰り返し唇を重ねて、離して、数を数えた。

「…二回、…三回」

七回まで数えて、数えるのを止めた。

利知未を抱きしめる倉真の腕に、力が籠もった。

「復活した」

小さく呟いて、倉真の唇が利知未の唇を離れて、耳元、首筋へと移動して行く。

利知未は素直に、その行動に身を委ねた。

「……明日、仕事は、平気？」

漏れる息の狭間で、小さく問い掛ける。

「我慢した方が、影響あると思うぞ？」

そのまま、倉真は利知未の身体へ没頭して行った。

……抱かれて、思う。

「もしも、今、子供が出来ちゃったら……？」

お金が貯まる前に、出産になってしまう。けれど。

「……良いのかな？」

利知未の大切な人、倉真。二人の大切な宝物が、また、増えて行く。

「それは、幸せな事……」

大切な人に置いて行かれるのは、もう嫌だけど。

「大切な人が、増えて行く事は……」 掛け替えの無い、幸せだから。

再び身体を離して、キスを繰り返した。利知未の伸びてきた髪

が、唇に絡まってしまう。

「……ちよつと、邪魔だな」

髪を掻き上げながら、利知未が言う。

「映像的には、艶があつて良いけどな？」

「ドラマや映画なら、そうなのかも知れないけど」

再びキスをして、掻き上げた髪が、また落ち掛かって来てしまった。倉真が手を伸ばして、その髪を後ろへ流す。

「艶はあるが、お前の顔が良く見えなくなるのが、難点だな」

じつと見つめられて、利知未はくすぐったい感じがしてしまう。

「……何と無く、恥かしい」

顔を倉真の肩へ隠す様にして、倉真の首筋へ確りと腕を回した。

沈黙が落ちる。倉真は利知未を、確りと抱き締めてくれていた。

暫らくして倉真が、囁く様に言った。

「……俺は、利知未を産んでくれた、お前のお袋さんには感謝してるよ」

その一言で、利知未の中から、何かが生まれる。

「……私は、倉真のお母さんに感謝してるよ？」

「そう言う事、なのかも知れないな。家族が増えるって言うのは」

「……いつか、私達が産んで育てた子供が、また、大切な誰かに、巡り会う為？」

「それが、幸せの構図……、ってヤツじゃ、無いのか？」

倉真の言葉で、利知未は考えた。

「……その、誰かの為に、人は生まれて、生きて行く……」

「だったら、……気持ちも、変わらないか？」

倉真の言いたい事は、利知未にも伝わった。

けれど、その言葉は、それ以上の真実も利知未に教えてくれた。

「……貴方が居るから、私が居る……」

「お前と出逢う為に、俺は生まれて来た」

「……愛しい人が居るから、巡り会えたから……」

だから、私の世界が、在るんだ……。

自分を取り巻く物全てに、愛しい人の存在が、色を与えてくれている。

……そして、その心は。

これから先にも永遠に受け継がれて行く、真実なのかも知れない。

### 三

結婚式まで、約、二週間。利知未達は、最終的な打ち合わせと準備に、忙しくなった。

月頭の予定通り十四日にFOX、十五日に双子と打ち合わせをした。FOXのライブへ行く前には、館川家でも、本番前の確認だ。優宅にも、確認を取らなければならない。優の家にはファックスもある事だ。資料を送って、電話で取り敢えず簡単に済ませてしまう事にした。本番前日には、改めて顔を合わせて最終確認をする。

その前に、エステにも予約をしておいた。

「何か、ここへ来て大忙しだ」

館川家へ向かう前、朝食を取りながら利知未が言った。

「そろそろ、カウントダウンか？」

「そうだね。あと、今日を入れて、十六日だ」

「旅行の準備も、しなきゃならないんだろ。…バタバタするもんだ」

「って、もう出ないと。倉真のご家族、お待たせしちゃうよ」  
慌てて朝食を済ませて、準備をした。



最近、倉真のバイクは寿命が近い。今日は利知末のバイクで、タンデムをして館川家へ向かった。

「ライブハウスへ周って、その後、簡単に最終打ち合わせして…、戻るのは、また十二時近く成っちゃうかな？」

「どっかで飯、食ってきや良いだろ」

「そうするしか、無いかな」

館川家の前でバイクを止めて、玄関へ向かう間に話をした。

館川家では、今日も母親が晴れ晴れとした笑顔で、二人を迎えてくれた。

ここまでの式場との連絡は、利知末の平日休みを利用しながら終わらせていた。今日は残り少ない準備を、全て片付けてしまうつもりだ。

「受付の道具は用意しておいたわよ」

倉真の母親がそう言つて、筆ペン、ボールペン、サイン帳など、細々とした物を見せてくれた。

「これは当日、一美が責任持つて持つて行きますからね」

家族間でも、細かい役割分担まで終わっているらしい。

「済みません。本当に、何から何まで」

利知末は深々と頭を下げる。

「良いのよ。利知末さんは、お仕事も忙しいのでしょう？ 倉真の方が暇みたいだね、どんどん使つてあげて」

倉真の母親は、実の息子以上に、利知末が可愛いと感じているらしい。

母親と顔を合わせる度、倉真は槍玉に上がってしまう。

「マジ、嫁・姑・小姑連合組合になっちまってるよな」

倉真が少し仏頂面をして、ぼやいていた。

「平和的な事で、何よりでしょう？」

母親はニコリと笑つて、そう言っていた。

披露宴・司会進行の内容と、音楽についても報告をした。

「そう、良いお友達が居て、良かったわねえ」

音楽まで細かく相談に乗ってくれていたと聞いて、母親は言う。

「けど、利知未さんの為に、そうやって良く協力してくれるのだから、利知未さん自身の人柄の賜物なんでしょうね」

館川一家は揃って、すっかり利知未びいきになっていた。倉真は立つ瀬が無い様な気分だ。

けれど、この関係その物には、安堵の息が付けれると思う。それでも一応、憎まれ口だけ叩いてみる事にした。

「偶には、息子の事を褒めても良いんじゃないか？」

「褒める所があれば、いくらでも褒めてあげるわよ？」

母親は一言で、倉真の言い分を打ち消した。親子の仲の良い会話を聞いて、利知未は小さく笑ってしまった。

メニュー表は会場が用意してくれる。料理の打ち合わせは終わっている。会場のレイアウトと時間割についても、非番の樹絵を伴って行き、平日の休みを利用して終わらせてしまった。

二人は今日の館川家での相談を終え、早めに暇した。途中の店で夕食を済ませてから、FOXのライブへと向かう。

ライブ後、ライブハウスからファミレスへ場所を移し、相談を進めた。

FOXは、利知未の古巣だ。リーダーと拓はアキに連絡をして、当日の会場レイアウトなども、一緒に引き受けて貰ったと言っていた。

「こう言うのは、男だけじゃイメージまとめられないからな。どうせ相談するなら、アキがいいかと思っただんだ」

「アキも、随分と張り切ってるよ？」

拓がリーダーの言葉を聞いて、ニコニコしながら言っていた。

「リーダー達にも、お世話になりっぱなしだ」

話を聞いていて、利知未は呟いた。あの頃の事も、思い出してしまった。

「アキは、元気にしてるの？」

「ああ。子供の世話にテンテコ舞いしながら、元気にやってるよ」  
日曜の練習時間、アキが子供を連れて遊びに来ながら、協力をしてくれていると言う。

「主婦は日常生活に刺激が少ないから、偶にはこういう事をするのも張り合いがあって楽しいわ、……何て、言いながら」

あの頃の、元気で明るいアキを思い出した。

「バンド、また始める時に、アキにも声を掛けてみたんだよ。三人目の子供が大きくなって、手が掛からなくなると無理だって言ってたけどね」

「じゃ、その代わりで、おれにお鉢が回って来たって事なのか」

現・ヴォーカル宇佐美が、ぼやき半分で突っ込んだ。

「そう言うこと。ヴォーカルがアキだったら、どんなFOXが復活していたんだろうな？」

拓が言って、少し想像してみた。

「ファン層、変わってたんじゃない？」

利知未の言葉に、リーダーと拓が頷いた。

「だろうね。相変わらず綺麗にしてたよ、アキは」

「世話も大変だけど、綺麗なお母さんで居てあげたいからって言うてたな」

「アキらしいかな」

「利知未も、旦那の為に頑張るか？」

リーダーに言われて、チラリと倉真を見る。

「そうでしょうか？ 浮気防止の為に」

「瀬川さんみたいに綺麗な奥さんを貰って、浮気なんかしたら罰が当りそうですね」

現ドラマーが、珍しく話しに加わった。FOXのドラマーは、無

口なタイプが多いらしい。

彼は昔のFOXのファンとして、利知未のヴォーカル時代にも、何度かライブに来ていた事があったと言う。

歴代メンバーの中、ミュージックシーンでの一番の出世頭、敬太の事は尊敬していると言っていた。

披露宴は、午後四時には終わる。二時間半後、六時半には二次会の受付開始だ。会費制で、男性三五〇〇円、女性三〇〇〇円に設定してあった。

七時からライブが始まり、七時半には終わる。八時になると寿司の出張カウンターが準備を始め、八時半には寿司が出る。それまではオードブルと宅配ピザを摘みに、宴会となっている予定だ。ステージでは生演奏BGMを少しの間、流していてくれると言う。生演奏が無い時間はCDを流しながら、FOXのメンバーもパーティーに参加して貰う話になっていた。

お開きは十時を予定している。その後、利知未と倉真はホテルへ一泊して、翌日の午前中には機上の人だ。

「企画として、やって貰いたい事があるんだけどな？」

リーダーが一端、話を終えてから、利知未に言った。

「二人の思い出の曲があれば、一曲、演奏してくれないか？」

行き成り言われて、目を丸くしてしまった。

「丁度良いお披露目になると、思うんだけどな？」

「これから練習しないとなくなっちまうぞ？」

倉真が言う。

「って事は、思い出の曲は勿論あるって、事になる」

すかさず、リーダーが突っ込んだ。利知未と倉真は顔を見合わせる。

「やる？」

「お前がやりたいんなら、努力はするぞ？」

二人の脳裏に浮かんでいるのは、当然、あの曲だ。  
「やつちやえ！」

宇佐美が軽く発破をかける。ニコニコしていた。

「当然、バックは引き受けます」

ドラマーも何気なく発破をかける。

「ギター、貸すけど？」

拓はベースリストだが、ギターも持っている。二人の当日の荷物を増やさない、提案をした。

「その間、俺はのんびり休憩でもするかあ？」

リーダーが面白そうに笑って、そう言った。

メンバーに促されて、利知未と倉真も気持ちを決めた。

「んじゃ、明日から二週間、特訓だな」

倉真が言って、利知未も言う。

「ギターのチューニング、覚えていれば良いけど」

小さく肩を竦めて見せた。

「決まりって、事で」

「はい。お願いします」

二人で、ペコリと頭を下げた。

「俺達のライブが終わって、始めのお披露目って事で」

「その頃には、遅刻してしまう招待客も揃うだろう？」

リーダーと拓が頷いて、メンバーと乾杯をした。

翌日は午前中から、優宅との連絡を取った。電話とファックスを使って、昨日までに決まった事の報告をする。

「変更点、ある？」

利知未に聞かれて、大丈夫だと答えた。席次表の最終的な判断は終わっている。受付の方は、倉真から克己に連絡済だった。

それは利知未が夜勤明けの仮眠を取っている間に、倉真が一人でバイクを走らせ、挨拶代わりに、お願いをしに行った。

「利知未は夜勤明けだから、一人で来ちまった」

そう言つて久し振りに現れた倉真を、克己達は喜んで迎え入れてくれた。

「お前の頼みじゃ、断れないだろ？」

克己はそう言つて、昔から変わらない笑顔を見せてくれた。

昼になり、今日は秋絵と樹絵が揃つて、利知未達のアパートへ来た。

「もう、再来週なんだ。何か、緊張して来た」

樹絵が、情けない顔を見せる。

「わたしだつて」

秋絵も言つて、二人でチラリと、視線を合わせた。

リビングを使って、利知未と倉真の動きに合わせて、号令のタイミングや話の内容を、確認した。最終打ち合わせを終えて、ゆっくりと雑談タイムを取った。

樹絵と秋絵は、利知未がキッチンへ消えている内に、倉真と頭を突き合わせて一つの相談をしていた。

「利知未には知らせるなよ」

「解つてる。ちゃんと文章、考えて来てね？」

「…思つた事、言うだけだよ」

話が纏まつてから、今日も利知未が双子の為に用意したケーキと紅茶を持って、リビングへ戻つて来た。

「何の話、してたの？」

「何も、話してないぞ？」

倉真のすつとぼけに合わせて、双子もとぼけておいた。

二十三日までには、忙しい時間を縫って、利知未のエステも終了していた。

式前日の二十八日。式場に最後の挨拶へ、二人揃って出掛けて行った。今回は、倉真の母親は抜きだ。明日は自分達の結婚式だ。

係りの女性に直接会い、明日はよろしく願いしますと、二人で揃って頭を下げた。来る前に館川家へ寄って、明日の引き出物を運んで行った。

その後、優宅へ周り裕一の墓参りをして来た。優達とも最後の確認をし、夫妻を前にして、長い間お世話になりましたと、利知未が三っ指を着いた。

朝、借りて行った車を準一へ返してから、アパートへ帰宅した。

夜、改めて、二人で簡単に乾杯をした。旅行の準備も何とか纏まった。明日の朝七時半には、タクシーが迎えに来る。

ここから式場まで、余裕を見て入り時間予定の二時間前の出発だ。「本当は家族と過ごすべき日、何だろうけど……」

「仕方ない。優さんには昼間、会いに行っただけだったけどな」

「……でも、これで、良いのかな？　今までだって、ずっと一人だったんだから」

家族と共に暮らした思い出は、小学校卒業までだ。

「お前は、一人じゃ無かったよ」

倉真は、優しく言ってくれた。

「下宿に沢山、妹分が居ただろ？ 仲間だって居た」

「……この三年間は、倉真が居てくれたモンね？」

「そう言うことだ」

「ありがと。……これからも、ずっと一緒だよな？」

「当たり前だ」

笑顔を見せてくれた利知未を、そっと引き寄せた。

「これからも、宜しくね」

「こっちこそ、宜しくな」

二人は顔を見合わせて、軽いキスを交わした。

早めに寝室へ引っ込んでから、ベッドの上で、利知未がふと呟いた。

「……明日になれば、館川 利知未だ」

「そうだな。 瀬川 利知未、最後の夜だ」

「……名前が変わって、あたしは変わるのかな……？」

「立場が変わるな。 婚約者から、カミさんになる」

「そうじゃなくて。 あたし自身は、何か変わってしまうのかな？」

今まで、そんな事を考えた事は無かった。 どうしてそんな事を考えてしまったのか？ 自分でも、良く解らない感慨だ。

「変わる訳、無いだろ？ お前は、お前だ」

「……そう、だよな」

「俺の態度は、変わるかもしれないけどな」

「どういう風に？」

「釣った魚には餌はやらないって、世間一般では言われてる」

少し冗談めかした言葉に、利知未も軽く膨れて見せる。

「そう言う事、言う訳？ 倉真がそうになったら、如何してあげよう……？」

少し、怖い思案顔を見せてやった。 倉真が小さく吹き出した。



「アンマ怖い事、言ってくれんなよ？ …… 大丈夫だ、変わらねーよ」

利知未を引き寄せて、額へキスをする。

「一生、俺が守る」

「ありがと。 …… けど、守って、くれるだけ？」

「お前も何時か生まれる子供も、キツチリ守り通してやんぜ？」

「…… 愛し続けては、くれないの？」

ピタリと寄り添った姿勢のまま、利知未が小さく首を傾げた。

「…… 愛し、続けるよ」

やや照れ臭い顔をして、倉真はそう約束してくれた。

「…… うん。 あたしは一生、倉真の事、支え続けてあげる」

利知未からも約束をして、もう一度キスを交わした。

寄り添ったまま二人、明日に備えてゆっくりと眠った。

朝が来て朝食を確り取ってから、利知未たちは迎えに来たタクシ  
ーへ乗り込む。 本日の荷物を部屋から運び出しながら、話をして  
いる。

「流石に、凄い荷物だよ」

「旅行の支度も、一緒だからな」

「披露宴まで終わったら、明日香さんが要らないものは預かってくれ  
るって」

「それでも、スーッケース二つか。 三泊四日の旅行にしても……」

「仕方ないでしょう？ パスポートは確認した？」

「入ってるよ」

自分の荷物をポンと叩いて、倉真が答える。

タクシ一の運転手が、車の外へ出て深く一礼をした。

「本日は、おめでとうございます」

「有り難うございます」

荷物を置いて二人で礼を返した。 利知未がウエストポーチから、

祝儀袋を取り出した。中身はそれ程入れてはいないが、いくつか準備をしてあった。倉真の母親の助言による。

「些少ではございますが、私共の気持ちでございます。今日は宜しくお願い致します」

祝儀袋を運転手へ渡すと、彼は押し頂いて、利知未達の荷物をトラックへ運んでくれた。その利知未の所作を見て、倉真は感心していた。

『やっぱ、俺にはコイツじゃなきゃ駄目だな』

式を控えた朝。改めて、これから自分の妻となる女性を惚れ直した気分だ。気分良く、晴れの一日をスタートさせる事ができた。

式場へ着いて、運転手は荷物をフロントへ運ぶのまで手伝ってくれた。

去り際に再び一礼をして、良いお式をと云って、二人を送り出してくれた。

「いい運転手さんに当たったね？」

その後姿を見つめて、利知未が笑顔を見せる。

「そうだったな」

倉真も笑顔で、頷いていた

フロントへも祝儀袋を出して、宜しくお願い致しますと頭を下げた。荷物を預け終わると、一足先に到着していた媒酌人夫妻が、二人を見つけて声を掛けた。

媒酌人夫妻にも頭を下げて、二人と共に、其々の控え室へと引込んだ。

「じゃ、後でね？」

「おお」

部屋へ分かれて入る時に、利知未と倉真は、短く言葉を交わした。

これから利知未は、控え室で着付けをして貰う。新郎側の家族は、新郎側の控え室だ。倉真の母親は、少しハラハラとしてしまった。

「利知未さん、綺麗に着付けして貰っているんでしょねえ。式の途中で具合が悪くなったりは、しないかしら……？」

館川家が到着したのは、二人が会場へ入ってから三十分後位だった。倉真の方も普段着ない和装で、表情はやや、うんざり気味だ。

「お袋、着くなり利知未の心配か？」

「あんたは、多少の事でどうにかなったりしないでしょう？ 結婚式と言うのは、花嫁の方が緊張するものなのだから」

「……ったく」

首を竦めてしまう。

着付けの女性は、この結婚は素晴らしい物になるだろうと、長年の勘に教えられていた。新郎の母親、花嫁の姑が、息子よりも花嫁の心配をしているのだ。

良い縁のあった両家なのだろうと、心の中では感じていた。

一美も、ワクワクとしている。

「早く、ウェディングドレス姿の利知未さんが、見たいな」

「色直しまでお預けだ。ザマミロ」

倉真が花婿らしくない、憎まれ口を叩いた。

自分だって早く見たいのは、ウェディングドレス姿の利知未だ。

「お前は。こう言う厳肅な日に、何を浮かれているんだ」

倉真の父親が、息子を短く窘めた。

瀬川家の控え室には、早々と優夫妻が到着して利知未を待っていた。

「もう、着いていたの？」

「お互い、初めての事だから、緊張してしまつて。朝、早く目が

覚めてしまったのよ」

明日香が小さく笑って、答えてくれた。

両親の気が急いている事に引き摺られてしまった子供達は、大欠伸だ。

「真澄と裕一は、眠そうだね。そのソファ借りて眠ったら？」

利知未に優しく言われて、子供達は素直に従う事にした。

優夫婦は、媒酌人夫人に改めて頭を下げる。

「着替えは、こちらの部屋で済ませますから、良いですよ。幼い

子供達には、退屈な時間ですものねえ」

言われて、恐縮してしまった。

二部屋続きの隣へ、利知未と媒酌人婦人、梅野が引っ込んだ。

着付けは媒酌人婦人が、木目細かい気配りをしてくれる。

優達は早くに着き過ぎてしまった事で、式場から出して頂いた桜湯を飲み過ぎてしまった。

新郎新婦が早めに到着してくれた事で、準備は滞る事も無く進んだ。

利知未の支度が出来る頃、ロビーへ準一と師匠が到着した。

「このスタジオを借りるんだから、準備しないとな」

準一が、真面目に本日の予定を確認している。

フロントへ声を掛け、スタジオの場所を聞いて、二人は移動して行く。機材を置いて一度、本日のクライアントへ挨拶に向かった。

式の始まる三十分前、利知未の準備は既に整っている。

控え室へ現れた準一が、利知未を見て目を丸くしていた。

「利知未さん、和装も中々、似合うんだな」

子供達も目を覚ましていた。両親の写真を撮ってくれた時に、二

人とは顔見知りだ。 準一には、子供たちは二人とも懐いている。裕一が早速、準一に纏わり着き始めた。

「本日は、おめでとうございます」

挨拶を受けて、優夫婦も頭を下げる。

「有り難うございます。 あの拙には、お世話になりました。 本日も宜しく願います」

優が挨拶をして、利知未も椅子へかけたまま軽く会釈をした。 着崩れない為だ。 鬘が重くて、上半身の自由も余り利かない。

「素晴らしい花嫁さんですね。 腕が鳴ります」

角隠し、純白の花嫁衣裳。 襟元の赤は、すっきりと映えている。

「…有り難うございます」

利知未は少々、照れてしまった。

「倉真に自慢してやろう、先に見て来ちゃったぞって」  
準一がにやりと笑って、そう言った。

「こういう席で、失礼な発言をするんじゃない」

師匠に窘められて、小さく舌を出してへへ、と笑う。

「倉真の準備は、終っているのかな？」

利知未が、小さく呟いていた。

次に館川家の控え室へ入り、同じく挨拶を交わす。 こちらは倉真以外は初対面だ。 畏まった準一を見て、倉真が笑った。

「今日は、有り難うございます」

和装の倉真は中々、貫禄があるように見える。 頭を下げた倉真を見て、準一の師匠は感心していた。

「こちらも、良い花婿さんだ。 いい写真が撮れそうです」

言われて倉真は照れ臭い。 母親は嬉しく感じて、微笑んだ。

「本日は、お世話になります」

館川家とも挨拶を交わして、準一達はスタジオの準備へ戻って行った。

利知未の母親は、時間の十五分前にギリギリで到着した。花嫁姿の娘を前に、ポーカーフエイスを貫いていた。

『……綺麗な、花嫁さんだわ』　内心だけで、そつと感動している。

じつと、利知未を見つめていた。

「……今日は、有り難う」

利知未は重い唇を開き、それだけ漸う口にした。

「お母様。　本日はおめでとうございます。　花嫁様は少々、緊張しているようです。　本当に、お綺麗なお嬢様で……」

梅野夫人は年配者らしく、にこやかに利知未の態度をフォローしてくれた。　母親は微笑して、改めて初対面の挨拶を交わした。

「本日は、お世話になります」

それだけは、確りと伝えてくれた。　優は少しだけ安心した。

式場内の祭殿へ、時間で移動した。　式は厳かに、無事に進んで行った。

始めに列席者入場・着席。　斎主一拝、お払い。　神饌奉献・祝詞奉上。　それから三三九度の杯を交わして、誓詞奉上、指輪の交換。　新郎新婦、玉串奉奠・媒酌人夫妻、玉串奉奠と進んで、豊栄の舞、親族杯の儀。　斎主挨拶・斎主一拝。　それで、一同退出だ。　一時間ほどで全ての式を終え、これから写真撮影の後、親族顔合わせを経て披露宴へと移行して行く。

写真撮影をして、新たに両家が一つになった控え室へ移動する。　そこで漸く、利知未と倉真は顔を見合わせる事が出来る。

撮影まで終えた頃、双子と、受付を手伝ってくれる約束の、朝美と新藤一家が到着した。ロビーで、克己は双子と朝美を見つけた。妻、響子は、初対面だ。夫の後へ従って子供の手を引く。久し振りの再会の挨拶を終え、克己は自分の家族を改めて紹介した。

「わたし達が、披露宴の司会をするからね」

「聞いてるぜ。一度、顔出して置いた方が良いんだろう？」

「その、つもり。克己さんも一緒に行く？」

響子を振り向くと、妻は笑顔で頷いた。

「子供は、お邪魔になるといけないから。ここで待ってます」

妻の言葉に従って、双子、朝美と連れ立って控え室へチリと顔を出す事にした。

其々の親族紹介を終え、披露宴が始まるまでの間、歓談時間が設けられていた。ここで改めて、お互いの家族通しこれから始まる付き合いの為に、お互いの家庭を良く知る機会が生まれる。

子供達と一美は、直ぐに打ち解けてしまった。

利知末の母親は、控えめにしている。優夫婦が主立って両家の橋渡しとなる。利知末は、なるべく館川家と言葉を交わす。

反対に倉真は、優夫妻と相変わらず仲良く雑談などしてしまう。

利知末の姪っ子・甥っ子を挟んで、和やかに時間が流れた。

午後二時から披露宴だ。一時半には受付を開始する。親族紹介が終えて直ぐに、双子と克己、朝美が挨拶へ現れた。

「克己、さん、お久しぶりです」

館川家の目を気にして、利知末が言葉を直した。克己は軽く頬が緩んでしまった。……あの、利知末が。綺麗な花嫁姿だ。

「おめでとうございます」

挨拶を交わして、双子は、本日は宜しくお願い致しますと、頭を下

げた。

「本当に、そっくりなのねえ。今日は、宜しくお願い致します」  
頭を下げた双子を見て、倉真の母は感心していた。

「一卵性だ。そっくりで当たり前だよな？」

倉真に言われ、双子は計った様に、ぴつたりとした呼吸で笑顔を見せた。

朝美と克己も改めて挨拶をして、受付グッズを一美から渡され、控え室を後にした。

## 二

定時で、披露宴は始まった。

予定通り、入場から乾杯、ケーキ入刀、祝辞と進んで、前半の祝辞を終えてから、二人がお色直しへと立った。

披露宴中の写真は、師匠から言われて、準一が撮ってくれていた。企画中の写真だけ有れば、良い事だ。途中の光景も何枚かフィルムに収めたが、ケーキ入刀の後、暫らくしてスタジオの準備へと戻って行った。

衣装換えを終えた頃、倉真はこっそりと克己を呼んで貰った。

披露宴の途中と始まる前の一瞬の挨拶だけでは、昔からの兄貴分、克己と砕けた言葉を交わす事も出来なかった。このタイミングだと思った。

利知末のウェディングドレス姿を見て、倉真は見惚れてしまった。

「……似合う？」

恥かしそうに、利知末が問い掛ける。

「……綺麗だ」



係りの女性が気を利かせて、利知末が軽く済ませた食事の食器を片付けに立ってくれた。

暫らく見つめ合ってしまう。倉真が近付いて、利知末の頬へ手を伸ばす。

そつとベールを後ろへ流して、改めてキスを交わした。

ノックの音がして、ゆつくりと唇を離した。

「倉真、口紅、ちよつと着いちゃったよ？」

ティッシュを一枚取り出して、口紅の後を拭ってやった。

「サンキュ。チヨイ、待ってるよ？」

言つて、倉真が控え室のドアを開いた。

「何だ？」

克己が出て来た倉真へ、眉を上げて問い掛けた。

「ま、取り敢えず入ってくれ」

倉真に促されて、克己が控え室へ足を踏み込んだ。

「克己！」

利知末が、少し驚いた声を上げる。

「倉真に呼ばれたんだ。何だと思っただんだが……。コイツを、俺に見せびらかしたかったのか？」

綺麗なウェディングドレス姿の利知末に、少し見惚れてしまう。

「そう言う訳じゃ、ねーんだけどな。親戚の前じゃ、普通に話せなかっただろう？俺も利知末も」

「……そうだね。ありがと。気を利かせてくれたんだ」

昔に戻ったような、気楽な笑顔を利知末が見せてくれた。克己と気楽に言葉を交わした事で、少し緊張が解れた。

利知末のドレスは、すらりとしたデザインの物だ。その長身とプロポーションが、余す所なく発揮されている。ブーケには、カサブランカのアレンジした物を用意した。花の白は、葉の緑に。

葉の緑は、ドレスの白に良く栄えていた。

「克己にも色々、世話になったからね」

「行き成り受付お願いしちゃって、ごめんね。有り難う」

利知未は、克己にニコリと笑顔を見せた。

「そろそろ再入場だな。また、ゆつくりと会う機会を作ろうぜ？」

倉真が言って、克己は一足先に披露宴会場へと、戻って行った。

お色直しのドレス姿を、先に写真へ納めた。思い出の曲がノリの良いテンポを作る中、二人は再び招待客の前へ、姿を現した。

「お二人の思い出の曲に乗り、お色直しを済ませた新郎新婦が入場されます。皆様、どうぞ拍手でお迎え下さい」

秋絵が言って、拍手が聞こえ始める。係りの人が扉を開いて、洋装の二人が披露宴会場へと、戻って来た。

祝辞の続きが始まり、終えてから、キャンドルサービスだ。準一もカメラを構えている。師匠もカメラを構えて、一つ一つのテーブルの招待客達と一緒に、二人の姿を納めてくれた。

披露宴の終盤になり家族の挨拶が始まる前に、利知未の聞いていなかった企画が挿入されていた。

「新郎から、新婦のお母様へのご挨拶です」

樹絵が、さらりと進行して行く。

利知未はビックリしてしまった。館川家には先に一言、断っておいた。

倉真が改めて進み出て、利知未の母親の前へ立った。深く一礼をして、たった一言。

「……利知未を、この世へ生み出してくれた事を、深く感謝します」

母親は、目を見張ってしまった。利知未の目から、涙が溢れ出した……。梅野夫人がハンカチを出して、そっと利知未の涙を拭

つてくれた。

倉真の母親も、薄っすらと涙を流した。

「必ず。利知未を幸せにします。どうぞ、ご安心下さい」

そう言つて、倉真は再び定位置へと戻った。

招待客から、拍手が聞こえ出した。

利知未の母親の目にも、ライトの明かりを受けて光る物が、浮かんでいた。

家族の挨拶と、新郎新婦からのお礼の言葉が続き、新郎新婦退場だ。

宴会は予定の時間通りで、お開きとなった。

招待客を見送る。利知未は沢山の人達から、お祝いの言葉を改めて戴いた。

二次会へ進むメンバーとは、簡単に挨拶を交わした。披露宴で帰宅する親族一同へは、丁寧な挨拶をした。忙しい時間を縫って出席して下さった、塚田医師にも、倉真の会社の社長夫妻にも。二人揃って深く頭を垂れた。

全ての招待客を送り出してから、媒酌人夫妻と式場の係りの人達へも丁寧な礼を述べて、両家の家族にも、改めて感謝の気持ちを表した。

着替えを済ませて、式場への支払いを終え、漸く二人は一息ついた。

「先に、今夜の宿泊ホテルへチェックインしてから、二次会ね」  
これからの時間割を、二人で確認した。夕方五時半になるうとしている。

「ホテルまで、片道三十分くらいか？」

「それ位？ 六時過ぎにはチェックインして、七時前にはライブハウス」

「寿司屋にも、確認の連絡しないとな」

「披露宴が終わったら、連絡入れる約束だったね。倉真の携帯、貸してくれる？」

利知未に言われて、携帯電話を手渡した。連絡を入れている時に明日香が、利知未の余計な荷物を引き取る為に姿を現した。

利知未は、今日は宜しくお願いしますと伝えて、直ぐに電話を終えた。

「お疲れ様。 良い、お式でした」

明日香が、利知未の電話が終わるのを待つて、微笑んで声を掛けた。  
「有り難うございました。 荷物、ごめんね、明日香さん」

「良いのよ。 あちらのご家族には今日の式について、お世話になりっぱなしだったし。 少し位は家も役に立たないかね？」

荷物を受け渡す。

「よろしく願います」

「お願いされます。 婚姻届も、責任持って提出して行くから。」

これから、二次会ね。 始まる前には連絡をするから。 羽目外して飲み過ぎて、明日の出発、寝坊したりしないようにね？」

「解ってます。 …… 母さんは？」

「今夜の飛行機で、とんぼ返り。 …… 利知未さん、本当に良かったわね」

「え？」

「良いお嬢さんに、巡り会えたと言う事。 倉真君、利知未さんの事、宜しく願います」

頭を下げられて、少し照れ臭くなってしまった。

優が館川家の面々と、ロビーへ向かって来た。 利知未の母親は、既に会場を出て行った。 最後に挨拶だけは、して行ってくれたら

しい。

館川家とも少し話をして、時計を見て、行つて参りますと挨拶を交わして、急いで二人は式場を出て行つた。

### 三

二次会が始まる前に、滑り込みで利知未達は到着した。明日香からは、無事に婚姻届を提出し終わった旨の連絡が、先ほどあつた。

ライブハウスの受付で、宏治が迎えてくれた。

「全員、揃つたか？」

「後、一人。遅れて来るつて、連絡があつた」

「そうか。始めちまつても、構わないのか？」

「リーダー達は、もうステージ？」

「五分前ですからね。改めて、おめでとうございます」

宏治に、頭を下げられて、倉真と利知未はくすぐりたい気持ちになつた。

利知未はワンピース姿だつた。この格好でギターを弾く事になる。少し照れ臭いのと、上手く出来るのかと言つ不安とで、また緊張し始めてしまつた。

裏の扉が開き、アキが顔を出した。

「利知未！ 久し振り！」

「アキ！ 色々と協力してくれて、有り難う」

「おめでとう。二人の準備が整つたら、私がGOサイン出す事になつていたから。もう、平気？」

「ギリギリで、ごめん。…倉真、平気？」

「俺は、大丈夫だぞ？」

「緊張は、していない？」

「朝から緊張しっぱなしで、どれが緊張なのかも解りやしねーよ」  
倉真の軽口に、利知末も宏治も、アキも笑った。

笑った事で肩の力が抜けて、利知末の表情も少し変わった。

「じゃ、久し振りのステージだ。まずは、FOXのBGMで入場」  
「ステージ上から、出るのか？」

「違うわよ。入り口から入ってステージへ上がって、二人が挨拶をしてからライブ開始。倉真君も久し振りだけど、相変わらずそうね」

余り細かい事を考えない様な性格は、普通りだと感じた。

「変わりよう、ないっすよ。宜しく願います」

倉真からも挨拶をした。アキが、ステージ上へ合図を送った。

アキの合図を見て、リーダーが照明へペンライトをちらつかせた。  
それを合図にして、ステージ上が薄っすらと浮かび上がる。

「お待たせ致しました！ 新郎新婦が到着しました。入り口へ、注目！」

軽いノリは相談通りだ。

FOXの思い出の曲をBGMにして、開かれた扉から、利知末と倉真が入場した。

「熱々の二人へ、盛大な拍手を！」

音楽と拍手に迎えられて、照れた表情の二人が、手を繋いで観客の中を抜けて行く。ステージ上へ着くまでに、ライブのノリで皆と握手を交わしながら進んで行った。

ステージに上がった二人を確認して、リーダーがもう一声。

「今日から新しく誕生した家庭へ、祝福の拍手を！」

拍手の中で、新郎新婦、礼！ と、号令を掛けられた。思った以上の軽いノリの二次会になりそうだ。それは嬉しいと思った。挨拶も簡単で良い。

「ご来場の皆様に、新郎新婦が、ご挨拶をさせて頂きます」

リーダーから振られて、倉真がマイクへ向かう。

「……何か、こう言うの、照れ臭いな」

眩きまでマイクが拾い、会場から笑い声が起こる。

「頑張れ！ 倉真君！」

披露宴会場から、先に到着していた秋絵の声が上がった。

「どーも。今日は忙しい時間を割いて、この会場へ足を運んでくれて有り難う。ここに居るのは皆、堅苦しい事のないダチばかりだ。最後まで確り楽しんで、腹一杯食って下さい」

「八時半頃から、お寿司の出張カウンターも出ます。ピザ、食べ過ぎないでね？ 今日は、私達の為に、本当に有り難う！ 先ずは、あたしの所縁バンド、FOXのライブで盛り上がって下さい！」

利知末も言つて、リーダーへ舵を任せた。

「サンキュ。では、新郎新婦も、先ずは観客としてお楽しみ下さい」

大袈裟な礼をして、リーダーが、ステージ隅に用意された階段を指し示す。促されるまま二人がステージを降りて、FOXのライブが始まった。

三十分のミニライブは、あっと言う間に過ぎて行つた。

利知末が作つた曲も、今のFOXアレンジで何曲か演奏された。

会場は盛り上がった。FOXの演奏が一端、終了する。

「さて、本日のスペシャル企画。新郎新婦が思い出の曲を、このステージで演奏してくれる運びとなっております。利知末！ 倉真！ 準備は？」

問われて、拓がギターを準備する中で、二人が再びステージへ上がる。

観客達から、拍手と歓声が上がった。

「待ってました！」

声に送られて照れながら、二人は演奏の準備を始める。

その時、会場の入り口扉が、静かに開いた。扉付近で待機していた宏治が、その遅れて来た客を見て目を丸くした。

「間に合った見たいだな」

聞かれて、宏治は頷いた。

「お久し振りです。……敬太さん」

「利知未達は？」

「もう、ステージに」

「有り難う。君は、利知未の？」

宏治の顔を見て、敬太が目丸くする。

「いつか、補導された警察署から敬太さんの車で、母と一緒に送って貰いましたね。ご活躍は、拝見しております」

ステージ上の準備が整って、二人は話を止めた。

「……利知未、綺麗になったな」

ライトの中の利知未は、あの頃、セガワとしてステージに立っていた頃に比べて、すっかり大人の女性へと変わっていた。

ステージ上から、宏治と話をしていた人物を、利知未は演奏の途中で目に入れた。一瞬、驚いて、手が止まりそうになった。

利知未の変化に、倉真は気付いた。演奏をしながら利知未へ近寄って、その視線の先を確認した。

「……敬太」

呟いて、利知未の表情が、くるりと変わる。

飛び切りの笑顔を見せながら、間奏の僅かな間を使って、倉真の頬へキスをした。

「……あたしは、今、凄く幸せだよ……」

心の中で呟いた。その思いを、改めて歌へ込めた。



演奏が終わり、会場から割れんばかりの拍手と歓声が、二人のステージへ送られた。

ステージ上へシャンパンが運ばれ、無事に演奏を終えた事に、会場全体と一緒に乾杯をした。再び拍手が巻き起こった。

敬太は、この後まだ仕事があった。利知未のステージを見終わり、乾杯をした。暫らくステージ上の二人を眺めてから、目が合ったリーダーへ会釈をして、静かにライブハウスを後にした。現在の利知未の事は、今のステージを見れば十分だった。

『……幸せに』 心から、二人を祝福した。

八時になり、寿司の出張カウンターの準備が始まる。

ステージ上では飛び入りヴォーカリスト達が、FOXの生演奏をバックに、自慢の喉を披露していた。透子も飛び入りした。透子に手を引かれ、朝美と双子もステージへ上がった。

寿司の出張カウンターが始まると、そちらも大人気だ。その中で利知未は、再びステージへ上げられてしまった。

二、三曲、久し振りに、FOXと共に演奏と歌声を披露した。

中学時代の後輩も、倉真の悪ダチ達も、その歌声と姿に見惚れ、聞き惚れた。

「ナイスヴォーカル！ FOXは、何時でも利知未の復活を待ってるぜ？」

「チョイ！ それって、おれは、お払い箱って事か？」

「そうなるな」

宇佐美とリーダーの会話に、会場が沸いた。

賑やかに、楽しい雰囲気の中、二次会は大盛況の内に幕を閉じた。

### エピローグ（これから先の未来へ）

二次会を終え、二人はチェックインをしてあったホテルへと、到着した。

部屋へ落ち着き、漸く人心地ついた。

「……終ったね」

「ああ」

顔を見合わせて、呟き合う。改めて今の想いを込めて、唇を重ねた。

「これで、本当の意味で、俺の物だ」

倉真が言って、利知未を確りと抱きしめた。

「これから、本当に宜しくね？」

「こっちこそ」

ニコリと笑顔を交わして、倉真は、利知未を抱き上げてしまった。

「ちょっと、倉真?!」

「大人しくしてろ。壁、蹴っ飛ばすぞ？」

「だって、倉真だって疲れてるでしょ?! ……重くない?」

「これから新婚初夜だったのに、疲れていられるか?」

「あたしは、クタクタだよ」

「だから、こうしてベッドまで運んで来た」

「シャワーくらい、浴びさせて」

「仕方ないな」

ベッドの上へ利知未を横たえて、改めてキスをした。利知未の  
手も倉真の首筋へ伸びていた。そつと唇を離して、利知未が言う。

「先に、浴びて来てよ？」

「そうするか」

頷いて、倉真はゆっくりとバスルームへと向かった。

倉真がバスルームへ消えてから、利知未は何時もの様に、彼の着替えを準備した。それから自分も、のんびりと荷物の整理を始めた。

ふと手を止めて、さっきキスを交わした唇を、指でそつと辿った。

「……これから、倉真は私の、旦那様だ」

照れ臭い感じがして、小さく肩を竦めた。結婚指輪の嵌められた左手を、じつと見つめる。結婚指輪の嵌められ

「ここまで、本当に色々な事が有ったな……」

初めて倉真を異性として意識した、あの夏から。思い出が沢山蘇って来た。あの夏を共に過ごした由香子とも、明日、久し振りに会える。

「飛行機の中で、うたた寝しちゃうかもな」

今日までの数ヶ月間と今夜の事を考えて、利知未はそう思った。

シャワーを浴びながら、自分の左手の薬指の違和感に、ふと視線が動く。

「……結婚指輪、か」

お互いに、これから長い人生を共に歩んで行く事の、約束の象徴だ。

「……随分、長い事、掛かったモンだ」

倉真も、そんな感慨に浸ってしまった。

利知未を始めて見たのは、今日の二次会会場にした、あのライブハウスだ。あの頃の事から、今までの思い出が、凄い速さで頭の中を駆け巡った。

「過ぎてみれば、あつと言う間だ」

これから、長い長い人生。利知未と共に、歩く未来。

その生涯を終える時も、同じ様な事を思うのかも知れない。

倉真がシャワーを終え、直ぐに利知未もシャワーを浴びる。再び、部屋へ戻り、二人で顔を見合わせる。

ルームサービスで、ワインが運ばれて来た。運んでくれたボーイに祝儀袋を渡して、改めて二人切りで乾杯をした。

日付が変わる前には、ベッドへ入った。

二人は、これから先の明るい未来を思い描きながら、確りと、お互いの温もりを確かめ合った。

翌朝、朝食を済ませてチェックアウトをして、空港へ向かった。

お互い、館川家には利知未が、瀬川家には倉真が。これから旅行へ出発する事を、連絡しておいた。

電話口で其々に、倉真を、利知未を、宜しくお願いしますと伝えられ、畏まりました、解りました、と答え、顔を見合わせる。

「同じ事、言われたな？」

「倉真もね」

アナウンスが入り、利知未達は搭乗口へと向かって、歩き出した。

機内では、昨夜の疲れが手伝って、二人とも熟睡してしまった。

目を覚ましていられたのは、機内食が出された時間と、珈琲を飲んでいただけだった。熟睡中も倉真の片手は、利知未の肩へ止まっていた。

空港へ着くと、和泉と由香子が出迎えてくれていた。

「由香子！ 久し振り！」

「利知未さん！ お元気でしたか？！」

つい、久し振りの再会に、抱きついてしまう。

「こっちの生活には、慣れたのか？」

「何度か、長期滞在していたからな。 意外とスンナリと馴染んだよ」

倉真と和泉は、男同士で挨拶を交わした。

「新婚旅行だから、あんまり観光は詰め過ぎない様に考えましたよ？ 倉真さんのご希望通り、グランドキャニオンは観光しましょう」  
利知未との抱擁の挨拶を終え、由香子が二人へそう言った。

「こっちでの予約や何か、全てお任せしちゃったんだよね。 有り難う」

「どう致しまして。 久し振りに二人に会えるから、嬉しくって張り切っちゃいました」

由香子は、チャーミングな笑顔を見せてくれた。

「行きましょう？」  
促されて歩き出した。

会話は、殆ど和泉と由香子が引き受けてくれた。 利知未は相手の言っている事は、解る事も有り、解らない事も時々ある。 解る範囲では二人の通訳を待たずに、自分で積極的に答えて会話に参加した。 倉真は、すっかり感心してしまった。

和泉と由香子のお陰で、初めての海外旅行は、滞りなく進められた。

夜、ホテルの部屋へ引き取ってからは、利知未がホテル側との通訳、兼、連絡係だ。 その点でも、倉真は楽をさせて貰った。

由香子達も、どうせだから二人の時間を、思い切り楽しんだ。  
和泉は、白木家の居候だ。 やはり、由香子の家族の前では遠慮が出る。 その意味でも、この旅行は楽しい時間になった。

大自然の観光は、グランドキャニオン一本に絞った。利知未の興味で、ブロードウェイミュージカルなども観劇した。期間も短い事だ。その他は移動時間へ充てて、丁度良い感じだ。白木家の牧場にも、チラリと遊びに行かせて貰った。最終日に、土産物を準備した。それから由香子達に見送られて、再び機上の人となる。

日本へ戻って、まずは館川家へ土産を持って伺った。空港からの直行だ。土産はなるべく小さな物で、纏めて来た。それでも紙袋四つ分だ。館川家、瀬川家、媒酌人・梅野夫妻。披露宴の司会をしてくれた双子や、受付を手伝ってくれた朝美と克己一家に、FOX。

準一、宏治にも勿論、買って来た。ここまでにした家庭には、旅先から絵葉書も、簡単な挨拶を添えて送っておいた。

他にマスター一家と、里沙。倉真の工場の社長一家と、其々の職場への土産。利知未は、個人的に香や透子、貴子と、アダムへも準備した。

慶弔休暇、最後の一日は、あちらこちらへの挨拶回りに忙しい。

全ての用事を終らせて、七月四日の夜。二人は漸く、本当の意味での人心地がつけた。

「流石に、疲れたな」

「そうだね。後は由香子達へ、お礼の手紙を送れば、完了だ」  
ソファに凭れて、思い切り伸びをした。

「晩酌、する？」

「それよりも、のんびり風呂へ浸かって、一休みしたい所だな」  
「じゃ、お風呂、準備してくるね」

時計を見て立ち上がる。夜九時前だ。

今日は朝から、あっちこっちと忙しかった。アパートを出たのは八時前だった。それから丸々、十二時間。

風呂を簡単に洗い、スイッチを入れてリビングへ戻った。

「もう少し落ち着いたら、温泉にでも、行こうか？」

「金、掛かるだろ」

「日帰りで」

「そうだな」

久し振りに、ツーリングも良いかも知れない。

「俺のバイクでの、最後のツーリングにするか」

倉真が、そつと呟いた。利知未は、耳を疑ってしまった。

「……廃車に、するの？」

「そろそろ、寿命だ。次は車にするよ」

「……倉真は、それで良いの？」

「仕方ない。……思い出は、山ほどあるバイクだけだな」

少し目を伏せてから、倉真が顔を上げる。隣へ静かに、利知未

が腰を下ろした。倉真は、利知未を引き寄せる。

「これから先、車の方が良いだろう？ その内、陣痛が来たお前を

急いで病院へ運ぶ様な未来も、直ぐソコだ」

「……でも」

「お前を守るって、約束しただろう？」

「車が無くて、守って貰えるよ？ きつと」

「お前だけじゃねーよ。……ガキが出来たら、その子の為にも、足

は車の方が便利だろ？」

「バイク、乗りたくなったら、どうするの？」

「お前の、貸してくれ」

「……それは、構わないけど」

利知未が、寂しそうな顔をしてしまう。倉真は自分の寂しい感慨を抑えて、優しく笑いかける。

「意志表明だよ。あのバイクも確かに大事だが、お前は、それ以上に大事な俺のカミさんだ」

利知未の目が、一気に熱を持つ。

瞬きをした瞬間、温かい物が流れ落ちてしまう。

「お前が泣くな」

「……だって、……凄く、嬉しくて……。倉真の、言葉が……」  
手を上げて、顔を覆って、涙を隠した。

倉真は、その利知未を確りと抱き寄せ直した。

「準備が整ったら、早いとこ俺たちのジュニアを、産んでくれよ？」  
倉真の言葉に、利知未は小さく、けれど確りと一つ頷いた。

「……お金、貯めないと、ならないけど」

「頑張つて稼ぐ。子供育てながらだって、どうにかして金は貯められるだろ？ ……俺は、一日も早くに、お前の夢を叶えてやりたいんだ」

「……倉真の夢より、先になっちゃうね」

「順番なんか、どっちだって構わないだろ？ 俺の親父が店を持つたのも、俺が生まれた頃だ」

「…うん」

涙を流したままで、利知未は小さな笑顔を見せた。

時が流れて、一年後。

倉真が二十七歳。利知未が、二十八歳の誕生日を迎えて、間もない頃。



産婦人科の病棟へ、嬉しそうな顔をした訪問客が、引つ切り無しに現れる。

「この子は、利知未さんに似ているのかしら……？」  
新生児の顔を覗き込んで、義母が、心から嬉しそうな笑顔を見せる。

「お義姉さんは、倉真に似てると言っていましたよ？」  
母親となった、利知未が。

愛しげな笑顔で、隣で安らかな寝息を立てている長男を、見つめている。

「そうかしら？ 倉真はもう少し、腕白そうな目をしていたけれど」  
「私も、かなりヤンチャそうな顔を、していたそうです」  
「そうなの？ ……でも、本当に、まあ……」

まさか、これ程早くに、初孫の顔を見つめる日が来てくれるとは……。

「小さな手を、確りと握り締めて……」  
義母は幸せそうな笑顔を浮かべて、初孫を見つめている。

仕事を終えた倉真が、夕方になって、やって来た。

「予定は、明日だったんだけどな」  
渋い顔をしている。 …… 明日ならば、休日だったのに。  
けれど子供の顔を見た途端、その強面の顔が一変してしまった。

大切な、宝石に手を伸ばすように、そつと。 その大きな手のひらを、息子の頬へと近付けた。

「凄く、元気なの。 さっきまで大泣きして、大変だったんだから」  
起こさないでね、と、利知未に小声で注意された。

子供からそつと手を引いて、利知未を改めて見つめた。

「……有り難う」

一言、そう言っ、身を屈めて利知未の額へキスをした。

「……あたしこそ、有り難う。一番嬉しい、プレゼントだよ」

利知未からも倉真の頬へ、軽くキスを返した。

子供が生まれたのは、結婚の翌年、六月二十六日の事。

一年目の結婚記念日には、親子が三人。揃って、ささやかなお祝い。

息子の名前は、二人で相談をして、『一真』と、名付けられた。

それから暫らくの間、倉真の館川家では。

新しい命の誕生を、心から祝ってくれる友人達が大勢、遊びに来てくれた。

賑やかに、日々は過ぎる。

これから先には、まだまだ、やらなければならない事も、沢山ある。倉真の夢を実現する為に。

利知未は育児休暇を終えてから、再び外科医として、働き始める。

今、アパート外の駐車場には。

昔から変わらない、利知未のバイクと……。

……倉真の、普通車が一台、止まっていた。

二人の、長い、長い、未来への夢は。

たたた今、始まったばかりの、新しいStoryだ。

二〇〇六年 十一月十三日(2008.5.13 改) 利知

未・番外 5 ラスト・ストーリー

《そして、結婚へ……》 あなたは私の

世界  
了

長らくのお付き合い、本当にありがとうございました。心から、お礼申し上げます。 > (——) <

利知未と倉真の物語は、ここで一端、幕を閉じます。この子達を追いかけて、早二年三ヶ月が、経とうとしております。その間に、作者自身の環境や考え方も、色々と変化をして参りました。

この、長い長いストーリーを書き上げた根性と努力を、自分自身で労ってあげたい気分です。

また、いつか。もしかしたら、子供達のストーリーを書くかもしれません。（まだ分かりませんが）その時は、また、可愛がつてあげていただけたら、嬉しく思います。では、また別のお話しでお会いいたしましょう。

本当に、ここまでのご愛顧、ありがとうございました。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2727e/>

---

あなたは私の世界 （利知未シリーズ番外5）

2010年10月9日20時51分発行